# 「インド晴天日本人会」

小林祐介

## はじめに

インド、アーメダバード。

インドの有名な都市を挙げてみる。首都デリー、商都ムンバイ（ボンベイ）それにＩＴ産業で有名なベンガルール（バンガロール）。観光地ならゴアやバラナシの名前が挙がるかもしれない。パキスタンと国境を接するインド西端のグジャラート州、その最大の町アーメダバードを知る人はどれだけいるだろう。僕自身インドでの仕事が決まってから地図で場所を探したぐらいである。

日本ではそれほど知られていない町に僕は住んでいた。

アーメダバードは、デリー、ムンバイ、コルカタ、チェンナイ（マドラス）、ベンガルール、ハイデラバードに次ぐ人口６百万を擁する大都市である。グジャラート州はインド独立の父ガンジーの出身地ということで知られている。さらに現モディ首相の出身地ということでグジャラート州が近年注目を浴びている。

モディ氏は２０１４年5月の総選挙でインド共和国の第１８代首相に選ばれた。首相の座に就く前は、約１０年間グジャラート州知事として積極的にインフラ整備を進め、海外から多くの製造業の投資を呼び込んだ。グジャラート州はインド発展の成功モデルとされ、モディ首相は「メイク・イン・インディア」を合言葉に全国レベルで改革を進めようとしている。

アーメダバードで暮らしていると、停電もなく道路も他の町より整備されていると確かに感じる。

それでは日本人にとって住みやすい町か？実はそうでもない。

まず禁酒の問題。

グジャラートはインドの中でも数少ない禁酒州の一つ。リカー・パーミット（酒類許可証）がなければお酒を買うことも所持することもできない。ホテルやレストランで飲める場所は一切ない。リカー・パーミットを取って家で飲むしかない。それでも1カ月に購入できる数量に限りがあるので大酒飲みだとかなり苦しい。

そして食事の問題。

インドはもともとベジタリアン（菜食主義者）が多い。地方に行くほどこれが顕著になる。スーパーマーケットに肉・魚・玉子などのノンベジ・フードは置いていない。市内に何店舗かある専門店に行って手に入れるしかない。日本の食料品を扱っている店など当然ない。デ

リーやムンバイで見かけるような洋食レストランも少なく、食の楽しみはほとんどない。

苛酷な環境にも関わらず、日本人の居住者が近年増えている。製造業をはじめとして日系企業が投資を行っているため駐在員の数が増えているのだ。工場建設が続いているため建設業関係者も多い。アーメダバードに暮らす日本人のほとんどは単身赴任者。家族を日本やデリーに置いて生活している。それに大学で芸術や建築を学びに来た留学生たち。これがアーメダバードに暮らす日本人の実態である。

４１歳を迎えたばかりの僕は２０１４年2月末から１３カ月をアーメダバードで過ごした。インドの会計事務所に勤務して日系企業の税務や会計監査に携わりながら、仕事や私生活で多くの日本人と知り合い、交流を深めた。そしてアーメダバードに日本人会を作ることに深く関わってきた。

これはそんな僕の目を通したアーメダバード日本人会の物語である。

## 第１章　３月　ニュー・カマー（新入り）

エア・インディアＡＩ１０機は夜もだいぶ更けたアーメダバード空港に降り立った。機内が慌ただしくなり、周囲でシートベルトをカチッと外す音が聞こえる。やがて乗客の何人かが立ち上がり、通路に人があふれ出し、頭上の荷物棚からリュックやカバンやキャリーバッグやらを取り出し始める。気の早いインド人は携帯のスイッチをオンにし誰かと話し始めている。空港に迎えに来ている家族や友人なのだろうか。やがて僕も乗客の流れに沿って機内の通路を抜けていく。ボーディング・ブリッジを抜け空港建物に入ると、天井からの照明に白く輝く床のタイルが目に入る。無機質な感じがするにせよ想像していたより清潔そうなところだ。空港だから無機質であっても別にいいのだろう。

入管手続をスムーズに終え、無事ターンテーブルに流れてきたスーツケースを受け取ると、いよいよアーメダバードの町に出る。どんな町なのだろう?ちゃんと迎えの車は来ているだろうか。

不安と緊張を抱えながら到着ゲートの外に出ると迎えの人たちがひしめきあっていた。インド人が抱えるネーム・ボードを一つ一つ確認していく。

「あった！」

小柄なインド人ドライバーが抱えているボードに「ＥＹ」という２文字が大きく踊っていた。その下にスペル通りの僕の名前がある。うちの事務所も頼もしいなと思う。これで無事にホテルまで到着できそうだ。

スーツケースを積み込んだ車はかなりのスピードで走っていく。ドライバーはやたらとクラクションを鳴らす。街路樹が繁る２車線の道路の中央に白いラインが引かれているのだが誰も車線通りに走らない。車やバイクの数がやたらと多い。親子４人連れで乗り込んでいる単車が走っている。前からガソリン・タンクの上に子供、スロットルを握るお父さん、もう一人の子供、お母さんの順だ。トラックやバスは古い車体から黒い煙を吐き出している。

「まあ、インドもそんな感じだよな」と僕はつぶやく。

やはりアジアそして新興国の空気を感じる。

暗いせいか町が雑多だとは感じない。集合住宅も商店もコンクリート造の建物ばかりが

目に入る。商店の看板も英語が多く安心する。「ANAND SWEETS」。どんなお菓子を売っている店なんだろうか？

道中旧市街を抜ける時に牛の姿が目に入った。一頭だけでなく何頭もいる。寝そべっているやつ、草を食んでいるやつ。神様の乗り物である牛を崇めるインドならではの光景だ。数多く並ぶ屋台をすり抜けるように車は走り橋を越えていく。

「エリス・ブリッジ？」

「イエス、サー」すぐさまドライバーが答える。

川幅はかなり広い。５百メートルはあるだろうか。川沿いの遊歩道の照明がコンクリートで覆われた護岸を照らし出している。橋を渡ってしばらく行ったところで車が停止した。アパートが決まるまでしばらく仮住まいすることになるホテルの前だった。

今日一日起きたことを朝から振り返ってみる。

妻と両親に見送られて関西空港を出発したのが今日の朝。同じ日の出来事だと実感のないままベッドに寝転がる。

「これからこの町でやっていくんだよな」

先のことがあまりに真っ白で気負いも不安もない。

２０１４年1月、僕はそれまで勤めていた監査法人を退職し、インドの会計事務所で仕事をすることに決めた。どちらも「Ernst & Young（アーンスト・アンド・ヤング、略してＥＹ）」という世界的なグループに属しているが資本関係はない。日本から派遣される駐在員と違い、僕はＥＹインドと直接の雇用関係にあるので、何年かして前の監査法人に戻るということはない。

僕は４１歳の公認会計士であるが、監査法人に入所したのは３４歳の時だ。それまで地元商工会議所の職員として中小企業の支援に携わっていた。公認会計士試験の制度が大きく変更されたその頃、商工会議所で働きながらアカウンティング・スクール（会計専門職大学院）を卒業した僕は、その年初めて受けた試験に運良くパスしてしまった。今後の人生は会計と税務を芯に置いて仕事をしていくことに決めた。

それからいろんなことがあり、ついにアーメダバードという町まで流れ着いてしまった。インドまで来てしまった以上、先のことを深く考えても仕方ない。明日の初出勤は余裕を

もって出発できるよう、目覚しをもう一度確認して眠りについた。

翌朝、ホテルの前に待機しているオート・リキシャに声を掛ける。

「アンバワディのガソリンスタンドまで」

「オッケー、サー」という言葉が返ってきたので後部座席に乗り込むと、オート・リキシャはすぐに走り出した。

いくらくらい請求されるのかなと思っていると、降り際に「３０ルピー」という返事が運転手から返ってきた。ぼられているかどうかはわからない。計算すると片道６０円もしないので、まあそんなもんかなとうなずく。

オート・リキシャは屋根つき窓なしの３輪の乗り物で東南アジアでもよく見かける。バイクに座席と屋根を取り付けただけの代物なので、段差のある場所ではかなり揺れる。アーメダバードのオート・リキシャは運転席の横にメーターが付いている。メーターは距離を表示しているだけなので、乗った距離に対して運賃がいくらになるかは運転手の返答次第ということになる。オート・リキシャはこれから何度もお世話になるのだが、走行距離と運賃が一覧になった料金表を示す誠実なドライバーにもたまに遭遇した。他の町よりボラれることはあまりないという。それでも毎日乗るのだから距離と運賃の相場感は養っておいた方がいい。

始業より３０分以上早く到着したせいか、事務所には誰も職員が来ていなかった。受付のガードマンに促されてロビーのソファに腰掛けて待つことにした。

しばらくして出勤してきた一人が事務所の奥に入って行き、戻ってきてこう言った。

「May I Help You?」

見上げると、理知的な雰囲気の細身の男性が人懐っこい笑みを浮かべていた。

僕はアーメダバード事務所に配属されたことや、今日が初出勤であることを彼に伝え、ありがとう、しばらく待っていますと返事した。

それから２０分もすると事務所の職員がぽつぽつ出勤してきた。そのうちの一人に導かれ、僕はいくつかある会議室の一つに入った。少しおなかが膨らみ始めた人事担当者からいくつかの書類にサインするように言われ、パソコンと文房具を受け取って与えられた席に着いた。

「ラジーブです」
隣の男性が声を掛けてきたので向くと、さっきの細身の男性だった。
僕も慌てて名乗り、先ほどはどうもとお礼を述べた。そしてアーメダバード進出の日系企業をサポートするため配属されたこと、日本では監査業務に従事していたことなどを説明した。
ラジーブがコンサルティング部門に属していること、大学時代に大阪で数カ月間留学していたこと、僕と2つしか歳が離れていないことを知った。しばらく話したあと、困ったことがあればいつでも言ってくれというようなニンマリ顔をこちらに向けて席を立って行った。

ラジーブが席を立ったあと、ムンバイ事務所の早川さんに電話を掛けた。うちの会計事務所はデリーとベンガルールにも日本人を置いている。同僚の早川さんはインド在住歴5年でインド人の旦那さんがいる。早川さんは公認会計士ではないが、商社などの勤務を経て一年前からムンバイ事務所で日系企業のサポートに就いている。
「昨日こっちに着いて、今日が初出勤です」
「アーメダバードはどんな感じですか？」電話越しに早川さんは喋っている。
「まだよく判りませんけど、思ってたより町はきれいですね」
「もっとごちゃごちゃしてるのかなと思ってました」と僕は続けた。
「入所してすぐの頃、一回だけアーメダバードに出張したんですよ」と早川さんは言った。
「半日しかいなかったのであまり記憶にないんですが、お酒飲めないって聞いているので正直あんまり行きたくない場所ですよね」と嗤いながら続ける。
「連絡事項ですけど、南さんという方がジェトロのアーメダバード事務所に新たに赴任されたようですよ。ジェトロのムンバイ事務所で聞いたメール・アドレスを後で送りますね」
「助かります。さっそく挨拶に行きますよ」
進出を考えている日系企業はまずジェトロを訪問する。きちんと表敬訪問しとかないといけない。
「それと、アーメダバードにも日本食レストランがあるらしいです」

へえ、こんな町に日本食レストランがあるのか。

「店の名前とか場所とか判ったら教えてもらえます?」と早川さんにお願いした。

「オッケーです」

海外旅行だと現地の食事を楽しむため日本食を食べることはない。この時点では、外で日本食を食べる必要性をまったく感じていなかった。まあクライアントを案内しないといけない時もあるだろうから、一度くらいは覗いてみるかと軽く思っていた。

最初の一週間、僕は生活と仕事のセットアップでいっぱいだった。まず住居探し。時間が経つほどホテルの宿泊代がかかる。事務所から紹介された不動産屋と何軒か物件を回り、事務所にほど近い３ＬＤＫのフラットに決めた。家主は化学者として政府機関で長年勤務していた。日本へ何度も出張していて親近感を持ってくれている。保守的なアーメダバードでは、宗教的な理由からベジタリアン（菜食主義者）以外に部屋を貸さないという人も多いのだから。

住居探しと並行して外国人登録にも追われた。インドに6か月以上滞在する外国人は、入国から2週間以内に最寄りの外国人登録事務所で外国人登録を完了しないといけない。期限を過ぎると罰金が科せられる。デリーからやってきたエージェントと外国人登録事務所が入る地元警察署に出向く。隣国パキスタン人の家族連れであふれかえる待合室で何時間も待たされたあと、担当係官との面接を無事終えたときにはぐったりしていた。

それから、携帯電話の申込を行ったり、「Permanent Account Number（納税者番号）」の申請を行ったりした。納税者番号がなければ銀行口座を開くことができない。銀行口座が開かなければ給与の振込を受けることができない。当局に申請書類を郵送し手元に納税者番号カードが届くまで2週間はかかる。銀行口座の開設も1週間はかかるので、その間は手持ちの現金を両替してしのぐしかない。

手続の合間に妻や両親、日本の友人に、元気にインド生活をスタートしたことを報告する。ジェトロの南さんとのアポも取り付けなくては。早川さんから送られてきたアドレスにメールを入れると、次の木曜日でどうでしょうかと返事がきた。生活のセットアップ手続が遅々として進まないことにイライラを覚えながら一週間が瞬く間に過ぎていった。

＊＊＊＊＊

アーメダバードで初めて迎える週末、僕は早川さんから聞いた情報を頼りに日本食レストランに行ってみた。オート・リキシャに飛び乗り、最も人が多そうなランチタイム真っ盛りの午後1時に着くようにした。

日本食レストランを小バカにしていた一週間前とは真逆で、日本あるいは日本人というものにかなり飢えていた。町では外国人を一切見かけない。アジア人に限らず欧米人でさえも。食事もホテルのメニューに肉料理はない。せいぜいオムレツかゆで卵が食べられる程度。まだ勝手がわからないので、昼は事務所近くの食堂からランチ・ボックスを取り寄せていた。「定食」を意味する北インドのターリー。3種類の野菜カレーに、ライスと、全粒粉の小麦粉をこねて薄く焼いたチャパティが付く。1百ルピーなので値段は申し分ない。ただ、肉が一切入っていないベジカレーが毎日続くと、欲求不満は溜まる一方だった。

「豚しょうが焼定食！」

席について一通りメニューを眺めてそう叫んだ。

「たむら」という名前の日本食レストランは「アクロポリス」という名前だけは小洒落たモールの2階にあった。名前だけ小洒落たというのは、開業している店舗が少なく人も閑散として、警備員や店の従業員が所在なげに突っ立っているのが物悲しく見えたからである。

店内は5つほどのテーブルしかなく20人も入れば一杯になってしまう。開業してまだ年数が経っていないせいかテーブルや椅子は真新しい。少し古そうだが日本の週刊誌やマンガ本も置いてある。一番奥の座席に腰かけていたがまったく客がいないので、無機質な部屋に一人取り残された感じになった。それでも運ばれてきた豚のしょうが焼を夢中になって頬張った。肉の塊を食べるのはずいぶん久しぶりに思える。

「ここは日本人がたまに来るんですか？」食事が一段落してから、マスターと思しき男性に聞いてみた。

「イエス。水曜日に日本人が集まります」一見浅黒の日本人に見えなくもないインド人のマスターはそう答えた。続けて、

「だいたい夜7時ね」と念押しするように言った。

そうか。じゃあ次の水曜日の夜もう一度トライするかと僕は思った。

「じゃあお会計ね」

マスターが持ってきた勘定書を見ると、税が乗って８３０ルピーとなっていた。かなり割高だったなと思いながら、書かれた金額を支払って席を立った。結局店に入ってから出るまで誰一人として店に入ってくる者はいなかった。

ようやく水曜日になった。夕方に雑用が入ったせいで事務所を出たのは６時半を少し過ぎていた。通りに出てオート・リキシャを拾い、夕暮れでごった返す道を「アクロポリス・モール」に急いだ。

到着するのに３０分もかかった。３日前と同じように２階に上り、通路を店に向かって歩いていく。前回と違ってガラス張りの店内にいくつもの頭が見えた。これから初対面の人たちと話をすることに少し気が重くなる。でもここまで来たからにはと、僕は「たむら」の分厚いガラス扉を押した。

５名というのは店に入ってすぐに確認できた。店の奥にある４人掛テーブルは埋まっている。その手前のテーブルには一人しか座っていないが、さてどこに座るべきか。店の中でしばらく立っている僕を見て、奥のテーブルの最奥に座っていた男性が立ち上がり、温かみのある物言いで「どこでも空いているところにどうぞ」と空いている座席を丁寧に指し示した。年齢は５０歳を超えていそうだがしっかりした黒髪が七三に分かれている。

マスターが言っていた日本人の集まりはこれに違いないと確信して、僕は促されるまま一つ手前のテーブルの空いた席に腰を落ち着けた。

「初めまして、ＥＹの小林と申します。先週アーメダバードにやって来ました」と言って懐から名刺入れを取り出した。

「それではまた名刺交換をしますか」と先ほどの男性が言った。

「音無製作所の細江です。アーメダバードでは電源のバックアップ装置を作ってます。正式には無停電電源装置と言うんですけどね」技術者然とした顔立ちに温和な笑みを浮かべている。

日本を代表する電機メーカーの音無製作所はうちのクライアント先でもある。アーメダバードにも子会社を抱えていると聞いていた。

「同じく音無製作所の江本です。細江さんと同じ会社です。細江さんはエンジニアです

けど私は営業統括です」

細江さんの一つ手前に座る銀髪の大柄な男性から名刺を受け取った。江本さんが最年長のようだ。一度定年を迎え再雇用で赴任されている。水曜日にたむらに来ることと週末のゴルフがアーメダバード生活の息抜きらしい。

３人目の男性はショート・コンチネンタルに髭をまとめあげていた。先の２人よりずっと年齢が近くあるいは僕より年下かもしれない。

「ジェトロの南です。アーメダバード近郊の日系工業団地を担当しています」

南さんからそう紹介を受けて、僕は「あっ、明日お会いしますよね？ＥＹの小林です」と驚きながら返答した。すると南さんも合点がいったのか、そうですねと返事があった。明日会う段取りになっているせいかお互い照れのようなものがあり、会話はそれだけで終わった。

あとの２人のうち一人は山原さんという女性。日系企業の駐在員向けのサービス・アパートメントやドライバーの手配をする会社に勤めている。江本さんが住むアパートも山原さんの会社が管理している。このレストランの隣が事務所なのでいつでも気軽に寄ってくださいと明るい声で言う。

僕と同じテーブルに着いていた最後の一人はトシさん。インドの化学メーカーに勤務していているエンジニア。少し変わっているのは日本よりアメリカでの在住歴が長いこと。アメリカの大学に進学して現地のアメリカ人女性と結婚し、家族はアメリカで生活している。

「知り合いのインド人社長に請われて単身赴任しているんだよ。僕のことはトシと呼んでください」とハスキー声で言う。

トシさんは毎日スカイプで奥さんと話しているそうですよと山原さんが茶化す。

「もう注文されましたか？」

みなさん注文は終わっていますのでと細江さんから優しい気遣いを受ける。

僕はまだですと答え、慌ててさっとメニューに目を走らせ、「サバ塩焼定食！」と厨房に向かって叫んだ。何となく魚が食べたかった。

「あっ、サバ塩ね。今日も売り切れなんですよ」と江本さんから待ったが入る。

「私もね、さっき頼もうとしたら無いって言われて。これで２週連続ですよ」と大きな体を震わせながら嗤った。

「じゃあマスター、豚しょうが焼にして」と僕が言うと、すぐさま「オッケー、サー」という声が小さな店に響き渡った。

注文した料理がそれぞれ運ばれてくる。料理が来た人からお先にと言って箸をつけていく。その間もアーメダバードに関するいろんな話が飛び交っている。

「リカー・パーミットは3月中に取ると少しお得ですよ。2ユニットが追加でついてくるんです」と細江さんがレクチャーしていると、

南さんがどういうことですかとグッと身を乗り出す。

「居住者用のリカー・パーミットは3月末が有効期限なんです。3月中に申請すると、4月から一年間有効のパーミットがもらえます。さらに申請月の3月分として、半月分2ユニットもおまけで付けてくれるんです。だから3月は、今までのパーミットで4ユニット、おまけのパーミットで2ユニット、合計6ユニット買えるんです」と細江さんが得意げな顔を見せた。

よく話を聞くと、グジャラート州ではリカー・パーミットがないとお酒を買えない。そしてリカー・パーミットを持っていても毎月の購入量に制限がある。それがひと月4ユニット。1ユニットはそこに含まれるアルコール度数を勘案して、ウィスキーなら1本、フルボトルのワインなら3本、ビール大瓶なら10本に相当する。つまりビールだけならひと月に大瓶40本が購入量の上限ということになる。

「でもまあ40本もビール飲まんけどな」

僕は運ばれてきた豚しょうが焼を頬張りながら、何本ものビール瓶が床に転がる様子を思い浮かべていた。ついでに説明するとリカー・パーミットは観光者用と居住者用の2種類ある。観光者用は空港到着後の観光案内所で取得できる。ただし有効期限は6週間しかない。僕たちのように長くアーメダバードに住む場合は、役所で居住者用のリカー・パーミットを取らなくてはならない。役所は英語が通じないのでインド人スタッフを連れていかなければならず、細江さんの話ぶりからするとちょっと面倒くさそうな感じがした。

酒の話で盛り上がっていると、たむらの扉が急に開いた。

入ってきた小柄な女性は「あの、日本人の集まりがあるって聞いたんですけどここがそうでしょうか？」とこちらに向かって訊ねる。

「そうですよ。どうぞ」細江さんが席に促す。

「遅れてすいません、海原と言います。まずはみなさまにご挨拶した方がよろしいでしょうか？」

「大丈夫ですよ。ここはただ水曜日に人が集まってご飯を食べているだけですから」と細江さんが答える。続いて江本さんも言う、

「正式な会でも何でもないんです。だからまったくの自由なんですよ」

「何でしたらまた名刺交換しますか？」との江本さんの一言で全員が席から立ち上がり、先ほど僕がたむらに来た時と同じように名刺交換が始まった。

「青年海外協力隊の日本語教師として国際協力機構（ＪＩＣＡ）から派遣されているんです。来週からアーメダバード経営者協会（ＡＭＡ）で授業を始めます」

そういえば今朝ラジーブが見せてくれた朝刊の紙面に日本語教室の話が載っていたっけ。その話をすると海原さんは、教材がまったく無くて一から作らないといけないんですよと困った顔を見せた。しかし先ほどの山原さんといい、この小柄な海原さんといい、女性が単身でアーメダバードにやってきて仕事をするなんてパワーがあるなと感心する。

しばらくすると海原さんがオーダーした定食が運ばれてきた。早く来たメンバーはもう食事を終え、マスターが湯呑に並々と注いだ熱い番茶を啜っている。

店に入って一時間半ほど経ったろうか。しばらくするうちに誰かが「お勘定」とマスターに告げた。マスターは一人一人に勘定書を持ってくる。それぞれ自分のところに来た勘定書が間違いないかどうか確かめ個別に精算していく。僕も前回と同じ８３０ルピーを支払って精算を終えた。

それぞれ席を立ち扉を開けて店の外に出ていく。ある者は待たしている車に乗り込むため地下駐車場へ。また別の者は外で車を待つかオート・リキシャを拾うためモールの外へ。僕も帰りのオート・リキシャを拾おうとモールの外に出ようとしたら、すぐ横を歩いていた南さんが「もし何ならこれからうちで飲みませんか？」と話しかけてきた。

もちろんこのあと何の予定もない。「いいですよ」と僕は即答した。

「じゃあ、うちの車で行きましょう」と南さんは言って、ドライバーを呼び出すためポケットの携帯電話をまさぐった。

しばらくしてトヨタのミニバンがモールの入り口に横付けされた。さっきも誰かが同じ車に乗っていったな。この「イノーバ」という車種は日本人駐在員の間でかなりポピュラーらしい。

どうぞと促されて南さんと僕は後部座席に乗り込む。モールから発進した車はＳＧハイウェイという３車線の道路を流れるように走っていく。レストラン、ホテル、オフィスビルなど比較的最近建てられた物件が連なり、ここがアーメダバードのホット・スポットだと感じさせる。僕の事務所とアパートはもっと旧市街寄りにあるため新旧の建物が混在している。ハイウェイを車で走っていると発展する町の息吹を感じる。

「着きました」と南さんが言った時、車は真新しい１０階建マンションのゲートに入ろうとしているところだった。ゲートにはガードマンが控え車を確認して敬礼している。車止めで停車したのを確認してドアを開け、南さんの後ろについてマンションのエレベーターに向かった。

南さんのマンションは素晴らしく豪華だった。大理石のフロアにところどころカーペットが敷かれ、寝室は４つもある。リビングにコの字に置かれたベージュのソファはゆうに７人は座れる。リビングと反対側にはキッチン。キッチンまでの距離が実に長い。グラス一つ取りに行くのさえ億劫になるくらいだ。リビングとダイニング・キッチンだけで５０畳はありそうだ。南さんは単身なので寝室３つは空いたままだ。

「どうぞソファで座っててください」

南さんはキャビネットからグラスを選んでいる様子だ。

「毎日寝る場所変えられますやん」

遠くから僕は面白くもない冗談を返した。

「ワインでいいですか？まだリカー・パーミット取ってないのでデリーから持ってきたストックしかないんですよ」と南さんが訊いてきた。

「こちらは何でもオッケーです」僕は胸を張った。

赤ワインのボトルとワイングラス２つを抱えて南さんがソファまで戻ってくる。

「まあ明日会うことになってますけど今日でも構わないでしょう」

南さんはグラスにワインを注いでいく。

『たむら』でもお話しましたけど、うちはアーンスト・アンド・ヤングという会計事務所なんですよ。略してＥＹです。同僚の早川が、ジェトロのムンバイ事務所さんから南さんのアーメダバード赴任をお聞きして、それでメールさせて頂きました」

「アーメダバードに来てようやく１０日経ったとこです。日本人に会ったのは今日初め

てですよ」と笑いながら僕は経緯を説明した。
「僕もアーメダバードに来たのはまだ今週なんですよ。その前は研修でデリーにひと月いましたけど」と南さんが答えた。じゃあお互い似たような状況か。
「会計士さんですよね？」続けて南さんが訊く。
「会計事務所で日本人の公認会計士をアーメダバードに置くのは、たぶんＥＹさんが初めてですよ」
「そうですか。アーメダバードはこれからマルチ・スズキさんやホンダさんが進出するということで、うちも誰か置かないといけないと判断したみたいです」と僕は冷静を装って答えたが、内心は同業他社がいないことにしめたと感じていた。
「日本では監査ばかりやっていました。こっちでは監査だけでなく、税務も含めあらゆる面で日系企業のサポートをします」と言ってグラスを掲げた。

「僕は九州の大分に長いことといましてね」と南さんは語り始めた。
「ジェトロの大分事務所で大分県産品の輸出振興をやってました。あと別府温泉の振興もやったりね」
「別府といえば『地獄プリン』。それに『湯の花小屋』も雰囲気あったなあ」
数年前に妻と旅行した時の感想を僕は漏らした。
『湯の花小屋』のある山手と市街地の海辺では気候が全然違うんですよ」
南さんはワインを飲みながら髭に手をやる。
「特に冬場。海辺の町中は晴れているのに山の集落は雪が降ってたりとかね」
「そういえば立命館大学のキャンパスがあったでしょ？」と僕は訊ねた。立命館大学は関西では有名な私立大学。妻との別府旅行中にキャンパスの表示を見て、こんなところにも校舎があるのかと驚いた記憶がある。
「立命館アジア太平洋大学ね」と南さんがすかさず答えた。
「それそれ。学生はいるんですか？」とつい興奮して訊いてみた。こんなところに大学を作って学生なんか集まるのかと妻と議論になったことを憶えている。
空になった南さんのグラスに今度は僕がワインを注ぐ。
それからも南さんとはいろんな話をした。
別府から愛媛県の佐田岬にフェリーが出ていていつかそれに乗りたいと思っていること、日本を出る前の３年間毎月監査の仕事で愛媛県の松山市に出張していたこと、気候や食べ

物そして道後温泉の周りのひなびた雰囲気がすごく気に入ったことを南さんに話した。偶然にも南さんも別府からよくフェリーに乗って松山まで来ていたらしい。松山に親戚がいるとのことだ。

酒が入り仕事と関係ない話をする中で、僕は胸に秘めていた話を今しようと思った。本当はもっと人間関係ができてから話すべきかとも思ったけど、別府と松山の話が僕の背中を押しやった。

「南さん、ちょっと考えていることがあるんですけど」思い切って僕は言った。そして一気に続けた。

「アーメダバードには商工会がないじゃないですか？やっぱりこういう組織はあった方がいいと思うんですよ。よかったら作りませんか？」

少し間があった。

南さんは手に持っていたグラスを静かに脇に置いた。

「僕も考えてましたよ」

初対面の人間にいきなりそういうことを言われて疑う気持ちもあったろう。ましてや僕は会計事務所に勤める人間だ。日系企業を顧客とする以上、商工会を立ち上げて何か利益を得ようとしているんじゃないかと思われてもおかしくはない。

あるいは僕はこう考えもした。他の国や地域ではジェトロ事務所が実質的に商工会を兼ねているケースが少なくない。僕がこう言い出すことでイニシアチブを持っていかれることを懸念しているのかもしれない。

「実は監査法人に入る前は商工会議所の職員を長年やってたんですよ」そう僕は加えた。

商工会を作ることで何か得ることをまったく考えていないと言えば嘘になる。商工会に関わりを持てば日系企業の動向が掴めるのではないかという腹はあった。あるいはパイオニアとなることへの功名心がないとも言えなくはない。しかし商工会議所に勤めていた人間として、何もないところに組織を作ることで、きっと何かいいことがそこに生まれるのではないかという思いを抱いていたのも本当だ。アーメダバードに来る前からそこに商工会も日本人会もないことを僕は知っていた。組織の枠組み作りはこれまで経験してきたことだったし、それをアーメダバードという地にもたらすことが、ある意味僕の使命だと感じていた。

「これからおいおい考えていきましょうか」南さんは静かに正面の壁を見つめた。

悪い風には取られていないと僕は直感した。商工会にしても日本人会にしても当地のジェトロ事務所を巻き込まずにやっていくことは難しい。まずはその必要性を南さんに訴えていくしかない。その夜僕はそう固く思った。

水曜日の夜に南さんと話し込んだせいで翌木曜日のアポイントは自然とキャンセルになった。

しかしその週末、南さんから連絡があり一緒にお昼を食べようということになった。「スワティ」というグジャラート料理の有名レストランが僕の家の近所にある。グジャラート・ターリーといってカレーが何種類かセットなった定食である。オクラのカレー、じゃがいものカレー、いずれもスパイスが効いているのだが同時に甘い。甘いのはグジャラート料理の特徴だと後で知る。

腹が一杯になったのでスワティを出てすぐのところにある「ロー・ガーデン」に案内した。どちらかと言えば無機質なアーメダバードの中で、珍しく緑が多い場所で、僕は毎朝ここを歩いている。

しかしこの日はホーリーという水掛け祭りの前日だったこともあって公園は閉じられていた。公園の入口にたむろする子供たちの顔は黄色や赤の染料でベトベトになっている。色のついた水を誰彼問わず掛け合うのだ。

子供たちが水鉄砲のようなものを手にしているのを目にした僕たちは一目散に公園の入口から逃げ出した。先ほどたらふく食べたターリーが胃から飛び出そうになりながらようやく僕のアパートにたどり着いた。家に入った途端、僕たちは安堵感から腹を抱えて笑いあった。

南さん、いや、髭が目立つからこれから「ヒゲ公爵」と呼ぼう。

こうして僕はアーメダバードで初めての友達ができた。

## 第２章　４月　友だち

４月に入ると気温はグンと上昇しインドは夏に入る。とにかくこまめに水分を摂った方がいいとラジーブから忠告を受ける。ファンを回さないと気持ちよく寝られない。どこにでもある天井から吊り下げるタイプの大型ファン。アーメダバードに来たばかりの頃はブランケットを被らないと寒いと感じた日もあったが、ひと月でずいぶん気候も変わるものだ。

今日はクライアントを訪問する予定。事務所から近いので車を手配せずオート・リキシャで行くことにする。オート・リキシャが走り出して風を受けると暑さでムッとする。

訪問先はゴート製薬。インドの中堅製薬会社ゴート・サイエンスと日本の製薬会社が最近設立した合弁企業である。ゴート・サイエンス社は業歴も長く中東やアフリカに薬剤を輸出している。インドはジェネリック医薬品（後発医薬品）の生産大国である。増え続ける国内人口を背景に将来も有望な産業とみられている。２００８年に日本の製薬会社「第一三共」がインドの大手後発医薬品メーカー「ランバクシー」を買収した。しかし思うように事業を軌道に乗せることができず、第一三共はわずか５年で保有株式を同業他社の「サン・ファーマ」に売却した。インド企業を買収しても利益を生み出していくのは容易なことではない。

ゴート製薬のオフィスはゴート・サイエンス本社建物の４階に入っていた。１階の受付で入館手続を済ます。受付でもらった入館証をかざすと警備員が電車の改札機のようなゲートを開ける。エレベーターに乗って４階まで上がる。

通された応接室で待っていると「どうもお待たせしました」と２人の日本人男性が入ってきた。５０歳過ぎの年配の方はダブルのスーツの襟に触れるんじゃないかと思うようなロングヘア。兜を脱ぎ捨ててざんばら髪になった戦国武者を思わせる。若い方は学生時代にラグビーでもやっていたようながっしりした体格である。

長髪から差し出された名刺をそっと名刺入れの上に置く。遠藤という名前に目を走らせて長髪の方を向く。

「弊所のスタッフが御社の業績評価システムの導入に携わっていると思いますがどんな具合でしょう？」

そう切り出すと、

「ま、ほとんど進んでないですね」とぼやきながら、
「小林さん、その辺何も聞いてませんか？」と挑むような視線を投げかけてきた。
僕は正直にどういうことですかと長髪に訊ねた。

長髪は堰を切ったように話し始めた。
「うちはご存じのようにインドと日本の合弁会社です。そこで従業員のパフォーマンス向上のため新しい業績評価システムを導入しようとしています。これはおたくが持ってきた提案ですよ」
そうだったなと体育会系の若手に向いて念を押す。
「ところがおたくのインド人スタッフはゴート・サイエンスの肩ばかり持ってこちらの言うことを聴こうとしない。これではなかなか進まないですよ」
苦虫を噛み潰したような表情をしている。こちらの出方を待つようだ。若手はこれからどうなるのだろうという表情をしている。

「そうですか、それは申し訳ありません。昨日スタッフと話をしたのですがそういう話は上がってきませんでした。事務所に戻って確認し、今後についてすぐ検討します」
ここは神妙になるより他にない。
すると、
「以前もムンバイからおたくの人間が来て同じようなこと言ってたけど、結局何も変わってないよ」と冷ややかな視線を送ってきた。
あれ？早川さん来ていたのか。
「すいません。とにかくすぐにスタッフと協議します。近日中にご返答致します」と何とか腹の底から絞り出すように言った。

窮地は脱したかと思っていると、
「ところで、小林さんはどこに住んでいるの？」と急に話題が飛んだ。
「ロー・ガーデンです。近いので事務所まで歩いて通勤しています」
「えっ、あんなところ歩いているの？」
少し隈がかかったような長髪の目が丸く開いた。

これは説明が必要だと感じたので一から話すことにした。
「私はＥＹインドとの雇用契約なんですよ。日本からの駐在員のように常時車が与えられているわけではないんです。もちろんクライアント訪問とか必要な時は車を手配できます。場所が近いので今日はオート・リキシャで来ましたけど」
すると長髪が急に憐れむような目つきになった。
「オート？」
「現地採用？アーメダは期限なし？」
物言いまでぞんざいになってきやがったなという思いを腹の奥で押さえながら、
「そうなんです。特に期限は決まっていないんです。インド国内の転勤はあるかもしれませんが」と言った。
日本から派遣された駐在員だと、２年とか３年とか赴任期間の目安があるんだろうなあと思った。
「まー、じゃあ頑張ってくださいよ。何かあればこちらから連絡しますよ」との言葉を残して長髪が席を立った。

礼を言って席を立ち応接室の外に出る。すると「下までお送りしますよ」と若手が追いかけてきた。
エレベーターに乗り込んで若手が隣に立つ。
「ロー・ガーデンですか。今度ご飯でも行きませんか？近くにまずまずいけるノンベジ中華があるんですよ」そう声を掛けてきたので、僕も快諾した。
玄関で見送られながら、
「さっきは失礼しました」とまだ申し訳なさそうにしているので、
「大丈夫ですよ。そんなに気を遣ってもらっても何も出ませんよ」と笑いながらその場を辞した。初っ端のクライアント訪問は少し苦いものになった。

「先週はゴート製薬に行ってきたんですけど結構きつかったですわ」と、ムンバイ空港で早川さんに会うなりそう言った。
空港建物の外に出るとネーム・ボードを掲げた大勢のインド人から一斉に視線を受ける。それらを無視してしばらく歩くとピックアップ・ポイントに出る。早川さんが携帯電話でドライバーを呼び出すと、しばらくして手配していた車がやってきた。

僕はアーメダバード事務所の所属なのだが市場規模がまだ小さいため、ムンバイ事務所の早川さんをサポートするように言われていた。アーメダバード生活のセットアップも一段落したので、これから月2回の割合でムンバイに出張し日系企業を訪問することになる。

彼女はすでにムンバイに5年間も住んでいてムンバイのことを知り尽くしているが、会計・税務のバック・グラウンドがない。逆に僕には会計監査のバック・グラウンドはあるが、インドのマーケットは初心者である。ちょうどよいコンビになるだろう。ムンバイはシーフードも美味しいと聞くし、大きなショッピング・モールもあるらしい。ムンバイへの出張は少し息抜きになりそうだという期待も感じていた。

車は空港の敷地内を抜け町中へ走り出していく。飛行機で一時間しか離れていないのにヤシの木が増えさらに南国に近づく。

「ゴート――そこです。私が前に出張で行ったとこは。『どうしても日本人に来て欲しい』という依頼があってムンバイから呼び出されたんですよ」

「合弁会社設立後のビジネスがうまく行ってないみたいですわ。日本とインドそれぞれの経営陣に考え方の違いがあって、うちのサービスも浸透してないみたい。しんどい仕事になりそうですわ」と、アーメダバード事務所のスタッフから聞いた背景を彼女に説明した。日本側からすれば、うちのやっていることが見えない部分もあるだろうし、理解してもらうように努力するしかないねと話した。

「でも、遠藤さんだったかな。結構キャラきつかったな」と僕は言った。

すると早川さんは急に相槌を打った。

「遠藤さん。そういえば思い出しました。前回の出張ではお会いできなかったんですが、何年か前にムンバイ日本人会の会長をやっていた方ですよ。ムンバイから一度日本に帰国され、それから再びアーメダバード赴任になったそうです。遠藤さんの時代に日本人会の会費が3倍に値上がりしたらしくてトラブルになったそうです。日本人学校の移転費用の積み立てが必要で値上げしたらしいんですが」

意外な話だ。もっともムンバイ駐在時に会っていないので何とも言えないが。

「今から訪問する早稲田商事さんは、今年の日本人会会長をされているんですよ。なので、その辺の話も聞けるかもしれませんよ」と早川さんは言った。早川さんはＥＹに入社する前、早稲田商事で2年間総務の仕事をしていた。

車は空港から北へ２０分ほど行ったアンデリ地区に入っていく。ムンバイは半島状の狭い地形で、半島の先端となる南部は、歴史的建造物のインド門や高級ホテルのタージ・マハル・パレスがある植民地時代からの中心地である。最近は渋滞や高騰する地価を嫌って日系企業のオフィスが北へ移る傾向にある。アンデリはそういった移転先の一つとなっている。

アポイントがあることを受付で伝え奥の応接室に通される。しばらくすると５０代後半の男性が入ってきた。安田さんと言う。まとめあげたシルバー・グレーの髪に銀ぶちの眼鏡がよく似合う。商社マンにありがちないやらしい押し出しがなく紳士という佇まいである。

「久しぶりですね。うちを辞めて一年くらいになりますか。どう、ＥＹさんではうまくやってる?」と早川さんに訊ねる。

「おかげさまで、何とかやっている感じです」と照れたように早川さんが言う。

「こちらは先月アーメダバードに配属された小林です。私と違って会計士です」と笑いを添えた。

安田さんはアーメダバードと聞いてこう切り出した。

「そうですか。実はうちもムンドラ港で検討しているプロジェクトがあるんですよ」

ムンドラか。まだ行ったことがないがグジャラート州西部の巨大な港だとは聞いている。

安田さんはこちらを見据えて続けた。

「インド企業に液化天然ガス（ＬＮＧ）を供給しようとしているのですが、その時にどう間接税が絡んでくるのか知りたくて。私はグジャラート州にまだ足を踏み入れたことがないんですけど、一度現地を見ておこうと思っています」

それからしばらくの間、早川さんと僕はビジネスの流れについて詳しい説明を受けた。液化天然ガスはムンドラ港までタンカーで運搬される。港に横付けしたタンカーからパイプを使って供給するのだが、その時天然ガスを気化しなければならない。液体から気体へ転換する装置は早稲田商事が所有している。転換という行為が加工業務に当たるのかどうかが話のポイントとなる。液体を気化することが加工に該当するのなら、「物品税」という国税が課せられ製造業のライセンスも必要になる。加工に該当しなければ、商品の販売という扱いになり「付加価値税」という州税が課せられる。日本ではどちらも消費税という一括りの税金だが、インドでは製造行為か否かで課せられる税金が異なってくる。国税と

州税は相殺できないため、どちらに該当するかによって会社のビジネスが大きく左右される。一般的な話をしたあと、いったん事務所に持ち帰ってどのような課税関係になるか検討させて欲しいと僕は答えた。

安田さんからの説明や質問とこちらからの話が一段落したところで、僕は日本人会の件について切り出した。

「実はアーメダバードで日本人会か商工会の設立を考えているのですが、いろいろお教え頂けませんでしょうか？」

「ムンバイ日本人会のホームページも拝見しました。今のところアーメダバードはムンバイ日本人会の管轄になっているようですね」と続けた。

安田さんは銀ぶち眼鏡の位置を直しながら口を開いた。

「そうですか。アーメダバードで組織を作られるんですか。いいことだと思いますよ。実はムンバイにはまだ商工会がありません。日本人会の中に商工部会としてぶら下がっている形です。デリーやチェンナイのように、いずれは独立した組織として商工会があった方がいいのかもしれませんが、それは今後の課題でしょうね」そして、

「日本人会の会員は、現在６百名ほどです。グジャラート州からも何名か会員になっておられますよ。会則ではムンバイ総領事館の管轄範囲を日本人会の範囲にするとなっているんですよ。グジャラート州はムンバイ総領事館の管轄範囲に含まれるのですが、これからアーメダバードで日本人会や商工会を作られるようでしたら、まったく異論はありませんし、ぜひ応援しますよ」と続けた。

安田さんからそのようにあと押しされて勇気が湧いてきた。そしていくつか気になっていることについて聞いたところ快く教えて頂いた。

例えば会の運営についてだが、ムンバイ日本人会では安田会長を始め、副会長２名と複数名の理事がいる。副会長のうち１名は、前年度に会長を務めた者が就く慣例になっている。つまりある年に副会長を務めた者は翌年の会長となり、そして翌々年にまた副会長に就くという流れだ。もちろん会長、副会長は総会で選任されるため、必ず流れ通りに進むとは限らないが、いったん副会長に就いた者は会長、そして副会長と、３年間は会の運営に携わることになる。日本人会にとっては安定した組織運営を行うことができる仕組みだ。

早川さんが言っていた会費についても聞いてみた。ムンバイの日本人学校は建物の一角

を借りて運営されている。賃貸物件のため家主が更新に応じなければ契約が終了する可能性があることから、移転費用や移転先に支払う保証金を積み立ててておかなければならない。早川さんから聞いた通り数年前に会費が値上げされ、個人会員は年間６百ルピー、法人会員は日本人駐在員の数に応じて年間３万ルピーから１２万ルピーとなっている。会費は会長名義の口座で管理されているため、今後は日本人会名義の口座を作ることを検討している。そのためには日本人会を法人化しなければならず、法人化すると税務申告や会計監査が発生するため運営コストも増加するという問題もある。

僕は安田さんにこう話した。アーメダバードでは会費を最低限にして何かイベントをやる度に受益者負担の形で頭割りするようにし、できるだけシンプルな運営を考えていますと。あまり形式張らず組織も最初はシンプルな形を考えていますと。

なるほどといった様子で安田さんは頷いている。そして一枚の資料を差し出した。

「これは『全インド日本人会・日本商工会合同連絡会』と言って、年一回デリーで開催されているものです。毎年１１月末か１２月頭くらいかな。インド各地の日本人会と商工会が集まって、一年間の活動報告をしたり情報交換をしたりしているんですよ。私も去年参加してきました」資料には合同連絡会の内容と各日本人会・商工会から参加した会長名が記されている。

「会を作られるなら合同連絡会の参加費用をどうするか考えておいた方がいいですね。ムンバイではこれまで会長が負担してきたので、これも役目と思い私も自腹で行きましたが」

安田さんは眼鏡の奥から笑みを見せ、資料はどうぞ差し上げますと言った。

早稲田商事での会議を終え早川さんと僕はＥＹのムンバイ事務所に向かった。ムンバイ事務所のあるダダール地区までは、いったん空港まで戻り、さらに半島先端の南を向いて進む。途中片側４車線もある道路を走るのだが車の数が非常に多い。アンデリから１時間もかかった。

ムンバイでは黒色に塗られた「アンバサダー」という車種のタクシーが数多く走っている。丸みのあるフォルムにまん丸のヘッドライト。アンバサダーは１９５０年代のイギリス車をベースに作られた乗用車。その後インドの国産車として長年生産されてきたが、中身はほとんど進化していない。１９８０年代にスズキ自動車がインド市場に参入してから、低燃費小型のアルトという車種が登場し市場を席巻していった。もはやクラシック・カー

と言ってもいいアンバサダーも今年に入り生産終了が発表された。

ＥＹムンバイ事務所は「ザ・ルビー」という小粋な名前のオフィスタワーの１４階に入居している。１４階から外のデッキテラスに出ると海からの潮風を顔に受ける。ルビーの正面は弓の形をした湾になっていて湾の端と端を結ぶハーバー・ブリッジが最奥に見える。渋滞緩和のため日本からのＯＤＡ資金で橋が作られたそうだ。２千万人の人口に対し土地は圧倒的に不足している。新しく建設されるオフィスビルやマンションは２０階建以上の高層建築が多い。そんな建物が市内のあちこちに乱立している。

夕方まで事務所で仕事をしてから、早川さんと僕は近くのショッピング・モールに向かった。「フェニックス・モール」といってムンバイで最新の商業エリアらしい。車を降り建物に入るのに厳重なセキュリティ・チェックを受ける。金属探知機で体の隅々まで調べられカバンの中身までチェックされる。

モールの中は先進国そのものである。エルメスやルイ・ヴィトンなどのブティック、レストラン、映画館、巨大スーパーマーケットが入っている。歩く人の装いも違う。男女ともジーンズを穿く若者が多く、目鼻立ちがくっきりした彼らの顔立ちを見ていると、東洋というより西洋を感じる。

僕たちはブッフェ・レストランで夕食を摂ることにした。インド料理以外にもタイ料理や中華料理が用意され、バラエティは少ないながらも刺身、寿司、てんぷら、ざるそばといった和食まで置いてある。僕はシャリのまわりが天かすに覆われた不思議な巻きずしを何種類かと、マグロ、タイ、タコの刺身を皿に盛りつけて席に戻ってきた。

「ここはすごいですね。向こうの方には海老蒸し餃子などの飲茶もありましたし、日本とレベルが変わらないですよ。アーメダバードに住んでいる者からすればこれは反則ですわ」と嗤いながら言った。

「でも８百ルピーですからね。現地の感覚だとめちゃくちゃ高いですよ。まあ日本人駐在員の奥様方はこんなところでしょっちゅうランチ会をやっているようですけど」と早川さんが返す。ムンバイでどっぷり現地生活に溶け込んでいる彼女からしたら、ここはたまのお店ということになるんだろう。アーメダバードで耐久生活を送る僕にと、このような店を選んでくれた彼女の気持ちに感謝する。

「アーメダバードに日本人会か商工会いつかできたらいいですね」食事しながら早川さ

んはそう言った。

「やっぱりそういうものと関わる中で何らかの宣伝になると思うんですよね。アーメダバードにＥＹの小林っていう奴がいるよと。もちろんひとつひとつ会社を回って僕たちのサービスを伝えていくことが基本だけどね」

「ムンバイでは日本人会の名簿目当てに入会してくる人もいて、知らない人からいきなり営業のメールが来たりもしますよ」と早川さんが忠告する。

「会を作るにしてもメンバーが嫌な思いをするようなことは避けたいなと思ってる。名簿の扱いも気をつけないといけないね。それに会長や副会長をずっと同じ人がやるのはよくないだろうね。そういう意味でムンバイ日本人会のやり方はいいと思うし参考になったわ」と僕は思っていたことを話した。

「それに合同連絡会の話はすごく参考になった。そんな会があるなんてまったく知らなかったわ。会を作ったら他の日本人会や商工会との付き合いも出てくるんやね」と続けた。

「じゃあ安田さんとこに行って正解でしたね。私も久々に前の職場に行って懐かしかった」と彼女は言った。受付のインド人女性やガードマンが早川さんと親しく会話していたのを僕も見ていた。

早川さんのおかげで、今日安田さんに会えていろいろ話を聞くことができた。これもひとつの縁なんだろうなと僕は思った。

＊＊＊＊＊

月曜日からのムンバイ出張を終えた僕は、水曜日の夕方アーメダバード空港に到着した。迎えの車に乗り込み外を眺めてみる。アーメダバードに帰って来たんだなと感じる。ムンバイの街は刺激的でアーメダバードよりはるかに進んだ大都会であるのは認める。しかし家があって生活しているのはこの町。「わが町」という感覚が少し芽生えてきている。

水曜日なので、事務所に寄った後すぐ日本食レストラン「たむら」に出かける。ムンバイで散々美味しいものを食べてきたので日本食という気分ではないのだが、この一週間に起きたアーメダバードのエピソードや今回のムンバイ出張についてみんなに話したかった。

たむらに着くと細江さんと江本さんがすでに食べ始めていた。南さん、いやヒゲ公爵に会釈する。トシさんが「よう！」と手を挙げる。そして見慣れない顔が２つあった。

「どうも」と言いながら奥から一つ手前のテーブルに着くと、同じテーブルの見慣れない男女と挨拶をした。

「5月からアーメダバードに赴任になりました持木です」

「私はデリーからの出張者で熊田と言います」

持木さんが勤める機械商社はデリーやベンガルールにも事務所がある。今後の事業展開を見据えて新たにアーメダバード支店を設けたらしい。ぷっくりした体に人懐こい笑みを浮かべた若者だ。

女性の熊田さんは人材派遣会社勤務。日系企業が営業、技術、経理などの人材を雇用する手伝いをしている。普段はデリーで仕事をしているが、今回アーメダバードに初めて出張し日系企業を回ってきた。先ほど持木さんの会社を訪問した流れでたむらまで来ることになったらしい。

２人と挨拶を交わしていると店の扉が開いた。見れば大入道のような恰幅の男性が丸い顔に笑みを浮かべながら、ここでよかったんかいなと言いながら向かって来る。

持木さんがスッと立ち上がる。

「どうぞこちらです」

「皆さんこんばんは。相模工業の相川と申します。マンダル工業団地に工場を建設しとるところです」と大入道は挨拶した。

相模工業はホンダに供給するためのバイク用部品をここで作る。マンダルとはアーメダバードから車で2時間ほど離れた村の名前。マンダル村近辺ではマルチ・スズキやホンダが独自で大規模な土地を取得し、これから工場建設を行っていく予定だ。ヒゲ公爵が担当していると言っていた日系専用工業団地とは、どうやらこのマンダル工業団地のことらしい。そして相模工業の新工場に製造機器を納める役割を担っているのが持木さんの会社という構図だ。

そんな話をしていると新たにまた一人入ってきた。今度は華奢な若者だ。歳はまだ２０代前半じゃないだろうか。

「滝丸と言います。水曜会があるって聞いて来ました」と少し緊張した面持ちで挨拶する。

するといつものように細江さんが、

「どうぞ。堅苦しいことは何もないので気楽にいきましょう」と場を和ませる。
滝丸さんは少し緊張しながら3つ目のテーブルに着く。いつものように皆でテーブルを動かして隙間を詰めていく。だから遅く来た人も離れたテーブルにポツンと置かれることはない。最初にたむらに来た時は僕もめちゃくちゃ緊張したなあと、滝丸さんの姿を見て懐かしい思いがし、そして時間の経過を感じた。

いつしか食べ物の話題になっている。
「肉・魚・玉子はどこに行ったら売ってます?」と持木さんが訊いている。
僕もこの一カ月アーメダバードのスーパーマーケットを何か所も覗いたが、肉・魚を売っているのを見たことがない。玉子は小さな商店でバラ売りされているのを買ったことがあるが、日中の気温が30度を超える中、常温で店頭に置かれていた玉子を食べるのはかなり勇気がいった。
「肉・魚・玉子ですか?『マグソン』か『アイシーピック』に行くしかないですね」と細江さんが答える。
僕もすかさず会話に入った。
「細江さん、それどこにあります?教えてほしいです」
すると同じような声が他からも上がった。
細江さんは七三分けの黒髪に手をやった。
「マグソンもアイシーピックも市内に何店舗かあるんです。チェーン店だと思いますよ。どちらも冷凍された肉を置いていて、僕はまとめて買ってます。持木さんの事務所の場所はプララナガールですよね。プララナガール大通りのケンタッキーの並びにもマグソンがありますよ」
「ほんとですか?明日にでも行きますよ」と持木さんが言う。
「ちなみにハムとか置いてます?」と続ける。
「うーん。覚えてないですけど。ソーセージはあったから多分あるんじゃないですか。魚も冷凍の切身がありましたよ」と細江さんは答えた。
「僕、めっちゃハム好きなんですよね」嬉しそうな持木さんの姿が全員の嗤いを誘う。
「うちにパンフレットがありますので、明日皆さんにメールで送りますよ」と細江さんが言うと、方々で「お願いします」との声が響きわたった。

少し説明を加えると、グジャラート州はインドの中でも食生活にかなり保守的な場所である。大半の人々はベジタリアン（菜食主義者）であり肉や魚を食べない。牛乳やチーズは口にするものの、年配の人だと玉子を食べない人も多い。

同じベジタリアンと言っても、ヨーロッパの少し気取った文化人が言うような健康志向的なそれとは性質がまったく違う。

インドで暮らしてみて感じるのは、インドの菜食主義は宗教と深く関わっているということである。宗教が冠婚葬祭の添え物となった日本とは違い、インドでは人々の日常生活と宗教との距離が驚くほど近い。町中では寺院で祈りを捧げる人の姿をあちこちで目にする。オート・リキシャの運転手もハンドル脇に花輪を吊り下げ、神様が描かれたシールを車体に貼りつけている。ヒンドゥ教の不殺生の考えが、聖なる牛だけでなくあらゆる動物の殺生を抑制している。魚を食していたという違いはあるが、仏教が動物の殺生を禁じていたため肉食がほとんど行われていなかった江戸時代以前の日本人の感覚に近いものがある。

僕が勤めるアーメダバード事務所にはジャイナ教のスタッフも働いている。ジャイナ教徒は地中に育つ野菜を食べることも禁じられている。つまりジャガイモ、ニンジン、玉ねぎを食べることはない。これらを収穫する時に地中の微生物を殺してしまうのがその理由だ。さらに匂いのきついネギやニンニクも食さない。人体に興奮作用をもたらすからである。仏教でも「葷酒山門に入るを許さず」という同様の考えがある。

インドはベジタリアンが多いのだが太った人もまた多い。理由は食事の時間と内容である。インドでは夕食の時間は夜8時から始まることが多い。人々はゆっくり時間を取って家族そろって夕食を食べる。そして食べたら寝る。食事に動物性油脂が使用されることはないが植物性油脂やクリームを多用する。野菜にしてもまず大量の油で炒めてからスパイスを入れる。外のレストランでカレーを注文し運ばれてきたのを見ると、スパイスが溶け込んだ油で間違いなく表面がラー油のように浮いている。これに小麦粉を練って焼いたチャパティをたくさん食べる。つまり寝る直前に炭水化物と油を大量に取るようなものだ。これでは腹が出ない方が不思議である。

公爵から「お昼でも一緒にどうですか？」と誘いがあったのは、「たむら」から一夜明けた翌木曜日のことだった。その日僕は事務所で仕事をしていたのだが、断る理由はまったくなく誘いをすぐに受けた。

「持木さんも一緒なんですよ。グルモア・モールの横手に『フィロソフィー・カフェ』というお店がありますので、そこに12時集合にしましょう」

「了解！」僕はそう返事して受話器を置いた。ネットで場所を検索すると、グルモア・モールは事務所の前の大通りを西へ3キロほど行ったところにある。15分前に出発すれば十分間に合うだろう。

フィロソフィー・カフェは、モール隣の小路を入って行ったどん突きに建っていた。とてもこじんまりした10数名も入れば一杯になってしまうような店で、スペイン人の女性が経営している。白人がやっているならまともな洋食を食べることができるだろうという期待を抱かせる。僕たちが店内に入って行くと、スキンヘッドにピアスをした小太りの中年女性が「ハロゥ」と笑みを投げてきた。元々バックパッカーとしてインドを周遊していたようで、アーメダバードに流れ着きカフェを始めたとのことだ。サンドイッチやパスタはあるが肉や魚を使用しているメニューはない。挽肉の替わりに大豆を使ったボロネーゼが面白そうだったので僕たちはそれを注文した。

一見挽肉に見える大豆でできた粒がたくさん入ったトマトベースのソースの上には、たっぷりと摺りゴマが振りかけられていて食欲をそそる。パスタが少し伸びている感じはあるものの味は悪くない。

「あれ？アルデンテってこんな感じなんだっけ？」と持木さんが首を傾げる。

「多分、スペインじゃもっと固いと思うよ。おばちゃんの趣味だよ」

「ずっとバックパッカーをやってたからさ、まともなイタリアンなんか食ってないって」と公爵が毒舌を吐く。

アーメダバードにはまともな洋食がないだの、日本のイタリア料理が一番美味しいだのと日本語で軽口を叩きながら、僕たちは罪のない憂さ晴らしを楽しんでいた。でも中年とは言っても僕と同い年くらいの白人女性が作るパスタは何となく優しく僕たちはとても気に入った。なぜなら僕たちはその後も平均して月に2、3回は大豆ボロネーゼを食べに来ていたのだから。

「どう？生活は落ち着いた？」とアーメダバードに来て間もない持木さんに公爵が質問を投げかける。持木さんの事務所は公爵の事務所と同じビルなので公爵が気を遣って持木

さんを昼食に誘ったらしい。
「とりあえず毎日米ばかり炊いてます」
ぷっくりした体を揺らして持木さんが答える。
「料理はしないの？」
「面倒くさくってほとんどしないですね」
いろんな種類のふりかけでご飯食べてますという持木さんの言葉に、最近の若者はそんなもんなんかなと思う。
「でも楽しみにしてたカップ焼きそばが無茶苦茶になってたんですよ」とむくれた顔を見せる。公爵がどういうこと？と訊く。
「それが『持木もインド赴任は厳しいだろう』と、上司が米やインスタント食品を日本から送ってくれたんですよ」
「いい会社じゃん」
「ところが全部一緒くたに入れたせいで米袋が中で動いて、段ボール箱を開けたらカップ焼きそばの容器が割れまくってたんですよ」
輸送中の荷物がどんな扱いされているか判からんからなと僕も思う。
「まあ少なくとも中身は大丈夫だろうから安心しなよ」
取り出して別の容器で作るとかすれば大丈夫じゃんと公爵が慰める。
「うちの会社は最後の詰めが甘いんだよな」笑いながら持木さんが言う。
「仕方ないよ。これから頑張っていこうよ、モティさん！」
「モティ？何すか？」持木さんがさっそく怪訝そうな顔になる。
「うちの近くに『モティ・ベーカリー』ってあるのよ。真珠っていう意味らしいわ。アーメダバード人になったことだし、これからは『モティ』で行こうよ」公爵が言う。
モティ・ベーカリーが市内に何店舗かあるのを僕も見たことがある。アーメダバードで展開しているチェーン店だろう。
「そんなもんですかね」持木さんは苦笑いしながら最後のパスタを口に放り込んだ。

＊＊＊＊＊

アーメダバードはサバルマティ川を挟んで東の旧市街と西の新市街に分かれている。日本人が住むのはまず新市街だ。新市街の中でもさらに西、南北に走るＳＧハイウェイあた

りが近代的なオフィスやマンションが建ち並んでいる。アーメダバードは西へ西へと町が拡張している。

それに対して旧市街は道路が入り組み、古い建物が多い。鉄道駅は旧市街にありオート・リキシャ、荷車、トラック、バス、それに多くの群集でいつも混雑している。普段生活する上で旧市街に行くことはなく、旧市街に行くことはすなわち観光に行くということを意味する。インドの中でもアーメダバードは特に観光で訪れる町ではない。それでも誰かを観光案内するとしたら、城壁跡、階段井戸、ヒンドゥの寺院、ムスリムのモスクなどがある旧市街に連れていくことになる。

「週末旧市街を探索して、ついでに肉市場も覗きませんか？」と僕は公爵を誘った。アーメダバードについて書かれたブログを見ていて旧市街に肉市場があることを知ったのだ。ほとんどのヒンドゥ教徒は肉を食べないので肉市場はムスリム教徒が暮らすエリアにある。

僕の家で待ち合わせたあと、オート・リキシャを拾って旧市街へ向かった。新市街から旧市街に入るにはサバルマティ川に架かるいくつかの橋のどれかを渡らなくてはならない。北からガンジー橋、ネルー橋、エリス橋とあるが、今回はネルー橋を渡って旧市街に入った。川幅約５百メートルもあるサバルマティ川まで出ると視界が急に広がる。川を渡ると風を感じる。

僕たちは「ハウス・オブ・エムジー」というホテルの前でオート・リキシャを降りた。１９２０年代に建築されたこの建物は、テキスタイルで財を成したかつての富豪の邸宅である。９０年代に改装してホテルとして営業を開始。落ち着いた色の赤で彩られた外壁と寄り添うように立つ菩提樹の巨木は、建物の歴史を感じさせ泊まってみたいという憧れを呼び覚ます。このようなヘリテージ・ホテルを新市街で見ることはできない。

僕たちはまずハウス・オブ・エムジーの目の前にある「シディ・サイヤド・モスク」に行ってみた。小ぶりなモスクで、敷地の周囲はすっかり道路に囲まれていて、車やバイクがひっきりなしに走っている。車が途切れるのを見計らってホテルから道路を渡ると、すぐにモスクの入口があり中に入る。お祈りを捧げる時間でないため閑散としているが、それでも頭に帽子を被ったムスリム教徒の男性が何人か集まって雑談に興じている。ある地点から靴を脱いで僕たちは奥へと進みモスクの彫刻を見学した。モスク正面奥にある有名

な菩提樹のレリーフは、一本の木からたくさんの枝がくるくると弧を描いている。細かく掘られた無数の穴から光が射すと光の中に菩提樹が浮かぶようで神秘的である。

モスクから南東へ5分も歩くとすぐに肉市場が見えてきた。1百メートルほどの一本道の両脇には肉を取り扱う店がずらりと並んでいる。狭い道路にも関わらずバイクが前後から侵入してくるので、エンジン音が聞こえたら道の脇に体を寄せなくてはならない。

入口の近くは鶏肉屋が並ぶ。看板に「チキン・エッグ・センター」と書かれてあり、大きな鉄かごの中には何十羽かの鶏が入れられている。どれもあまり元気がない。その中から男が一羽の鶏を取り出し、包丁で首に深い切込みを入れ、プラスチック製のドラム缶容器に鶏を投げ込む。容器の中でバタバタと音がする。首を切られても鶏はしばらく動き続けるため、静かになるまで時間がかかる。別の男が容器から鶏を取り出して熱湯に漬ける。ある程度の時間が経つと鶏を取り出し羽をむしり始める。

一連の動きを見ていると何だかまったく別の惑星にでも来たような感じを覚える。同時に日本では見ることのできない光景をみることができて良かったとも思う。おそらく「肉を食べる」というのはこういうことも意味するのだろう。今ここにあるのは、これまで一切映し出されてこなかった、僕たちが普段スーパーで綺麗にパックされた肉を手にするまでの光景なのだ。

鶏肉を過ぎると今度は羊だ。あるいは山羊かもしれない。皮を剥がれた胴体部分が目立つように鉄の鉤で吊り下げられている。そして一番手前には鮮度をアピールするかのようにいくつもの首が並んでいる。「今日捌いた肉ですよ」おそらくそういうことを言いたいのだろう。胴体以外に臓器も並べられている。もちろんこれらも売り物となる。この日肉を買って帰ることはなかったが、ずいぶん後に別の場所で鶏肉を丸々一羽買う機会があった。家に戻ってビニール袋に入った肉を取り出した時、レバーや砂肝の部分も出てきた。肉はまだ温かかった。肉を買う。インドにいるとそのことが何か特別なことのように感じられるようになる。

市場では肉だけでなく魚も売られている。「シルバー・フィッシュ」という屋号の店では、いくつかに仕切られた鉄製の台の上に何種類かの魚が並べられている。細身のものや胴体が太いもの、鯉に似た魚に髭を持ったナマズらしき魚。小エビがこんもりとタライに盛ら

れ、別のカゴには小ぶりなカニもたくさん入っている。その隣では男が椅子に腰かけながら包丁で器用に鯵の内臓を処理している。

体長２０センチほどの魚を指して「レッド・スナッパー（鯛）？」とカメラを構えながら訊ねると、陽気な店員が「そうだ」と言って、写真に収めやすいように尻尾を掴んで高々と持ち上げた。薄紅色の鱗が光っていた。

「ここで魚を買うのは勇気いるよな」と公爵が言う。

魚の下には氷が敷いているとはいえ、この気温では氷もすぐに解けてしまう。肉屋も魚屋も手際よく包丁で捌いているのだが、黒ずんだ切り株のような台をまな板にしていて、衛生的に大丈夫かという心配が頭をよぎる。

「でもレッド・スナッパーならいけまっせ。海の魚だし、きれいに水洗いしたら大丈夫ですって。まだ時間も早いし、あとで買って帰りましょうよ」僕の中ではお腹を壊すことよりも食い気の方が勝っていた。

「あのナマズのようなヤツは間違いなく当たるでしょうけど」と続けて嗤った。

「確かに。あの川魚はヤバそうだね」公爵も同意する。

これらの魚も地元の人に買われ、料理されるのだろう。勝手な想像に過ぎないが、輪切りにした胴体をたっぷりとしたスパイスと共に煮込むなり焼くなりして。

時間がまだ早かったので僕たちは市場を抜けてそのまま奥へ進んでいった。舗装されていない道にはところどころに水が溜まり、気をつけて歩かないと足が汚れる。市場の奥はゴミの集積場になっていて、市場から出された生ゴミがすさまじい臭気を放っている。あたりをうろつく犬は嗅覚がおかしくならないのだろうか。ところどころで何かが燃え火が燻っている。カラスは平気な顔でゴミを漁っている。ゴミ集積場を越えたところはＴ字路になっていてそこで市場は終わっていた。

Ｔ字路を右に曲がると、「ティーン・ダルワジャ」という名前の３連の門を持つ城壁が目に飛び込んでくる。城壁は１０メートルほどの高さだが、門の高さも８メートルくらいある。兵士が馬や象に乗ったまま十分通過することができる高さである。他のいくつかの城門と同様、この門の下を多くの兵士や商人たちが毎日通過していたのだろう。城門の周りは今も現代の商人たちに占拠されている。衣類やプラスチック製の雑貨を売る店が多い。

城門を抜けてしばらく東に歩くと最終目的地の「ジャマー・マスジッド（金曜日のモスク）」に到着した。ジャマー・マスジッドは周辺では最も大きいモスクであり、インドでも有数の美を誇るモスクに数えられている。周囲に商店が立ち並んでいるため外からは広さを実感できないが、通りに面した小さな入口から一歩足を踏み入れると敷地の広大さを感じる。

黄土色の本殿と背景に広がる青空。人もほとんどおらずモスクの中は静寂に包まれている。静謐という言葉が似合う。

幅・奥行き共７０メートルの石畳の広場の中央にはプールのような長方形の水場がしつらえられている。そこに張られた水でムスリム教徒が祈りの前に体を清める。正面奥は本殿になっていて、中に入ると石柱が規則正しく並んでいる。本殿を支える石柱は全部で２６０本ある。本殿の一番奥はメッカの方向を指し示す円形の石版が掲げられている。その上にはデジタル表示の時計。一日数回ある祈りの時間を正確に知るためにある。石柱には大型扇風機が風を送り、本殿の外にはスピーカーが備え付けられている。ここから大音量でコーランが流れてくる。デジタル時計やスピーカーそして大型扇風機は６百年の歴史を刻んだ石柱や本殿の彫刻の雰囲気を損なっているように感じるのだが、これは部外者の勝手な考えなのだろう。モスクは今も信者の日常に深く入り込んでいてこれらの機器も信仰の上で欠かせないものになっている。

モスクは回廊でぐるりと取り囲まれている。回廊には屋根が掛けられているためちょうどよい日影ができ寝転んでいる男性もいる。石がひんやり気持ち良い。回廊を一回りし本殿と正反対になる東側の出口から外に出る。

モスクから一歩外に足を踏み出せばそこは「スルタン・アフメド・シャー一世」を祀る廟である。アフメド・シャーは１４４２年に没する前に自らの墓を祀る廟を建設した。先ほど訪れたジャマー・マスジッドもアフメド・シャーの手によって１４２３年に建設された。アフメド・シャーは今のアーメダバードの町の礎を築いた人物であると廟の前に置かれた石碑に刻まれている。アーメダバードという町の語源もそこから来ている。

アフメド・シャー廟の内部だけでなく外周辺にもムスリム教徒の墓が多数置かれている。ムスリム教徒の墓はみな白い石造りの直方体が地面から飛び出たような形をしている。墓自体には名前も何も刻まれていない。アフメド・シャーの墓も外の墓たちと基本は同じで、違いと言えば凝った刺繍の布が被せられているかどうかだけである。そんな墓の周りを山

羊がうろうろし、おばあさんが石造りのベンチに座りじっとこちらを見ている。墓の周りで鶏を解体する男がいて、水を浴びる子供たちがいる。ここはムスリム教徒の生活の場となっている。

ハウス・オブ・エムジーから歩き始めてもう2時間近く経ち、町歩きはそろそろこの辺で終了かという雰囲気になってきた。僕たちは戻る道すがらさっきの魚屋でレッド・スナッパーを2匹買い、オート・リキシャに乗って僕の家まで帰って来た。魚を買うときそのままの状態で渡されるのかと思ったが、意外にも包丁一本で器用に鱗を落としてくれ内臓も綺麗に処理してくれた。全部で2百ルピーとは安すぎる気がした。

「じゃあ魚は煮つけでいいですか」と言いながら僕は大きな鍋に魚を2匹並べ、砂糖、水、醤油で味を調え火をつけた。調理酒があればいいのだが贅沢を言ってられない。別の鍋で洗った米を入れ煮立たせる。２０分ほどぐつぐつ煮たところで、缶詰のシーチキンを放り込み醤油で味付けする。独身時代からやってきたシーチキンおじやである。さかな、サカナと続くが仕方ない。

「コーラ、マンゴージュース、水とありますけど何にします？」テーブルに鯛の煮つけとシーキチンおじやを並べたところで公爵に訊くと、すかさず「水！」と答えが返ってくる。酒呑みの公爵は甘いものが好きでない。

「まだ酒がなくてすいませんね」と言って水を公爵のグラスに注いだ。

「まだリカー・パーミット取ってないんですよ。一回行ったんですけど、インド入国日から時間が経ってて観光者用のは取れないって言われて」と不満を述べる。

「入国から2週間経つと居住者用のパーミットを取らないといけないからね」と公爵は言う。

「でも居住者用の申請用紙はグジャラート語だから日本人ではまず無理ですよ。誰かスタッフを連れていかないと」と教えてくれる。

「いやー、それ聞いといて良かったですわ。聞いてなかったらまた無駄足を踏むところですわ」と僕は言う。

「しかし何もかもが遅々として進みませんね。僕なんかまだ銀行口座も開けてないんで

すわ。給料も振込むことができないから、ずっと日本のクレジット・カードでキャッシングですわ」と、またインドの不満が噴き出てしまう。

「まあまあ。ぼちぼちやるしかしょうがないですよ。ちなみに今度うちの上司がデリーから来ますけど会います？商工会のことも話しておきましたので何かいい案が出るかもしれませんよ」と久しぶりに商工会の話題になった。

「もちろんお会いしたいですよ」と僕は即答した。

「安福さんと言ってアーメダバードに詳しい人ですよ。3年前くらい前からアーメダバードのプロジェクトを担当していて、今はデリーから毎月出張に来ているんですよ」と公爵は続ける。

グジャラート州ではマルチ・スズキが四輪の工場を、ホンダが二輪の工場をそれぞれ数年内に稼働させる計画を持っている。相模工業のような部品メーカーもこぞって進出してくるため日系企業の投資は相当なものになる。グジャラート西部のムンドラ港からは、原材料の調達や製品の輸出が可能である。グジャラート州に日系企業が進出する足掛かりを作るため安福さんは働いている。僕もムンバイ日本人会会長の安田さんから教わった話を公爵にした。少しずつではあるが前進していることが嬉しかった。

骨のみ残して鯛をきれいに食べ腹も膨れた頃、公爵が言った。

「食べてから言うのもなんだけどさ。海も結構汚染されてるんだよね。カンバト湾の周りって結構、化学系の工場があるじゃない。どこも汚染水を海に垂れ流してるんだってよ」

「えー、ほんまですか。それ早く言ってくださいよ」と僕は膨れた。

「でも、あれだけ『鯛が、鯛が』って言ってたので、言い出しにくくてさ」

「それに、ぶっちゃけ僕も食べたかったんだよね」と公爵が言い訳する。

「何だ。じゃあコイツがどこで獲れたとかもう忘れちまいましょうよ」

そう言って、僕たちは大いに嗤った。

## 第３章　５月　人の輪

５月に入るとアーメダバードはさらに暑さが厳しくなった。日中外を歩いて５分もすると頭がクラクラしてくる。オート・リキシャに乗ろうものなら、まさにドライヤーの熱風を顔に受ける感じがする。外気に晒されているだけで体力を消耗するので、家なり職場なり常にエアコンのある場所にしか居ることができない。

それでも路上生活者は外で寝起きし火をおこして食事の支度をしている。ヤワな僕たちにはまったく想像がつかない。余りに暑いせいか犬も少しでも陰のある涼しいところでずっと寝ている。

しかしこの季節悪いことばかりでもない。

夏の盛りは果物の季節でもある。スーパーや路上の商店には何種類ものマンゴーが並ぶ。余り知られていないがインドは世界有数のマンゴー生産国で海外への輸出もしている。最も高級と言われる「アルフォンソ・マンゴー」は小ぶりながらピンクがかった果肉の甘味が非常に強い。インド人も土産用の箱詰めを買っている。僕自身はもっと大ぶりで果肉の色が薄黄色の酸味が効いたマンゴーの方が好きだが。

今朝もマンゴーを丸々一つ食べてから、僕はジェトロが入居している「ピナクル・ビジネス・パーク」に向かっていた。ピナクル・ビジネス・パーク周辺は比較的新しいオフィスビルやマンションが立ち並ぶプララナガールというエリアになる。西へ西へと発展を続けるアーメダバードの西端に位置し、南北に走るＳＧハイウェイからも極めて近い。日系企業のオフィスが集中し日本人駐在員も多く住んでいる。ピナクル・ビジネス・パークだけでも８社の日系企業が入居している。

安福さんがアーメダバードに到着したことを公爵から知らされ、今日はジェトロのオフィスにやって来た。さてどんな会議になるだろうか。

オフィスに入ってすぐの会議室に通されると公爵と安福さんが並んで座っていた。

「小林さんのことは南から聞いていますよ」と言って、席にどうぞと安福さんが促した。

「いろいろ動いて頂いているようで、ありがとうございます」

安福さんは１８０センチはあろうかという長身だが、スラリとして物腰も柔らかい。インドで仕事をして１０年になるということだが、今や家族全員がベジタリアンになってい

る。

簡単な自己紹介のあと、僕は商工会か日本人会を作りたいと思っていることや、ムンバイ日本人会で聞いてきたことなどを安福さんに話した。

「それは大変いい話です。アーメダバードにそういう組織できればいいなと私も思っていました」と安福さんは首を縦に振った。

「商工会というよりは、まず日本人会が先でしょうか」と安福さんは続けた。

安福さんの意見に僕も賛成だった。というのもこの2カ月間これはと思う人にいろいろと聞いてみたが、生活情報の交換や他の日本人居住者との交流を望む声が圧倒的に多かったからだ。商工会となると会社が抱える課題についての意見交換や建議要望活動などが主な目的になる。アーメダバードは大半がここ1、2年で設立された若い会社ばかりで事業が本格的にスタートしていないところも多い。駐在員が手探りで生活環境を整えつつある状況では、他にどんな日本人がいてどんな風に日々を送っているか知りたいというのが根柢にある要望ではないかと感じていた。それに数こそ少ないが芸術や建築を学びにアーメダバードに滞在している学生たちのことを考えれば、商工会より日本人会の方が間口は広くなる。

「日本人会を作るとなると、会長は誰になってもらいましょうか？」と安福さんが問いを発した。

そう聞いて急に現実味を覚えた。会長は日本人会の顔。誰を頭に戴くかは非常に繊細な問題だ。会長になる人自身の熱意も重要だが、ある程度の重みや人望がないと周囲の納得が得られない。また、商工会でないため会社とは関係ないと言っても、やはり居住者の大半が駐在員のため、所属する会社はどこか、会社内での上下関係はどうかということも無視できない。

「みんなの納得という点からすると、駐在員が多い会社から出してもらう感じなんでしょうかね？」安福さんと公爵にそう投げかけた。

「すると音無製作所か、フォード自動車の建設工事をやっているところですかね。でも建設会社は現場が終わったら駐在員もガクッと減っちゃうからだめか」と公爵が言う。

「ゴート製薬なんかどうですか？」安福さんが提案する。

「確か遠藤さんはムンバイ日本人会の会長をやってましたよね。ちょっと無視できない

かな」どうやら安福さんは遠藤さんと面識があるようだった。

安福さんの言葉を聞いて先月ゴート製薬を訪問した時の光景が蘇ってきた。遠藤さんが会長になったらやりにくいだろうなあと思ってしまう。

「遠藤さん含めゴート製薬の方々は水曜日の『たむら』には全然出てきていないんですが、大丈夫ですか？」と公爵が安福さんに訊ねた。

「他の日本人とはあまり絡みたくないのかもね。でもひとこと言っとかないと後で揉めても困るしなあ」と安福さんは言った。

「じゃあ、まずは声がけだけでもしますか」と僕は言った。これから先どうなるか判らないが、とにかく方向性が決まったことに３人とも安堵した。遠藤さんへの会長打診については公爵と僕の都合の良い日に行うことになった。

＊＊＊＊＊

偶然にもアーメダバードには音無製作所グループの子会社が２つもある。一つは細江さんや江本さんが所属している「音無エレクトロニクス」という会社で無停電電源装置を作っている。アーメダバードの市外から南西に２０キロほど離れたサナンドという町に工場がある。

もう一つの会社は「音無ベターライフ」と言ってエアコンを製造している会社である。こちらは市内から北西に４０キロほど離れたカディという町に本社工場がある。ボンベイ証券取引所に上場している会社でもある。

どちらの会社も元はインドの地場企業が母体で、２０年以上も昔に音無製作所グループが業務提携したり資本参加したりして子会社となっていった経緯がある。どちらの会社もうちの事務所のクライアント先であり、今日はスタッフと共に音無ベターライフを訪ねることになっていた。

スタッフが運転する車は片側３車線あるＳＧハイウェイを８０キロで快走していく。途中から道路は２車線になるがそれでも道幅は広く、通行する車両は皆かなりのスピードを出している。市街地を抜けると畑や原野が続く。途中カロルという小さな町を通過し１時間ほどで工場のある町カディにたどり着いた。工場周辺は音無製作所だけでなく、インド

の地場企業が集積しいたるところで工場を操業している。

受付の警備員にアポイントがある旨伝え2階の会議室に通される。案内の人が「飲み物は？チャイ、紅茶それともコーヒー？」と訊ねるので、皆に合わせてチャイと答えておく。どの会社を訪問してもまず飲み物を聞かれるのだが、あればチャイをお願いするようにしている。どのチャイも少しずつ味が違う。うちの事務所のチャイはかなりショウガが効いているが音無さんのはどうだろうか？

壁に掲げられたインド全図の隣には、馬が疾走する絵が額に飾られていて、何か漢字も書かれている。中国にある音無の子会社から贈られたもののようだ。

しばらくすると、頭がきれいに光っている日本人と、首のない小柄なインド人が部屋に入ってきた。日本人の方は坪井社長と言って６０歳。アーメダバードには１０年前にも一度駐在している。今回の駐在もすでに3年目になる。インド人の方は経理部門の責任者である。暑くなる3月から5月が最も忙しい時期ということで、工場は製品の出荷でフル稼働している。そんな忙しい中で時間を割いてもらった。

坪井社長と僕が簡単に日本語で挨拶した後、うちのスタッフが会議の本題に入る。

企業活動全般を定めたインド会社法は、２０１３年に約６０年振りとなる大改正が行われた。翌２０１４年の４月から大半の規則が施行されている。従前の会社法は１９５６年に作られたものであり現在の企業環境とそぐわなくなってきた。国の経済発展のために企業活動の自由度を高め活性化させることが法改正の趣旨である。しかし一方で、欧米社会で関心が高まっているコンプライアンス遵守や企業の社会的責任（ＣＳＲ）といった概念も、インド国民がそれほど理解できていない状態にも関わらず、理念先行で取り込んでしまった。利益の一定額をＣＳＲ活動に投じなければならない義務も課せられた。また一定規模以上の会社には社外取締役や女性取締役の設置義務が課せられた。理想を法律で体現しようとするインド政府の試みは、自由な経済活動を期待する企業にとって足かせともなっている。

会計の面でも重要な改正が行われた。新会社法では会社の決算期は原則として3月末となる。また固定資産の減価償却における耐用年数の変更も行われた。

「法改正の話はよく判りました。うちも上場していますし今年中には社内体制を整備しないといけないでしょうな」と坪井社長は言った。
「取締役については人の問題ですので、適任者がすぐ見つかればいいですけどね。よろしければ弊所でも探すお手伝いをしますし」と僕はアドバイスした。
「ありがとう。その際は頼みますよ」
「幸いうちは元々3月決算だから決算月変更の影響はないけど、3月に変えなきゃいけない会社は大変だよな」と坪井社長は続ける。
「減価償却についてはあくまで会社法が定める目安です。法定耐用年数を使用しないことについて会社側で合理的な説明ができれば、異なる耐用年数を使用することも可能です」
「ただ、それが大変なので、大半の会社が新しい耐用年数を使うことになりそうですが」と僕は付け加えた。
「企業にとっては、厄介事がまた増えた感じだわな」と坪井社長は笑いながら言った。

本題が一段落し、アーメダバードの生活の話題に変わっていった。
「休みはどうしてるの？」と坪井社長が訊く。
「やることなくて土日のどっちかは事務所に顔出してますね。さすがに両方行くのは悲しくなるのでしませんが」と嗤いながら僕は返した。
「ゴルフやったらいいよ。綺麗し人も少なくて安いから」と坪井社長はクラブを握る真似をした。「僕の週末はゴルフ。あとは酒だね」と言って笑った。
ゴルフと言えば「たむら」でもたまに話題になることがある。坪井社長の話を聞いて始めてもいいかもしれないなと少し思った。

「ちなみに坪井さんは『たむら』にはあまり行かれませんか？」と僕は訊ねてみた。
「ああ、細江さんがやってるやつね。昔何回か顔を出したけど、わざわざたむらまで行くのが面倒くさいのよ。行くとなると工場から市内に戻ってきて、家を通過して行かないといけないしさ。それにうちは仕事が終わるのも遅いし」そして嗤いながら、
「でも理由としては弱いわな。結局やっぱり酒。酒がないとだめだわ」と続けた。
「私は晩酌をしませんが、普段お酒を飲む人はゴハンだけというのはきついんでしょうね」と僕は頷いた。

「たむらには日本人が毎週１０名前後集まってます。たまにデリーやムンバイからの出張者も来たりしていますね」

「実はアーメダバード在住日本人の何人かと話しているのですが、日本人会を作ったらどうかという意見も出てきています」と僕は言った。空気を作っている張本人ということは伏せておく。

「もし日本人会をやるのなら、音無製作所さん、つまり坪井社長に何か役に就いて頂くような流れが自然と思うのですがいかがでしょうか？」と切り出した。

「日本人会ね。小林さん、やるの？」確かめるように僕の顔を覗く。

「もちろん、やってもらうのは大賛成。昔は全部で両手の数も日本人がいなかったけど、今は増えているだろうからいいタイミングじゃない？」

「直接お会いした人と、会った人から聞いた情報を合わせるとすでに５０人くらいはいるんじゃないかと思います」と僕は言った。

「５０人！ずいぶん増えたね。そうだ、現地のインド人と結婚された日本人女性もいるから日本人会のことを話しときますよ。通訳をやって頂いていた方でね」

「ただ、役に就くというのはちょっとどうかな。やっぱり細江さんとかにやってもらった方がいいんじゃない。もちろん応援はしますから」と言って坪井社長は締めくくった。

お別れの挨拶をして、会議室の外に出て建物の外へと向かう。今まで話していた会議室は第一工場の一角にある。坪井社長の説明では、第一工場の奥に最新鋭の第二工場があり、製造のメインは第二工場でやっているとのことだ。第二工場の敷地には建ったばかりの工場があったのだが、一度失火により全焼した。火事が起きたのは幸い閑散期であったため売上にはそれほど影響が及ばず、半年間急ピッチで新工場を建設・稼働させた結果、何とか繁忙期に間に合ったとおっしゃっていた。

数年前インドでは外資系企業に勤める従業員によるストが吹き荒れた時期がある。日系企業もこの影響を受け、トヨタやスズキで大規模な労働争議が起き、賃上げを求める労働者と抑えようとする管理職との間で争いが起きた。死傷者も出ている。音無ベターライフの火災も表向きは失火と言われているが、それまでに労働者の賃上げ要求があり、放火による可能性もゼロではないという噂もある。

それでもアクシデントを乗り越え、より競争力のある製品作りに励んでいる社長の姿を見ると、日本人会の件も無理にはお願いできないなと思った。

＊＊＊＊＊

僕が勤める事務所には、監査部門、税務部門、コンサルティング部門の３つの部署がある。特定の部門に縛られずとにかく日系企業に関係があること全てが僕の仕事である。アーメダバードの日系企業と関係を作り、監査、税務、コンサルティング、最終的に何かの業務につながっていけばいい。そういう立場なのでとにかくアーメダバードの日系企業を訪問していった。メーカー、商社、建設会社、サービス業。もっともその大半が「たむら」で名刺交換した人たちだったが。訪問した会社とすぐに仕事にならないかもしれないが、将来どうつながっていくか判らない。まずは存在を知ってもらうことだ。

それから縁があれば企業に勤める人だけに限らずいろんな接点を持った。日本語教師の海原さんがいい例だ。最初に訪れた水曜日のたむらで海原さんに遭ったが、その後しばらくして海原さんが教えているアーメダバード経営者協会（ＡＭＡ）で再会した。

ＡＭＡは社会人向けの大学のようなところで、語学だけでなく貿易実務のセミナーや財務管理のセミナーなどの実務研修も毎日行われている。「KAIZEN（改善）セミナー」といったものまである。事務所のラジーブの話によれば、ＡＭＡの責任者は毎年日本で滞在するほどの親日家で日本に関する大規模なイベントも開いているそうだ。責任者に引き合わせようとラジーブが僕をＡＭＡに連れて行ってくれたのだが、あいにく責任者は不在だった。その時日本語授業の準備をしている海原さんとしばらくの時間話す機会があった。海原さんは毎日平日の夜と土日の日中に日本語を教えている。

今日は海原さんの授業の中で、日本の企業文化について話をすることになっていた。海原さんによれば、受講生の半分は大学生だが残りは企業に勤める社会人で、年齢も２０代から５０代まで多岐に渡るとのことだ。みな日本についての関心が高い。日本のカイシャについて話をしてくれないかとこの前海原さんから依頼があったのだが、うまく話せるかどうか判らない。拙い英語であっても内容は伝えたい。聞いて損しなかったなと思ってもらえたら御の字かなと思っていた。海原さんが授業をしている教室の前まで行き、深呼吸してから中に入った。

コンクリート打ちっ放しのＡＭＡの校舎は、安藤忠雄が設計した建物のような雰囲気で

クリーンな感じが漂う。事前の話通り約２０名の受講生は年齢もまちまちである。最初に僕は公認会計士の仕事について話し、そして日系企業をサポートするというアーメダバードに来た目的について話した。

インドには日本製品が溢れている。スズキの乗用車、キャノンのカメラ、日立のエアコンや冷蔵庫、ソニーのテレビ、ヤクルトなど。受講生も日本企業の名前をよく知っているような素振りを見せていた。

インドに来るにあたって、僕はいくつかの本を持ってきていた。本田宗一郎、井深大、稲森和夫、鈴木修といった経営者の書籍である。僕はその中からパナソニックの創業者である松下幸之助について触れることにした。

日本の工業製品はインドで高く評価され、製品だけでなく製品を作る会社自体も人々の尊敬を受けている。そしてありがたいことに、ただ日本人というだけで僕たちにも好意を寄せてくれる。

これは過去からずっと日本人が積み上げてきた努力の賜物だと思う。

もう２０年以上も昔の中学生の頃、僕の家にはビデオデッキがまだ無かった。自家用車も中古のサニーだった。だから高校生になって家にビデオデッキが入り、大学生になって新車のカローラに乗るようになり、少しずつ生活が豊かになっていくのを感じていた。品質は年々良くなり、価格は年々下がっていった。電化製品はもはや「耐久消費財」でなく「消耗品」と呼んだ方が相応しいくらいだし、自動車はもはや人や荷物を運ぶという本来の役割を離れファッションに近くなりつつある。

日本では行き過ぎの感があるが、良い製品をより安く作ることに日本人がずっと努力してきたからこそ今の姿があるのだと思う。松下幸之助の自伝に「水道哲学」というのが出てくる。人々の暮らしを楽にする工業製品を、蛇口を捻ったら水が出てくるように世の中に安価で大量に普及させていくことだ。

松下幸之助はその代表のような存在だと思う。そして日本のあちこちで、それこそ大企業から中小企業の経営者にいたるまで、皆がそのような思いを持って自分の役割を果たしていったからこそ、競争力ある製品を生み出すことができる企業が日本に多数存在しているのだと思う。

インドでは人々の暮らしを向上させる工業製品の普及がまだまだ遅れている。家にテレビが１台という家庭も多いしエアコンや洗濯機がない家庭も多い。この国がやるべきことは地道に製品を作りインドの社会に安価で普及させていくことだと思う。特に家電業界や

自動車産業において、もっとインドの地場メーカーが登場してくるべきだと思う。

授業でそのようなことを話した後、受講生から質問を受けたり意見を聴いたりする時間があった。その内の一人のおじさんは音無エレクトロニクスに勤めていると誇らしげにしていた。いつもたむらで微笑んでいる細江さんの顔が浮かび親近感を感じた。おじさんが言うには、音無製作所も古い歴史を持ち経営哲学を掲げているとのこと。社内でも音無製作所の経営理念について学ぶ機会があることを教えてくれた。

また2人組の若者が日系運送会社のアーメダバード営業所に勤めていた。日本語を習得することで給料の向上にもつながるらしかった。

日系企業で働くインド人が日本の企業文化に触れそれを自分のものとする。社内で、あるいは転職や独立してモノづくりのマインドを周囲にも広げていく。これがどんどん進めばインドの社会にどれほどプラスになるだろう。単にお金を寄付するとか道路や橋を作るとかいったことでなく、インド人と一緒にモノを作っていくということ自体がオトナの日印関係に近づく気がしてならない。

日本に関心を持つインド人や日系企業に勤めるインド人と今夜実際に会いそして話をしたことは非常にいい刺激になった。

＊＊＊＊＊

しばらく公爵と連絡を取っていなかったが、明後日ならゴート製薬を訪問できるという。先方に連絡すると構わないとの返事が来たので公爵と一緒に訪問することになった。

前回同様1階の受付で入館手続を済ませたあと、改札機のようなゲートを抜けエレベーターで4階の会議室に入った。

前に会った長髪の男性とがっしりした若者に加えて3名の男性が座っていた。長髪の男性が以前にムンバイ日本人会の会長をしていた遠藤さんである。今日もダブルのスーツ姿だ。

「今日は日本人会の話とお聞きしましたので駐在員全員を集合させました」遠藤さんはそう言い席を促した。

名刺交換して席に着く。公爵を見やるがなかなか切り出す素振りがない。仕方ない、僕から切り出そう。

「いまアーメダバードでは私たちの知る限りで約５０名の日本人が居住しています。ご存知のように『たむら』では毎週水曜日に日本人が集まって夕食を共にしています。個人的な集まりで人と会ったり、たむらで話をしたりしていますと『日本人会を作ってはどうか』という意見も出てきています。そこで私たちとしても日本人会の設立に向けて動きたいとそのように考えています」と一気に言った。

しばらく間があり、

「じゃあ南さんと小林さんで動いているんですか？」と遠藤さんは言った。

「今のところそうです。日本人会に賛同してくれる人や、協力して動いて頂ける方を募っているところです。うちの安福も知っています。」と公爵が続けた。

「正直な話、今回ゴート製薬さんには日本人会の役をお願いできないかと思ってお伺い致しました。遠藤さんは以前ムンバイ日本人会の会長をされていたと聞いています。アーメダバード日本人会の会長をお願いできないでしょうか？」と単刀直入に僕は言った。

「安福さん、お元気にされておられますか。そうですか」と言った後、

「しかし私個人としては日本人会には関わる気はありません。日本人会を作られるのは結構ですし、ここにいるメンバーに案内して頂ければと思います。入会するかしないかは各個人の判断に任せます」とハッキリ言った。少し敵意を含んだような目をしていたのは僕の思い過ごしだろうか。そして会社を買収した直後で業務に忙殺されているため、会社として役員を出すことはできないと宣言した。

公爵と僕は「了解しました」と言って辞し僕の事務所に引き揚げてきた。事務所のマシンでコーヒーを淹れ会議室で飲んでいるとどちらからともなく嗤い出した。

「凄かったよな、さっきの。あれが遠藤さんか」

「そうですよ。前もあんな感じですわ」と僕は答えた。

「たぶんムンバイ日本人会で相当嫌なことがあったんじゃない？日本人会のこと相当嫌悪してる感じだよね」と公爵が言った。

「ムンバイにいるうちの同僚に訊いた話だと、日本人会の会長をやっていた時に会費の値上げを強行してそれで周囲とだいぶ揉めたらしいですわ」

「それじゃない？キョーシローのあの態度は。そっから来てるんだよ」と公爵は言う。

「キヨシロって何ですか？」と僕は公爵に訊き返した。

「だから、キョーシロー。忌野清志郎に似てない？」そう公爵に言われてハッとした。

似ている。
「ついでにヤツ、目の周りも黒いアイラインを引いていたよね？」
「ええ、なんだか隈みたいに黒い線が入ってましたね」と僕も賛同する。
それから僕たちはあんなに濃いキャラはアーメダバードにはいないだの、ムンバイでは相当嫌われ者だったんじゃないかだのといった話をして憂さ晴らしをした。
「まあ遠藤さんが断ってくれたから良かったよ。会長になるとか言いだしてたら大変なことになってたよ」との公爵の発言に僕も間髪入れず賛同した。
「そうすると会長は別の人を立てないとだめですね。実はこの前音無ベターライフに行く機会があり社長の坪井さんに日本人会のことを話したんですよ」と僕は言った。
「日本人会には賛同してくれたんですが、仕事が忙しくて役は無理という話でした」
公爵がそれを聞いて、
「じゃあ、やっぱり細江さんに話を持っていくしかないか」と漏らした。
「細江さんだったらたむらでもホスト役をされているし、細江さんのことを知っている人も多いからみんなで盛り上げていけるんじゃない？」と続けた。
僕も同じことを考えていた。
「細江さんは自ら前に出る人じゃないけど、あのホスピタリティには心服しますよね」と賛同した。

＊＊＊＊＊

ゴート製薬を訪問してからしばらくして、公爵が自宅を提供して飲み会を開いた。公爵がこれまで会った日本人すべてに声がけした。日本人会を意識してのことではないが一度盛大に飲み会をやってみたかったと聞いた。これまで少人数での飲み会はあったが、土曜日の夜２０名強もの人数が公爵の家に集まった。公爵の人望だ。もちろん全員が椅子に座ることはできないため、立つか床に座る。公爵の家のリビングは３０畳以上もあるため、立ってあるいは床に座ってならまったく窮屈さを感じない。
皆がそれぞれお酒や食べ物を持ち寄る。僕はアルコールの替わりにフライド・チキンを持って行った。クーラー・ボックスにビールを詰めてきた者もいる。会社でコックを抱えているところは鳥の唐揚げや焼きそばなどの料理を作らせてきている。ピザありタコスあり、いろんな食べ物が並んでいる様を見ると嬉しくなる。

大半の人数が揃ったところでビールで乾杯する。アーメダバードでこれほどの人数が一堂に集まったのはこれが初めてなんじゃないかと話し合う。料理を食べ、酒を飲み、アーメダバード生活の愚痴を言い合う。不健全な形かもしれないがストレスが発散されていく。

僕は阪神建設に勤める黒岩さんという同世代の人と知り合いになった。聞けば日本での住まいは偶然にも同じ市内で交わす関西弁が妙に懐かしい。黒岩さんは毎日建設現場に出ているので肌がまっ黒。現場から市内に戻ってくると夜の８時か９時になるので、「たむら」にも全然行くことができなくてと残念がっていた。

奥の方では海原さんと山原さんがキッチンで料理をしている。出来上がって皆に運ばれてきた豚汁を啜ると、アーメダバードにもこんな世界があったのかと驚きを感じる。

一通り食べ終わると、海原さんと山原さんが仲良くバー・カウンターでお酒を作り皆に振る舞い出す。

「まるでハイボールのコマーシャルやな」と誰かが言いながら、焼酎やモヒートを煽っている。モヒート用にとたくさんのミントの葉が置かれている。

僕は食べ疲れてリビングで胡坐をかきながらビールを飲んでいた。バー・カウンターの周りでは歌声が聞こえている。

「むーかーしの友はー、今もとーもー」というフレーズが何度も何度も繰り返されたろうか。すると突然、

「ドサッ」という鈍い音がし、続いて何人かの叫び声が聞こえた。

「滝丸君が倒れた」

「おい、手を貸せ」と、誰かが叫ぶ声が聞こえる。

滝丸君が倒れたところに行くと、周囲で飲んでいた人たちが介抱しているところだった。すぐにバスルームに連れて行き汚れた服を脱がせる。ベッドの上に新聞紙を敷き詰めて倒れた滝丸君を横に寝かせる。

「大丈夫かな？このまま死にはしないかな」と誰かが不安を漏らす。

皆でいろいろ相談した結果、

「とりあえず、朝まで様子を見よう」という結論になった。

滝丸君が倒れた辺りをティッシュやらキッチン・ペーパーやらで綺麗に拭いた。滝丸君が倒れる前に何人かのメンバーはすでに帰っていたが、片付けが一段落したところでお開きの様相を呈し、さらに何人かが帰っていった。

「朝になればメイドが掃除に来るので、もうそれくらいでいいですよ」と公爵が言った。
「じゃあ残った人で静かに飲みますか」と言って、僕たちはリビングのソファに腰かけて今度は焼酎を飲みだした。

「飲ませすぎですよ、南さん」と黒岩さんが嗤いながらなじる。
「いや、本人が進んで飲んでたからさ。大丈夫と思ってたんだけど、急にああなってビックリだよ」と公爵が言った。
「死者が出ないことだけ祈りましょう」
「滝丸君、もし死んでたらマンダル工業団地のどこかに埋めるしかないですよ。重機で穴掘って全員で口裏合わせて」と、モティが言う。
「そうだマンダろう！」と誰かが叫ぶ。
「マンダる？」
「マンダルに埋めることですよ」とモティが言って、皆で嗤った。

この日飲み会は明け方まで続いた。キッチンの窓が明るくなってきてようやくお開きとなった。幸いにも滝丸君は朝になって無事目覚め、僕たちは「マンダら」なくて済んだ。「みなみ亭」と名付けられた飲み会は、今後も数カ月に一度の頻度で開催されることになる。僕は何とか通りに出てオート・リキシャを拾い、少し痛む頭を抱えながら今日一日寝て過ごすことになる人がどれだけいるだろうかと思いやった。

## 第４章　６月　日本人会始動

朝９時手配しておいた車が到着したと事務所の受付から連絡が入る。目的地までこれから２時間ほど走ることになるので出発前にトイレを済ませておく。今日は阪神建設に勤める黒岩さんに建設現場を案内してもらうことになっている。

市内を西に向かいイスコン寺院の交差点からＳＧハイウェイに乗り入れる。先月訪問した音無ベターライフのあるカディの町まで同じ道をたどる。音無ベターライフから目的地まではさらに５０キロ、１時間を要する。

音無ベターライフの前を通過しカディの町を抜けるともう大きな町は出てこない。どんよりした曇り空のもと農地がずっと続く。車窓から眺める視界の先まで田畑か木々しか見えない。この辺りでは小麦やコメの他に、乾燥地でも育つ綿花やヒマシ油の原料となるヒマ（トウゴマ）などを栽培している。海に近いところは土壌が塩分を含んでいて耕作に適さないと言うし、グジャラート州には大河も流れておらず土地は肥えていない。モディ氏の州知事時代に水不足解消のため巨大運河を開削し、隣のマハラシュトラ州のナルマダ川から水を引いてきているほどである。

道を走っていても牛や水牛を追う牧童の姿を見るぐらいで、畑で農作業する農民の姿は見えない。農閑期なのかそれとも奥まったところに集落でもあるのだろうか。道路では藁を満載にしたトラックや荷台に人を鈴なりに乗せた農耕用運搬車とすれ違う。よそ者には判らないだけでどんな場所にでも人やモノの行き来がある。

マンダル工業団地には予定通り２時間で着いた。マンダル工業団地はグジャラート州政府が日系企業向けに開発した工業団地である。入居は日系企業に限られ、インド企業との合弁会社の場合は、日本側の出資比率が過半数を超えていることなどが条件になる。マンダル工業団地ではすでに３社の日系企業が土地を取得し建設工事を始めている。２０１５年春頃から建設を終えた工場が徐々に稼働していく予定である。黒岩さんは阪神建設の現場監督として工場建設工事を監理していて、ほぼ毎日現場に張り付いている。

州道から工業団地の中に入っていくには未舗装の一本道を抜けていく必要がある。最終的には道路を整備し舗装される予定だが、工業団地の中はまだ道路の整備が遅れている。建設現場のある奥のエリアへ車を走らせていると、イタチかフェレットのような動物が道を横切っていく。体長は５０センチほどもありかなり大きい。

現場事務所にたどり着くと黒岩さんが出てきた。
「遠かったでしょう。ご苦労様です」
「とりあえず、事務所の中へどうぞ」と促された。ずっと現場に出ているせいかこの前会った時よりさらに日焼けの度合いが増している。
プレハブ造りの事務所に入ると図面や工程表がずらりと壁に掛けられている。長机の周りに並べられたパイプ椅子の一つに僕は腰を掛けた。
「忙しいところお時間を取って頂きありがとうございます」
「大丈夫ですよ。それに関西弁で話をするのも気分転換になりますしね。それにそろそろ雨季ですわ。雨季に入ると工事もいったん中断ですわ」
アーメダバードでは酷暑明けの６月から雨季が始まる。雨季に入るとこの辺りの土地一帯は水浸しになる。農業にとっては恵みの雨だが、建設現場では水が引くまで造成工事が止まってしまう。最終的には盛土をし、排水設備を整えていくのだが、それにはまだ時間がかかる。
「州道からここまでの道路は大丈夫でした？来年には舗装される予定ですけどね」と黒岩さんは言った。
「ガタンガタン揺れましたけどまあ大丈夫でしたよ」と僕は言った。
「途中イタチかフェレットを大きくしたような動物が出てきましたけどね」
そう言うと、
「そいつはマングースですね。コブラもいるしここは結構いろんな動物が出るんですよ。こないだは巨大なイグアナみたいなのも見ましたけどね。５０センチ以上あるやつですわ」と黒岩さんは嗤った。
「でもまだ動物なんかかわいいもんですわ。州道から一本道に入ったところで、農民がたまに通せんぼしよるんですよ」と黒岩さんは言った。
「どうしてです？」
「金目当てですわ。土地はすでに州政府公社のものになっているというのに、『俺たちのところには金が払われてない』と主張してくるんですよ」
「でも、ここは公社がちゃんと収容した土地ですよね？」と僕は訊いた。
インドは土地の権利関係が複雑である。土地を購入する場合は、まず役所に赴いて誰が真の所有者であるかを確認する必要がある。インドは日本にあるような土地の登記制度が

ない。替わりに土地に関する代々の売買契約書が役所に保管されている。通常はAからB、BからCと売買の度に所有者が替わっていくが、所有者の流れが途中で切れていることがある。また、所有者が死亡して相続が発生していたりすると、その土地に権利を持つ人間が多数存在する可能性もある。日系企業が独自でインドの土地を購入しようとすると、代金を支払ったにも関わらず、真の所有者を名乗るものが別に出てきたりするなど、面倒なことが起きる可能がある。その他にも税金の滞納はないか、土地が担保に入っていないかも調べる必要がある。さらには購入予定地が公道と接続しているか、河川道の指定を受けていないかも確認しなくてはならない。

その点州政府や民間が整備した工業団地に入れば土地に関するトラブルのかなりの部分を避けることができる。それでもなお、補償を受けていないだとか、工場の操業で農地に悪影響が出るとか主張して金銭を要求してくる者がいるのだという。これらの者が真の権利者であるかどうかも疑わしい場合もある。黒岩さんはこれらの者にいっさい金を渡してはいけないとスタッフに厳命している。そして安全第一を考え、争いになりそうな場合は無理強いせず、いったん引き揚げて様子を見ることにしている。

土地に関する話を聞いたあと、黒岩さんが、

「これから現場をご案内しましょうか」と言って、ヘルメットと安全靴を渡してくれた。

街中で見かける工事現場ではヘルメットを被らない方が普通だ。しかしこの現場では作業員全員がヘルメットと安全靴の着用が義務付けられており、安全管理がしっかりなされている。また作業員全員がオレンジや黄緑の蛍光色のベストを着ている。

数は少ないが女性も働いている。女性のヘルメットは男性用と違いお椀をひっくり返したような形をしている。ヘルメットの頂上はつるつるでなく円筒形の突起が出ているのだ。これは荷物を頭に乗せて運ぶためにある。

農村でよく見かけるが女性は薪を運ぶ時など必ず頭を使う。まず頭の上で布を円筒形に作りその上に紐で縛った薪の束を乗せる。歩きながら手を添えているがこれが一番安定して運べるのだろう。工事現場でも同じ考えのようだ。

工事現場ではコンクリート・ミキサー車やクレーン車などの重機が動いている。建物の骨組みがすでにできている個所もあり大きな柱が奥までずっと伸びている。長い部分で１百メートル、短いところで４０メートルだろうか。これが一つの建屋になると思うと工場の大きさを実感する。

「現場で何が一番大変です？」と黒岩さんに訊いてみた。
黒岩さんはしばらく唸ったあと、
「やっぱり、人ですね」と言った。
「真面目に働く作業員もいるけど、手を抜こうとするやつもいる。動かない者をどうやって気持ちよく動かしていくかが僕らの仕事ですわ」
黒岩さんは現場監督という立場のため、作業員一人一人を直接指導することはないが、黒岩さんのすぐ下についているスタッフとは毎日協議するそうだ。仕事をサボるだけでなく急に休んだりする者もいる。行程通り作業を進めていくためいろいろ苦労されているんだなと思う。
「雨季に入ったらスタッフと旅行を計画しているんです。連中をどっかに連れて行ってやらなあかんと思って」と黒岩さんは言った。
「一種の社員旅行ですね」と返した。
「お金がないので、車でダマンかディウに行って酒でも飲んでって感じですわ」と黒岩さんは嗤った。
どちらもグジャラート州に隣接した連邦直轄地でアルコール規制がない。アルコールに掛けられる税率も低いので酒も安い。黒岩さんの話を聞いていて「えらいな」と僕は思った。仕事でいくら近しい関係にあるとはいえ、インド人と丸２日も３日も過ごすのは気疲れもするに違いない。でも円滑に仕事を進めていくためには必要なことなのかなとも思う。
現場を１時間ほど案内して頂いたあと、邪魔にならないよう昼前に工業団地を離れた。
「日本人会の設立を考えているので協力して欲しい」と黒岩さんに伝えると、いいですよと快諾の返事を頂いた。

＊＊＊＊＊

ムンバイにはこれまで月２回のペースで出張している。飛行機がムンバイ空港に降りる時市内の様子がよく見えるのだが、今回は青色の屋根がとても目についた。よく見ると青色はブルーシートのようだ。ムンバイはアーメダバードよりも一足早く雨季に入っていて、簡易な造りの家々では屋根の上にブルーシートを被せ雨漏りを防いでいる。
今回はムンバイから内陸に入ったプネまで出張することになっていた。プネも人口５百万人の大都市であり、うちも事務所を構えている。製造業を中心に日系企業も１百社ほど

操業している。ムンバイは海に囲まれ土地が少なく、製造業を行うような土地を手当てするのは非常に困難な状況だ。このため車で４時間ほど内陸に行ったプネに製造拠点を構える日系企業が近年増えてきている。

ムンバイとプネの間には、国道４号線という片側３車線の立派な高速道路が走っている。プネで勤務する駐在員の中には家族をムンバイに置き、金曜日の夜高速を飛ばしてムンバイに帰る者もいるという。後日僕もプネからムンバイまで夜間車を走らせたが、渋滞もなく３時間ほどでムンバイに到着した時はその早さに驚いた。

早川さんと僕は朝７時にムンバイ市内を出発した。プネの標高は６百メートルありムンバイからだと坂を登っていく感じになる。車窓から見える山々は緑が少なく、所々でむき出しになっている岩土が荒々しい。山々を縫う高速道路をかなりの数のトラックが走っている。荷物の重量と坂道でエンジンが喘ぎ、時速２０キロも出ない国産の古びたトラックの横を僕たちの乗用車は通り過ぎてゆく。

「雨季は緑も増えて滝なんかもできるんですけどね」と早川さんが言った。

「週末ムンバイから車で来て、滝ではしゃいだりしてるらしいですよ」

雨季は山の樹木が瑞々しくなるのでムンバイ近郊の山はどこも賑わいを見せる。プネへ向かう高速道路の途中にはロナバラという町がありそこら一帯が別荘地になっている。多くのボリウッド男優や女優が別荘を構えている。

山を越えてプネ市内に入ってしまうと平地となる。プネには税務当局の事務処理センターをはじめ公的機関のオフィスが固まっている。

プネ出張の目的は日系クライアントを訪問することと事務所でセミナーを開催することである。５０年振りに改正されたインド会社法の関心が高く、改正の内容について話をすることになっていた。昨夜はムンバイ事務所で話をしたので今日はプネの番である。

セミナーでは出席者から熱心に質問が寄せられた。決算期を３月に統一することや居住取締役の選任など、どれも自社に関係することばかり。コンプライアンス違反となれば罰金を科せられる可能性もある。セミナーを行う前に十分予習をしてきたつもりだったが、それぞれの会社の中での具体的な質問になるとなかなかすぐ答えられない。頂いた質問のいくつかは宿題として後日回答することにする。

セミナー出席者で面白い方々と出会った。

一人は電機メーカーに勤めておられる方で、ボランティアでヒンディ語の辞書を作って

いるという。単語だけでなく文例も掲載しているのが特徴で、かなり完成に近づいているという。出来上がりが楽しみである。

もう一人はプネ日本人会会長の梅野さん。セミナー後に早川さんと3人で近くの地ビールレストランで会食した。アーメダバードで日本人会の設立を考えていることを話すと「それいいね」と江戸訛りで返してくれたのが印象的だった。プネ日本人会は年会費を徴収しておらず、イベントの都度参加者から実費を徴収する方法を取っている。話を聞いていてアーメダバードもそういう考え方でやっていくのだろうなと感じた。

「しかしプネは地ビールまであるんですか？」と僕は素直に驚いた。

「そうよねー。プネには何軒かあるし、ベンガルールにもいくつかあるよね」と梅野さんは言う。

薄黄色の酸味が効いたベルギー風のビールも飲めるし、褐色に包まれたダークエールも飲める。ベルギー風ビールを飲みながら素直に美味しいなと感じ、しかしまた、アーメダバードに帰ったら真っ先に公爵に自慢してやろうという意地悪な気持ちも芽生えた。

＊＊＊＊＊

プネ出張から戻った水曜日、いつものように日本食レストラン「たむら」に集まり、近況を語り合いながら皆で食事をする。もはや家族でご飯を食べているような感じだ。そして毎回ではないが恒例になりつつあるアフターの飲み会を公爵の家でやる。その夜モティも参加し3人で飲んでいると、公爵が、

「小林さんも、ジュナーガル行かない？」と訊いてきた。

どういうことなのか詳しく聞くと、予定していたデリー主張がキャンセルになったため、モティを誘って州内のどこかに旅行しようという計画を立てているらしかった。グジャラート州南部に「ギルナール山」という州内最高峰の山がある。真っ平らな土地のグジャラート州では最高峰と言っても1千メートル強しかないが、山全体がヒンドゥ教とジャイナ教の聖地になっているらしい。一説によると最奥のヒンドゥ教寺院まで一万段の階段を越えていかなければならないという。

ギルナール山までは車をチャーターしないといけないが、参加人数が増えると一人当たりの交通費も安くなると聞いて心が動いた。

「じゃあ小林さんも、参加ってことでいいっすね」

というモティの声に後押しされ、僕も旅行に参加することになった。

金曜日の夜１０時公爵の家を出る。夜のＳＧハイウェイを南へ降りていく。普段通ることのない時間帯なので、看板のネオンが街を違った風景に見せる。ＳＧハイウェイは市街の端で国道８Ａ号線と名前を変え南へ向かう。市街地を離れていくにつれ車の数は減り、走っているのは僕たちの他はほとんどトラックだけになる。市街から２０キロ走った頃、周囲に明かりがまったくない原野の中で車の窓を開けて空を見る。冬ほど空気は澄んでいないが、地上の光がまったくないところでは星がよく見える。あまり窓を開けすぎていると風が轟々と音を立てるので、早くも眠りに落ちそうになっている公爵から文句が入る。

車はリンビ、サイラ、チョティラといった小さな町々を過ぎていく。ここまで１５０キロ近く走っている。それでも行程の半分を過ぎた程度である。この辺りではアーメダバードに次ぐ大きな町ラジコットまであと４０キロかと考えていると、僕もいつしか眠りに落ちていて、次に目覚めた時は、ギルナール山の麓町ジュナーガルまであと５０キロの地点まで来ていた。

ドライバーからトイレ休憩を入れるという合図があり僕たちも車を降りる。車の座席で寝ると少し体が痛い。車を降りてさっそく屈伸運動をする。

車を止めたところは茶屋になっていて１杯１５ルピーのチャイを啜る。朝４時の空気は少し冷たく、温かいチャイが心地よい。一杯では飲み足りないなと思いお代わりしようと思ったが、トイレに行きたくなってはと思って止めた。

車はジュナーガルの町を抜けギルナール山の登山口へと向かっていく。朝６時前だがもう空は明け始め、辺りは明るくなり、曇り空が見える。このまま曇っていたらいいのになと、これからの天候に期待する。

ギルナール山の登山口は食堂や雑貨・お菓子を売る商店が並んでいる。まだ店の電灯がついている。商店の店先で竹杖を貸し出していたので僕は２本借りることにした。１本２０ルピーで返却時に１０ルピーが戻ってくる。公爵は１本借りていたが、まだ２０代のモティは「杖は要らない」と店の人につっぱねていた。「若者よ、後悔するぞ」と僕は心の中でほくそ笑んだ。僕は２本の杖を使ってできるだけ足への負担を減らすつもりでいた。

朝の薄曇りの中、登山道に足を踏み入れる。登山道と言っても土の上を歩くことはなく

登り口から2メートル幅の石畳が続く。リュックサックにシューズ履きの僕たちはずんずん登山道を登っていく。尾根道沿いには所々で小屋が出現し飲み物などを売っている。ハヌマン・ラングールという手長の灰色猿が周りの木々の上を飛び回っている。前後を歩くインド人はサンダル履きで手荷物も持っていない。男性はズボンにシャツ姿で、女性はサリー姿である。あたかも家の近所を散歩でもしているような感じなのだ。おばあさんが家族に手を引かれて山をぼちぼちと登っていく。

４０分ほど登ると展望台がいくつも続く場所に出たので僕たちはその一つで休憩する。リュックからビスケットを取り出し皆で分ける。朝ごはんを食べていないのでビスケットですら腹に沁みる。

「家族連れとか頂上まで登るんかね？」と公爵がつぶやく。

「まさか。この辺まで来て帰るんじゃないですか」とモティが言う。

展望台から下の方には麓の町が見えている。町の向こうの山々にもどんよりした雲がかかっている。

展望台から１０分ほど登ると山の上の方は雲で覆われているのが判るようになった。数百メートル先までは見えるのだがそこから先の視界はなく山の上はまったく見通せない。

「どうするよ。このまま行く?引き返す？」公爵が言う。

「もちろん進みましょう」淡々とした口調でモティが言う。ここまで来てという思いが湧き、僕も先に進む方に賛成した。

モティと僕が再び歩き始めたその後ろを、公爵が

「えー、もうやめよーよ」と愚痴りながら続く。まあ遠くの方はよくわからないが、雲の中なのか靄に包まれているのか体が水分を受けて涼しく感じる。

しばらく歩くと巨大な絶壁がそそり立っているのが靄越しに見え始めた。白い靄の奥で黒い岩肌が存在感を放っている。この岩をどう越えていくのかと思っていると突如階段が現れた。どれだけの段数があるか判らないがこの先は岩肌に沿って階段を登っていくことになる。絶壁の高さは相当あったように感じたので、絶壁の頂上まで階段で歩くとなるとかなり辛い。一歩一歩ゆっくりしたペースで歩み始める。２本の杖を上手く使って足に負担をかけないようにせねば。

岩肌に取り付けられた階段は少し幅が狭くなっていて、立ち止まっているインド人を追い越すのも一苦労する。所々出てくる階段の踊り場で人を抜いたり抜かされたりするのだが、一息入れている僕たちの横を女性を乗せた駕籠が通り過ぎていく。一本の棒の前後に

男の担ぎ手がいて、間に板敷が吊り下げられている。板敷の上に横向きに座るようになっている。

さて再び歩き始めるかと思いしばらく進んでいくと、さっきの駕籠が坂の途中で休憩を入れている。相当きついのだろう。仕方がないので脇をすり抜け先に進んでいく。階段は延々と続いているので僕たちもまた休みを入れる。すると駕籠が抜いていく。

「駕籠に乗っても歩くのと時間は変わらんな」とモティが揶揄する。

そんなことを繰り返しながら進んでいくと、建物らしきものが靄の中に浮かび上がってきた。段々近づいていくと、高さ１０メートルほどの巨大な石門が口を開けて僕たちを待っていた。中に入って行くと道幅は急に広くなり、ちょっとした商店と寺院が立ち並んでいる。人気がなく全てが靄に包まれていると、何か忘れ去られた廃墟に立ち入っているような感覚になる。先に続く道の右側は石壁が続き、石壁の奥にはジャイナ教の寺院が靄に浮かぶ。はっきりしない道の先にも寺院が立ち並んでいるようだ。予め仕入れておいた情報と照らし合わせると、一帯は山の中腹にあるジャイナ教の寺院群がある場所だろうと当たりをつけた。

ここまで2時間かけて歩いてきたが、ガイドブックによれば登山口から最終地点まで４時間かかるらしい。「ネミナータ寺院」という有名なジャイナ教寺院が近くにあるのだが、靄で判らないので帰りに立ち寄ることにし先を急ぐことにした。

階段は再び続く。５０分も登ったろうか。開けた峰の一つに茶店が何軒か並んでいる場所が出てきた。僕たちは茶店の一つに入り椅子に腰かけた。水も持っているが甘い炭酸水の誘惑に勝てない。3人とも「リムカ」というレモンソーダを手に取り一気に飲み干した。ビスケットを摘んでいると人心地着いてくる。

頂上はもう少しらしいので休憩はほどほどにして歩き始める。峰から峰へと尾根伝いに歩くのだが、靄のために視界は数十メートル先までしかない。石畳の幅も８０センチほどに狭まり、両側は崖となり下に落ちている。馬の背と言われるような場所を強風に煽られながら気を付けて歩いていく。標高が上がってきたのと靄のせいで随分と涼しい。むしろ寒いくらいに感じる。歩く方としては涼しい方がもちろんいいのだが、びゅうびゅうと吹きすさぶ風の音を聞いていると、山が荒れるとはこういうことを指すのかなと思う。風が吹くたび視界が広がったり狭まったりする。いくつ目かの階段をようやく登りきると小さな祠と祭壇が出てきた。

「来ましたで。頂上」と公爵が嬉しそうに言う。

カラフルなタイルで覆われた祭壇の奥は断崖となって下に落ちているようなのだが、やはり靄のため全容が見えない。しかしここから身を乗り出すのは恐ろしく危険だということだけは感覚で判る。

周囲を見渡していると、祠の上に「エアテル」と書かれたパラボラ・アンテナが立っているのが目に入った。

「あそこ、中に2人いましたよ」とモティが言う。

「坊さんの格好をしてたけど、テレビも見てるね」と皮肉る。

確かに祠の前を通り過ぎる時、中では髭伸び放題でオレンジの布を身に纏った修行僧と普通の格好をしたインド人が談笑していた。エアテルはインドのテレビ事業会社である。

「やっぱりここで寝泊まりもしてるんやろね」と僕も言う。

あいつらは酒も飲んでいるに違いないだのと軽口を叩いていると、公爵が、

「あー、あれ見てみて」と叫んだ。

行く先を見れば靄が晴れてきている。そして異様な光景が目の前に飛び込んでくる。

「あんなとこまでどうやって行くの？」とモティが途方にくれる。

無理もない。僕たちの目の先には巨大な岩山が立錐し、わずかな頂上は円形の小屋で占められている。高さは僕たちと同程度だがその間には深い谷があるのだ。今ここにある祠など単なる前哨基地にしか過ぎない。間違いなくあれが登山道の最終地ヒンドゥの聖地だ。グジャラート州最高地点はここではなく、今見えているあそこなのだ。

「どうします？行きます」モティが不安を漏らす。

「やっぱ、ここまで来たら行くしかないでしょ」と今度は公爵が力強く言う。

僕たちの位置からは眼前の小屋に上っていくルートはまったく見えない。おそらく今いる場所からいったん谷に降り、そこから眼前の岩山の裏側を登っていくのだろう。行く先の階段は谷へと続いている。一度降りてそして登るより他に道はない。

「めっちゃ降りてきましたよ」モティがか細い声を上げる。

見上げると僕たちが先ほどいた場所はずいぶん上の方にある。

「モティさん。まあ、ぼちぼちいきましょうや」と僕は言って再び歩き始めた。自分にいい聞かせていたとも言える。

しばらく行くと、案の定道は登りに変わる。岩山の裏側は巨大な石壁と階段が続き、九十九折になって上まで続いている。難攻不落の城塞という表現がぴったりくる。周りのイ

ンド人もみな登っていく。僕たちも後に続いて聖地への歩みを進める。
階段を何度折れ曲がったことだろうか、遂に小屋の入口が見えた。小屋はコンクリートとトタンで覆われ、寺院と言うより住居のようだ。入口近くで靴を脱いで小屋に入る。こういう時靴がなくならないかといつも心配する。
薄暗い小屋の中は２０畳ほどのスペースしかない。中央にヒンドゥの神々が祭られ、横にオレンジ色の服を着た僧が何かブツブツ唱えている。さっきの祠の男と同じようにやはり髪と髭が伸びているが、歳がいっているせいか威厳がある。インド人は僧が何か言うたびお布施を置きながら時計回りに部屋の中を進んでいく。僕たちはただ周囲のインド人に合わせながら進んでいった。そしてぐるっと一周してしまうと、入口と同じところから小屋の外に出た。
小屋へと続く階段は細く立ち止まるスペースはない。僕たちは靴を履いてしばらく進んだところで人心地着いた。
せっかくなので3人揃った写真を周りのインド人に撮ってもらった。
「さっきのが聖人ですかね？」モティが訊く。
「やっぱそうだろね。ここがエンドだしね。ラスボスでしょ」と公爵が言う。
「ラスボスにしては、ちょっとしょぼくないですか？」
「確かに痩せこけてたもんね。そりゃベジしか食ってないんだもん」そう言って公爵は嗤った。
さっきの僧の隣には軍の兵士が一人胡坐をかきながらライフルを手にしていた。のんびりした警備だなと思ったが、やはり重要な場所なのだろう。

さて帰途になり、先ほど頂上と思い込んでいた祠まで再び階段を上がって行くことなった。モティは息が上がってしまっている。歩いては休みを繰り返している。僕は一定のペースで登り続け一番先に祠まで帰って来た。靄が完全に抜けた祠の先は遠くまで緑が広がり大きな湖も見えている。空気は涼しく空は青い。インドに来てこんな爽やかな気分になったことはない。
しばらくしてモティと公爵が祠にたどり着く。「2本の杖の効果あるでしょ？」とモティをからかう。ここから先は下りのみ。精神的に余裕を感じていた。
歩みを進めて先ほどジュースを飲んだ茶店まで戻る。僕たちは再びビスケットを食べ、リムカを飲み干した。茶店から少し先に行けば、来る時に靄で覆われていたジャイナ教の

寺院群が真下に見える。
上から見下ろすジャイナ教の寺院群はガイドブックにも写真が掲載されるほど美しい。細密な彫刻で覆われた尖った屋根の寺院は地上からでもよく見かけるが、丸屋根のドームの寺院を見るのは初めてだった。丸屋根は唐草模様や花柄、トランプのクローバーのような文様など、中央アジアあるいは中東を感じさせるような絵柄が細かなタイルで表現されている。靄が晴れたことに感謝した。
僕たちはこれまで辿ってきた道を戻っていく。ジャイナ教寺院群の横を抜け巨大な石門を潜って下へと降りていく。
やがて道は巨大な絶壁のところまで戻ってきた。下を見れば無数の階段がこちらを向いて登ってくる。階段はどれだけ折り返しているのだろう。どれほどの石段が取り付けられているんだろう。来る時はこれが靄で見えなかったから先に進めたが、絶壁に這う階段を見てしまったら登ることを挫けていたかもしれない。
ただひたすら階段を下りていく。
階段を降りるに連れてだんだん暑くなってくる。下りだから楽なはずなのに力が湧いてこない。足を前に出すのが億劫になってくる。
「みんな、先に行ってて」
これはあかんと思い僕は小休止を入れることにした。先ほどモティをからかっていたのが嘘のようだ。休んでも回復したという感じにはならない。座っていると楽だがやはり前に進まないといけない。
這うように前進を続ける。
やがて朝最初にビスケットを食べた展望台に到着し、みんなはかなり先に行ってしまったかなと考える。気分はすでに敗残兵である。
どうしても飲みたくなり、途中の露店で冷たい炭酸水をさらに一本飲んだ。１０分ほどゆっくり休憩してまた歩き出す。カーブを曲がるたび、登山道の入口がまだ現れないことにがっくりする。歩いては止まり歩いては止まりしてようやく入口まで帰ってきた。みんな待ちくたびれただろうか。
駐車場まで戻ると2人ともエアコンをかけた車内でくつろいでいた。
「待った？」と訊くと、モティは２０分くらい前に着いたとのことだった。一番乗りである。モティの5分遅れで公爵が帰って来たとのこと。
「杖2本持っとったのになあ」と悔しそうに言うと、

「やっぱ若いもん、モティさん。まだ２０代だもん」と公爵が返した。
事実そうなのだが、やはり少し悔しかった。
時計は午後１時３０分を示していた。途中何度か休憩を取って往復８時間弱であればそれなりに早い方か。そう言って自分を慰めた。

山を下りてきた僕たちは今夜宿泊予定のホテルへ向かった。ロータス・ホテル。ジュナーガルの町で一番高い部類のホテルに入るが１泊２千ルピーもしない。ホテルのレストランで昼食を摂りながら夕方までの予定を相談する。
「頑張って砦行っちゃいます？」モティが提案する。
このまま部屋でゆっくりしたい気もあったが、明日はまたどんなハプニングが起きるかわからないので、疲れた体を引きずってでも今日行くことに賛成した。
「ウパルコート砦」は町を見下ろす高台にあり、紀元前のチャンドラグプタ王朝時代に造られ、統治者が替わる度に増改築されてきた。飾られた大砲が町を見下ろす。ジュナーガルの町にあまり高い建物は見あたらない。町と反対方向にはさっき登ったばかりのギルナール山が聳える。ここから見ると山の半分から４分の３あたりが灰色の岩塊で覆われていて木々が一切見えない。岩塊の上にジャイナ教の寺院群が見える。１千メートルの高さしかないが周囲に山がない。孤高の姿がやはり聖地と感じさせる。
僕たちは砦の中にあるムスリム王朝時代に建てられたモスクを見たあと、「アディ・カディ・バブ」という名の階段井戸に向かった。グジャラート州にはいくつも階段井戸が残されている。井戸の水面まで近づけるくらい地下深いので真夏でも少しひんやりする。その昔井戸の周りで王妃たちが涼んでいたということだ。両側が切り立った壁を深さ４０メートルまで降りていく。上の方の壁はレンガで固められているが、下の方は元々あった岩盤層を削っている。幅３メートルほどの小径を下っていく。見上げれば小径の幅だけの空が見えている。
階段を降りるごとに臭気が増してくる。両側の壁の所々窪んだ部分はハトの住処になっているのだ。
「もう、臭せーしこの辺でいいんじゃない？」と公爵が根をあげ始める。
「あともう少し」と言って、モティと僕は井戸の水面が見えるところまで降りていく。残念ながらたどり着いた先は淀んだ水とその上に浮かぶペット・ボトルやゴミの山だった。おそらく昔は憩いの場所だったのだろうと無理やり想像しながら、４０メートルも積み上

がった壁面のレンガに往時の建設の苦労を感じた。
ハトの糞の臭気のせいで長居することはできず、僕たちは少し痛み始めた足を引きずりながら地上へと階段を登って行った。

その夜僕たちは公爵の部屋に集まって酒を飲んだ。昼間の疲れもあって夜９時にはぐっすり眠りに落ちた。そして案の定翌朝足はすっかり筋肉痛モードに入っていた。

ジュナーガルの近くにはササン・ギル野生動物保護区があり、そこには野生のアジア・ライオンが生息している。サファリ・ツアーなどもあるのだが雨季は閉鎖されている。そこで僕たちは、翌日ジュナーガルの街中にある動物園に行ってみることにした。入ってすぐのエリアは鳥ばかりだったが、奥へ行くとライオンやトラが出てきた。彼らはのっしのっしと柵の傍まで歩き回る。一番柵に近づいてカメラを向けていると、近寄ってきたライオンにおしっこをかけられてしまった。ライオンが振り向きざまにピュッとやったと思うのだが、わずかに飛沫がサンダル履きの爪先にかかった。ライオンにやられたと話すと、モティが「何か運がつくんじゃないですか」と言って嗤った。
園内は暑く動物たちも活動が鈍かった。クマなどは死んでるんじゃないかと思うくらいグデーと横たわっていた。
僕たちがエミューやシカを見ていると、周囲のインド人がやたらと僕たちを観察しているのが気になった。モティがカメラで撮影しようとしている姿を１０数人の若者が見ている。モティに指摘すると、
「アジア人が珍しいんですよ。奴らにとって僕たちが一番の珍獣なんですよ」と言い、公爵と僕は吹き出した。

公爵、モティと行った初旅行には後日談がある。動物園を出た僕たちは、夕方にはアーメダバードに無事着き、翌月曜日３人ともそれぞれ出社した。午前中電話で話を聞くと足が痛くて階段の上り下りもままならないとのこと。僕も朝から小さな段差で難儀し、何度も足を切り落としたいという思いに駆られていた。聖地ギルナール山に登った代償として、僕たちはその後４、５日ほど筋肉痛に苦しめられることになった。
もちろんいいこともあった。
この旅行を機に僕たち３人は「ぶらりグジャラート会」を発足した。会の決まりも何も

ない。気が向いたらどこか旅行でもしようといった、そういうユルい会である。

＊＊＊＊＊

公爵とゴート製薬を訪問し日本人会の役職について断られたあと、もう一度安福さんと相談して、会長の話を細江さんに打診することが決まった。細江さんが会長を引き受けることが前提になるが、相模工業の相川さんを副会長に推してはどうかという話になった。相模工業はマンダル工業団地の入居企業の一つであり、マンダルが注目を浴びる中でちょうどいいと思われたからだ。また安福さんの知り合いの久本さんという弁護士がアーメダバードと日本を行ったり来たりしているということで、久本弁護士にも相談に加わってもらうことにした。久本弁護士がアーメダバードにいる時に合わせ、水曜日の「たむら」の前に細江さんと会う段取りをつけた。

「４人で打ち合わせをしたいと聞いて何事かと思いましたよ」と細江さんは少し緊張した面持ちで口を開いた。

公爵が口火を切った。

「何となくお感じとは思いますが、日本人会のことなんです。これまで個人的な集まりや飲み会をやったりしていますが、アーメダバードに日本人会があってもいいんじゃないかと思うんです」

「大体どれくらいの人数がアーメダバードにいるんでしょうねえ」と細江さんは呟いた。

「私が実際にお会いした方だけで４０名少し。さらにバドーダラとアナンドにも日本人が何人かいます」と僕は答えた。

「じゃあ５０名以上はおられるんですね。もう組織としてあってもいいのかもしれませんね」

「細江さんに日本人会の会長に就いて頂けないかと思いまして」と公爵が言った。

「僕がですか？他にもふさわしい方がおられるんじゃないですか？」細江さんはかぶりを振った。

「ゴート製薬さんにも打診しましたし、音無ベターライフの坪井社長にも訊ねてみました。どちらも役には就かないとはっきり言われまして」と僕は添えた。

「細江さんが引き受けて下さらなければ、日本人会は成立しないと思っています」と久

本弁護士が添えた。
しばらく間があった。
「うーん。仕方ないですね。じゃあ日本人会やりますか」
この時、何とも困ったような、それでいてはにかんだような細江さんの表情を忘れることができない。嬉しい思いが湧き上がると同時に、細江さんが顔となって日本人会をやっていくんだという現実感が急に襲ってきた。ここからは遊びでは済まされない。細江さんに恥をかかすようなことだけはしてはいけないと思った。

## 第５章　７月　発起人打診

東洋商事に勤める常盤さんから「今度新しく開業したホテルが日本食を出すらしいので行ってみませんか？」と誘いがあった。

否応もない。変化の少ないアーメダバードでは話のネタだ。カレー弁当を食べ飽きていることもあって、さっそくお昼に行ってみようということになった。

常盤さん――公爵やモティは『トキボー』と呼んでいるのだが――は、２０代後半の爽やかな青年である。スラリとした長身にキリッとした顔立ち。女性はまず放っておかないタイプだ。常盤という苗字もまた華を添える。一見、貴公子という印象を人に与える。

しかしトキボーは苦労人である。大学を出て企業に就職してといった普通の道を彼は歩いてきていない。２０代の若さで起業し、そしてまたこうしてインドに飛び込んで来ている。東洋商事で勤めるとはいえ彼も現地採用。将来が保証されない環境で物事にチャレンジしている姿勢に、僕は同じ匂いを感じていたのだと思う。まあこっちは１０年くらい歳がいっているぶん質が悪いのだが。

決して仲が悪いわけではないのだが、やはり同業他社とあってモティはトキボーと少し距離を置いている。トキボー自体も一匹狼的なところがあって、アーメダバードで親しくしている日本人も少なそうだった。歳が離れていて何のしがらみもない僕は、たまにご飯を食べるなどして個人的にこの青年と付き合っていた。

イースティン・ホテルという名の新しいホテルは、市内北部のＳＧハイウェイ沿いに建っていた。「シルクロード」という名前のアジア料理のレストランにいくつかの日本食メニューがあるらしい。

僕たちが訪れた日はまだ正式開業前だったが、すんなり受け入れてくれた。

「この前うちにホテルの営業担当が来たんですよ。日本食出すからぜひ来てくれって」とトキボーは説明した。トキボーの勤める東洋商事もジェトロと同じ「ピナクル・ビジネス・パーク」にある。おそらく入居日系企業すべてに営業をかけているのだろうとの推測だった。トキボーは年齢の割に地頭の良さがある。さらに礼儀正しいので好感が持てる。

メニューを見ると「うどん、そば、丼もの」、そして「握り寿司」まである。

「マグロやサーモンをアーメダバードまでよく持ってきたね」と感心する。

「冷凍なんでしょうね。試してみます?」とトキボーが言う。
「じゃあサーモンいってみよう!あと、うどんは半分ずつしよう」と僕は提案した。
ホテルのレストランだけあって席数もかなり多い。「たむら」もいいが２０人で一杯になる。ここは大人数の場合に使えるねとトキボーに言った。テーブルもゆったりし、窓際の席はガラス越しに外の光がよく入り気持ちいい。
「やはり日本人が増えてきてるから、これからはどこも日本食を売りにするんじゃないですかね」とトキボーは言う。「ノボテル」や「シェラトン・ホテル」でも日本食メニューがあるらしい。ところがノボテルの親子丼は目玉焼きに鶏肉を乗せた代物で、それじゃロコモコ丼だと2人して嗤った。またシェラトン・ホテルは数日前に予約をしておかないと、行ってオーダーしてもすぐに食べられない。そういう意味では握り寿司を常時食べることができるのは画期的だ。
運ばれてきたサーモンの握りは6貫で7百ルピーとインドにしてはいい値段だが、ネタが大ぶりで脂の乗りも悪くはなかった。
一方うどんだが、これはまったくと言っていいほどの別物が出てきた。透明なスープの中にエビやイカ、そしてブロッコリーやニンジンなどの具材が入っている。乾麺のうどんが入っていることだけが、「うどん」という言葉をかろうじて支えている。
「これは海鮮そばだね」僕はそう評した。
「確かに。『うどん』ではなく海鮮そばだと思って食べると美味しいですよね」とトキボーも賛同する。
インドにいるとたまに不思議な日本食に遭遇する。おそらくそれらは作り手の想像が形になったものなのだろう。日本にも「スパゲティ・ナポリタン」なる代物があるではないか。でも、このうどん、いや海鮮そばはなかなか良かった。「ホテルも綺麗だし、日本から出張者が来た時にはここに泊まってもらうのもありですね」というトキボーの意見に僕も同意した。

最近週末はどうしているのといった話をしていると携帯が鳴ったので取った。
「初めまして。ムンバイ総領事館の中村領事です。ムンバイ日本人会の安田さんから小林さんの連絡先を聞きまして」
領事館から何の用かと一瞬思ったが、安田さんと聞いて合点がいった。日本人会設立の動きを聞いて連絡されてこられたようだ。中村領事は先を続けた。

「アーメダバードで安全対策に関わる連絡協議会の開催を考えております。つきましては、在住日本人にお集まり頂き、皆さまから広くご意見を頂けないかと……」

８月の終わり頃にアーメダバードで日本人在住者を集めて会議を開き、治安情勢や安全対策について意見を聞きたいという趣旨らしかった。ムンバイでも同様のことをやっているらしい。在住日本人への案内や出席者の取りまとめ、それに会場の手配をお願いされた。悪い話ではないし、他に一緒に動いているメンバーに声がけして改めてお返事しますと中村領事に伝えて電話を置いた。

「仕事ですか？」トキボーが訊いた。

「いやいや。ムンバイの領事館から。今度アーメダバード在住の日本人を集めて会合を開きたいんだって」と僕は答えた。トキボーにも日本人会のことをすでに伝えてある。

「ちょうどいい機会じゃないですか。何かお手伝いしますよ」

「どれくらいの人数集めなあかんのやろね。２０人は集めな格好つかんかな」と僕は不安を漏らした。

「それぐらいの人数だったら、うちの会議室を使ってもいいか上司に確認しますよ」とトキボーは言った。

東洋商事の会議室を一度訪れたことがある。椅子だけであれば２０人は何とか入れそうだった。

「じゃあ、やるとなったら、改めてお願いするかもしれないのでよろしく」とトキボーに言った。

イースティン・ホテルでトキボーと食事をしてから間もない７月１０日、細江さんと僕は公爵が勤務するジェトロの事務所に集まった。中村領事から依頼があった連絡協議会の件について相談するためである。弁護士の久本さんは日本の仕事が忙しく帰ってしまったので３人で協議することになった。

ムンバイ総領事館からの依頼内容を２人に説明する。

「治安や安全対策がメインの議題なのですが、アーメダバード在住者から広くいろんな話を聞きたいというのが趣旨のようです」会議を開くこと自体、２人から何の異論もなかった。

「まずは人数を集めないといけないですよね。僕がこれまで会った人の数は４０名ほどです。まずは全員に案内しましょうか？」僕はそう言った。

「小林さんの知らない人で僕が知っている人が何人かいるので、もうちょっと人数が増えますね」公爵が付け足した。
「じゃあ案内を流してみて、集まらないようだったら一本釣りしていきますか」と細江さんが言った。
「そうですね。ある程度の人数は確保したいですよね」と公爵も同意する。
「会場は東洋商事さんに提供して頂けるようです。椅子だけだったら２０名くらい何とかなります」トキボーが上司から承認をもらったことも添えた。
この話で一番ネックとなりそうだったのが会場のことだった。２０名くらい集めるとしたらどこかそれなりの場所が必要になる。領事館の方では予算が無いらしく、会場を借りるとすれば出席者で費用を分担しないといけない。２０名をかなり超えると会議室に入るかどうか判らないが、まずは東洋商事に無償で提供してもらえたことは助かった。公爵も何度か東洋商事を訪問していて会議室の広さは知っている。

協議会の打ち合わせ事項は終わったので僕から一つ提案をした。
「連絡協議会はアーメダバード在住の日本人が一堂に集まるせっかくの機会だと思います。ですので、日本人会の設立発起人会をここで発足させませんか？協議会終了後に日本人会設立の趣意を出席者に説明し、その場で発起人を募り、選出された発起人が発起人会の一員として今後動いていけばどうでしょう」
「なるほど、よさそうですね。発起人の話は事前に安全対策連絡協議会の案内にも入れます？」公爵が訊く。
「どうでしょうね。日本人会の話を予め表に出してしまうと、いろんなことを聞いてくる人もいると思うので、『協議会をやりました。その流れで発起人会が出来ました』の方が自然で無難かなと」僕は笑いながら付け加えた。
「まだ『発起人会』の段階なので、形に縛られず自由に進められると思いますよ」
「いいんじゃないですか。せっかくだし、領事にも立会人になってもらったら」と細江さんは言った。
細江さんと公爵とさらに詰めていった結果、発起人候補として僕たち3名の他、久本弁護士、坪井社長、相川さんなどの名前が挙がった。連絡協議会の開催までに連絡を取り、発起人就任をお願いすることに決まった。
連絡協議会の案内は8月に入ったらすぐ出すことも決まった。一つずつ物事が前に進ん

で行く感覚があった。

＊＊＊＊＊

グジャラート州に住む日本人の大半はアーメダバードに住んでいる。しかし近郊の町々にも日系企業が進出し、やはり日本人が住んでいる。アーメダバードから南へ５０キロの「アナンド」やさらに５０キロ南の「バドーダラ」は、大手日系企業が進出し日本人駐在員も固まっている。この機にクライアント先の日系企業を訪問することにした。仕事の話に加え、連絡協議会や日本人会設立の話をしようと思っていた。遠いので参加されるかどうか判らないが、できるだけ多くの人に案内しておきたかった。

手配した車に乗り込み一路バドーダラを目指す。アーメダバードからバドーダラまでは国道８号線でつながっている。国道８号線は首都デリーから商都ムンバイを結ぶ大幹線道路である。途中に料金所が設けられ、自動車、バス、トラックは通行料金を払う。一見高速道路に見えなくもないが、日常的に牛や山羊などの動物や人が横断している。

しかしアーメダバードからバドーダラの区間は、名ばかりの高速道路でなく実態も日本のそれに近い。盛土された路面には外から車両や人が容易に入ってこられない。片側２車線しかないが、ゆうに時速１百キロを超えて走行しても路面がいいため振動を感じない。これまでいくつかの道路を走ってきたが、インド国内でも最高クラスの道路だろう。この区間は地図上も「ナショナル・エクスプレスウェイ（ＮＥ）」と表記されていて、通常の国道（ナショナル・ハイウェイ、ＮＨ）より格上の扱いになっている。

バドーダラに近づくと高速道路を降りて市内を迂回するリング・ロード（環状道路）に向かう。リング・ロード周辺は農地や牧草地が広がるが、しばらく走ると周囲の光景とは場違いな立派なビルが見えてくる。クライアント先であるＬ＆Ｔ八千代の入るオフィスである。オフィス、ホテル、ショッピング・モールなど人が集まるところでは、入口で警備員が車体の下やトランクをチェックする。インドでは爆弾テロ事件がたまに起きるからである。

エレベーターで８階まで上がり部屋に通された。Ｌ＆Ｔ八千代の副社長土井さんに会いに来た。

「いやー、よく来たね、どうぞどうぞ」と促されて椅子に座る。飲み物はと訊かれたので土井さんと同じチャイをお願いする。

「アーメダバードから結構かかるでしょう。バドーダラから遠いので、アーメダバードにもずいぶん前から行ってないねえ」と言って土井さんは笑った。

「ムンバイの木田さんから土井さんのことを聞いてご連絡しました」

ムンバイの機械メーカーを訪問した時、木田さんという駐在員が、「グジャラートに面白い人がいますよ」と土井さんのことを教えてくれたのだ。土井さんはインド駐在歴が延べ１４年になる。最初は１９８５年から８６年まで南インドのケララで。そして２００２年から現在までバドーダラで駐在生活を送られている。Ｌ＆Ｔ八千代はインドの大手エンジニアリング企業Ｌ＆Ｔ社と八千代建設との合弁会社で、ここバドーダラでは世界各国からのニーズに応えるため、８５０人のインド人エンジニアを使って設計を一手に引き受けている。

「それで、小林さんはインドに何年いるの？」海外にいるとよく訊かれる質問だ。

「正直、決まってないんです。というのは、私は日本の監査法人を辞めてこちらに来ていますので。今はＥＹインドの人間なものですから」と僕は話した。

土井さんはこちらをじっと見てこう言った。

「日系企業が望んでいるのは、安くて、きちんとやってくれることだわ。ＥＹさんが良いのは判るけど、普通の会社だと高すぎて使えないんじゃないかな。その辺のニーズを小林さんが満たしてあげたらどうだろう？」

「インドに居るなら腰かけではダメよ。本腰入れて根を張ったらどうだろう」

ＥＹインドで何年仕事をし、その後どうするのかといった展望は定まっていなかった。自分が日本で培ってきた会計・監査に関する知識と経験、それと経済発展するインドの現場が重なれば何か将来が見えるだろうという程度の考えしか抱いていなかった。

初対面だったにも関わらず深いところまで進んだ土井さんとの会話は、ずいぶん後になっても耳に残っていた。後日再会した時にお聞きしたら、何となくそういう話をしてもいいような雰囲気を僕が持っていたとのことだ。

「うちは何百人ものインド人が働いているけど、インド人もいろいろいるよ。しっかりした奴、だめな奴。義理人情が判るインド人もいるので、あなたもそういう人を見つけなさい」

そう言って引き出しから一冊の本を取り出した。

「聞いてるかもしれないけど、これ僕が書いた本です。ネットでも買えるけどせっかくなので進呈します」

土井さんがマジックで背表紙にサインした本を僕は受け取った。インド各地の旅行話が中心だが、旅行者の視点でなくインドに生活する者の目線から書かれた本である。

「今度アーメダバードで日本人会を設立する予定です。その際にはご案内させて頂きます」周りに本の宣伝もしときますと言って、ありがたく本を受け取った。

アーメダバードに戻ってから、相模工業の相川さん、音無ベターライフの坪井社長と立て続けに訪問した。中村領事から会議の日程が決まったとの連絡が入ったからだ。８月２６日に安全対策連絡協議会を開催すること、そして日本人会の設立に向けた発起人を募ることを２人に伝えた。

発起人になって頂けないかとお願いすると、２人から快諾の返事を得たので安心した。

そして８月に入ってすぐ安全対策連絡協議会の案内を日本人在住者全てに送付した。公爵と僕の連絡先を合わせると４６名になった。おそらく僕たちが知らない人もまだいるだろうと考え、案内文には周囲の方々へのメール転送や声がけの依頼を織り込んだ。

細江さん、公爵、久本弁護士と相談して、連絡協議会の終了後に「たむら」で懇親会を開くことも決まった。

マスターにそのことを告げると、「席を押えとくので大丈夫」と快く承諾してくれた。みんなが一度にいろんなものを注文すると厨房が混乱するので、「ハンバーグ定食」、「豚しょうが焼定食」、「カツカレー」の３つの中から選んでもらうことにした。

もちろんのこと酒は出ない。

## 第６章　８月　安全対策連絡協議会

８月に入った。アーメダバードに来て半年が経ったことになる。これまで会社の業績にほとんど貢献できていないがこの先どうなっていくんだろう。モディ政権がもっと投資環境の改善を行い日本からの投資が促進されれば僕たちの仕事も増えていくのだが。今のところアーメダバードにはそういう兆候はない。

８月にお盆休みが取れるということで妻がアーメダバードに来ることになっていた。妻と顔を合わせるのは半年ぶりということになる。しかしＩＴの発達で現在は連絡を取り合うのも実に容易だ。メールがある。スカイプなら互いの顔を見ながら話もできる。メールは週に２、３回、スカイプは月に１回というのが我が家の頻度である。アメリカ暮らしの長いトシさんにそれを言うと、えっと驚かれた。トシさんは毎日奥さんとスカイプで話しているらしい。アメリカ人が言う「ハニー、アイラブユー」は、日本人が言う「元気にやっとるか？」と同じ意味だと僕は信じている。

その日いつもより早く仕事を終えた僕は、車に乗り空港に向かった。妻は夜１０時のシンガポール航空便でアーメダバードに到着する予定である。

アーメダバード空港は国際線と国内線にターミナルが２つに分かれている。普段の出張だと国内線のターミナルしか使わないので、久しぶりに国際線ターミナルに来てみると新鮮である。インド人家族も総出で出迎えに来ている。

税関を抜けた乗客が空港建物の外に次々と出てくる。人の流れの中で妻もあっけないほど簡単に建物から出てきた。

「待った？」と妻が言うので、

「全然」と答える。半年ぶりの会話と言う気があまりしない。妻が日本を経つ直前にスカイプで話をしたせいだろうか。それともまだ慣れていないのか。

スーツケースをトランクに押し込み車に乗り込む。僕はドライバーに家に向かってくれと告げた。

翌日からアーメダバード市内を案内して回った。駅から近い「ダダ・ハリ」の階段井戸や「ジャマー・マスジッド（金曜日のモスク）」にはスクーターに乗せて行った。結婚して

すぐは車を持っておらず、いつもスクーターで一緒に行動していたことを思い出した。旧市街でチャイを飲んだ後、今度は新市街にある「アルファワン・モール」に向かう。今回妻がインドに来たのは観光だけでなく、アーメダバードに住むことができるかどうかの判断も兼ねていた。アーメダバードで一番まともなショッピング・モールと言えばここだろうということで妻を連れてきた。

「アパレルや電化製品の店ばかりであんまり見るもんないね」と妻が言う。

正午近いにも関わらずモールは閑散としている。1階から順繰りにモールの中を歩いて回るが日本人の気を引く店はあまりない。アパレルと言ってもインドのファッションだしなあと思ってしまう。

地下に降りてスーパーマーケットを覗いてみた。シャンプーや石けん、調味料、インスタント食品のレーンを順に回っていく。

「この辺のクッキーはまあまあいけるけどな」と一つ取って妻に渡す。ベジのマークが付いているがクッキーは種類も豊富で、インド料理に胃が疲れている時などご飯替わりにすることもある。チョコレートも同じくベジなのだが、明らかにコクが無いというか味が薄い。そしてこの暑さで溶けてしまう。

生鮮食料品のコーナーに移る。

「牛乳とチーズはあるけど、玉子はないやろ」と乳製品の棚を指す。

どのスーパーにもノンベジの食料品は置かれていない。例外はチキン味のカップヌードルとレトルト食品のチキンカレーくらいである。肉、魚、ハム・ソーセージ、玉子は、冷凍肉を扱っている専門店でいつも買っていることを妻に話した。マンゴーは安くていいねと、いくつもの種類のマンゴーが盛られたワゴンを妻は覗き込んだ。

お腹が空いてきたのでモール内の北インド料理レストランに入る。タンドリチキン、シシカバブ、ジャガイモとカリフラワーのカレーを頼んだ。どれも代表的なものばかりだ。チーズが外にはみ出しそうなほどのチーズナンは妻がリクエストした。

「シシカバブとカレーは結構スパイスが効いとるね」と妻が言った。

「そうやろ。インドで食べるカレーはみんな味が尖っとるからな」と僕は説明した。味が尖っているからこそ正真正銘のインド料理を食べているという実感がある。日本のインド料理屋のカレーは味付けがマイルド。しかしそちらの方が日本人の口に合う。

「それにな、ラー油みたいなのが浮いとるやろ」と指差した。北インドのカレーはどろ

っとした表面に赤や黄色の油が浮かぶ。スパイスが溶けた油が表面に浮いてくるのだ。
「これな、お昼に食べると結構胃がもたれるねん。普段カレー弁当頼んどるって言うたやろ。夜までもたれてることも多いで」と僕は言った。
それを聞いて妻は「そら大変やな」と他人事のように言った。

モールからの帰りがけに、「Fab India（ファブ・インディア）」というちょっと小粋な店でマンゴージャムと紅茶のティーバッグをお土産に買った。この店はインド全土に展開していて品質もいい。駐在員が日本に帰る時にここでお土産を買うという話を「たむら」で聞いていた。
それから家の近くのアイスクリーム屋でマンゴー・ジェラートを食べた。妻にしてやれることといえばこれくらいしかない。こうして本日のアーメダバードのゴールデン・コースを終えた。

妻の滞在期間は1週間。しかし1週間も過ごすほど楽しめる場所はアーメダバードにはない。そこで3日間は隣州ラジャスタンのウダイプルに行って過ごすことにしていた。住んでいるアパートのオーナーの息子が、インド資本のホテルのマネジャーをしている。ウダイプルにあるグループ系列のヘリテージ・ホテルを割安で紹介してくれたので、そこに泊まることにしていた。
「ファティ・プラカシュ・パレス」という名のホテルは、ウダイプルの中心にあるピチョーラ湖を見下ろす「シティ・パレス（王宮）」の一角にある。シティ・パレスは今もマハラジャ（藩王）の子孫が居住していて、そのエリアに立ち入ることはできない。シティ・パレスの一角は歴代のマハラジャが蒐集したガラス工芸品を展示した博物館となり、残り大部分はヘリテージ・ホテルとして営業を行っている。
チェック・イン時に首から花輪を掛けられ並んで記念撮影をする。国内や国外にいろいろ旅行してきたが、いいところに泊まり馴れていない僕たち夫婦はこういう歓待に馴れていない。スイート・ルームなんて泊まったことあったっけなと思いながら、テーブルに置かれた盛りだくさんのウエルカム・フルーツを見やる。
バルコニーに出て曇り空に覆われたピチョーラ湖を見下ろす。
静かだ。
インドに来てこんな静けさを味わったことがあったかな。いつも見る騒々しいインド人

の大家族も館内でまったく見かけない。ホテルの外は間違いなくオート・リキシャやバイクが行き交う喧騒が広がっている。しばらくの間この貴重な静けさを噛みしめる。

その日僕たちはホテルの敷地から一歩も出ず、日が沈む頃、湖に面したレストランに降りて行った。「サンセット・テラス」という名のレストランからは日が沈む姿を見ることができるのだが、今は分厚く曇った雲が太陽を覆い隠している。それでも湖面を見下ろす席に陣取りビールを飲みながら景色を眺めていると、とてもゆっくりした気分になる。

シーザー・サラダを摘みながら妻に言う、

「運転手付きの車というのもまだ馴れんやろ」

ウダイプル旅行のため、聖地ギルナール山に旅行した時のように、公爵に頼んでドライバーと車をチャーターしてもらった。インドに住んでいるとドライバーに気を遣うということがなくなってくる。移動中に後部座席で靴を脱ごうが寝てようが気にならなくなる。クライアント先でドライバーを何時間も待たせておくのも普通になる。

日本では僕が運転し妻が助手席に座るだけで車内には他に誰もいない。今日は長時間見知らぬドライバーと同じ車内に居たため少し疲れを覚えたようだ。

「まあドライバーとかメイドとか徐々に馴れてくるけどね」と声を掛ける。もしアーメダバードで暮らすことになれば、ドライバーに行き先を指示して車を運転してもらわないと、どこに行くにも不自由することになる。

「まあヨガとかアーユルベーダとか、何かアーメダバードで楽しめるものがあったらいいんやけどな」

ヨガもアーユルベーダの教室も探せば間違いなくある。あとはそれらを楽しみ続けることができるかどうか。もともと興味がある人なら本場インドで嬉々として楽しめるんだろうけど。ここは日本人女性もほとんどいないし、友達を見つけるのもなかなか難しい。僕が仕事で日中家を留守にする間、妻が何かで楽しむことができれば、海外での生活に踏み出すことができるのだが。これまでアーメダバードで暮らしてきて、「これは楽しめるで」と自信を持って言えるものが残念だがほとんどないのだ。デパ地下のお総菜やスイーツに慣れ親しんだ世界から無理やりこの世界に妻を引っ張って来るのは可哀想な気がする。そう言うと、まあ、もうちょっと考えてみるわと妻は答えた。

「で、どうなん仕事の方は？」妻に問われる。

「アーメダバードにある日系企業はほぼ全部回った。インドの税制や会社設立について

も勉強してる。でもまだ仕事に結びつかんわ」と笑いながら答え、付け加えた。
「まあ自信もって言えるのは日本人会だけやな」
今月の終わりにムンバイから中村領事が来て安全対策連絡協議会を開く。その場で日本人会の発起人会を設立し、設立総会に向けて動いていく。発起人のメンバーや会長、副会長候補も決まっていて、確実に進んでいるのはこれだけやと言うと、
「もうインドまで来てしもたんやし、好きにしたらいいよ」と返ってきた。
「ほんま、すまんね」
「すまんついでやけど、来週末、公爵、モティとドバイに行ってもいい？」
「いいかって。もう行くの決まってるんやろう？」
「うん。もう3人とも飛行機のチケット取ってるねん。ドバイも一回見ときたいなと思って」
「もう、好きに行きなはれや」と妻は言った。
言葉通りで別に怒っているわけではないのだが、すまんねと再び僕は謝った。

妻が日本に帰った翌週、公爵とモティとドバイに飛んだ。アーメダバードからわずか3時間のフライト。南インドに飛ぶのとそれほど変わらない。
「でも『ぶらりグジャラート会』は2回目にしてもうグジャラートじゃなくなってるけど」公爵が突っ込む。
「仕方ないっすよ。行くとこないんだもん」満たされることのない5カ月のアーメダバード暮らしを送ってきたモティにとって、欲求を満たすことのできる近場といえばバンコクかドバイしかなかった。
アーメダバードからやって来た者にはドバイは眩しすぎた。
6車線もある高速道路を走り抜ける高級車、メトロから見える超高層ビル群、日本にあるものの3倍以上の広さを持つショッピング・モール。灼熱の気候以外にアーメダバードと共通するものはまったくない。外の暑さをよそに屋内人工スキー場では子供たちが雪遊びに興じている。かつて千葉県の船橋にも同じような施設があった。それを見てバブルの名残の中で過ごした学生時代の記憶が蘇ってきた。
すべてのモノが高い。喫茶店でコーヒーとチーズケーキを注文しただけで千5百円もする。でも、店に入り、注文し、店員の笑顔と共に運ばれてくると、日本と同じ先進国の匂いに安心する。先進国の空気に飢えている。もし日本から直接ドバイに来ていたらそれほ

どまでに感動はしなかっただろう。モールで働く従業員は中国人、フィリピン人、東欧系など多岐にわたる。建設現場では多くのインド人出稼ぎ労働者が働いている。町全体が巨大テーマパークのようなドバイにみな引き寄せられている。

モールのレストランでビールを飲みながらTボーン・ステーキを食べ、公爵やモティのショッピングにさんざん付き合った翌日、スーク（市場）にでも行ってみないかと2人に提案した。ドバイも人工的なところばかりじゃないだろう。テーマパークの外側というものがあるはずだと生活臭のする下町を覗いて見たかった。

メトロから出て下町エリアを歩き出す。こじんまりした商店が建ち並び路上で荷物を運ぶ人の姿が見られる。ゴールド・スークに入ると人もかなり増える。歩いているのは観光客ばかりではとすぐに疑う。すぐ傍で中国人の団体が煙草を吸いジュースを飲んでいる。

ちゃんとゴミ箱が置かれ、路上にゴミ一つ落ちていないスークに文句を言う。

「これやったら、大阪の商店街の方がもっとおもろいで」

「こんなもんですって。ドバイに汚いところなんかないですよ。小林さんはアーメダバードの旧市街の方が合ってますよ」とモティが言う。

そんなもんかなあと愚痴を言い合いながらスパイス・スークに向かった。こっちの方がもっとごちゃごちゃしているかなと期待していると、店から若い兄ちゃんが出てきた。

「トーキョー？オーサカ？兄さん、シャチョー見ていってよ」

その言葉を聞いた瞬間、こらあかんと僕たちは早足でスークの中を駆けて行った。

ドバイは夜も楽しい？らしい。クラブがあるということで夜の町に繰り出したのだが、時間が早すぎたせいかまだ開店していなかった。じゃあ晩ご飯でも食べますかと近くの食堂でケバブを食べたが、それでも開店までまだ随分時間がある。あきらめた僕は2人の買い物袋を手に提げて、メトロに乗って先にホテルに帰った。

翌朝目覚めて、リビングのソファで寝ているモティを起こす。昨夜別れ際、朝一緒にスーパーに買出しに行こうと約束していた。モティに声を掛けると「えっ、もう朝？」と心底驚いた様子で返ってきた。モティの頭の中では寝たと同時に朝が来たらしい。

昨夜はクラブで相当楽しんだみたいやなと言うと、

「あの辺のＡＴＭの設置場所には詳しくなりました」と嗤いながら返ってきた。

＊＊＊＊＊

公爵、モティとのドバイ旅行から戻った翌々日、ちょっとしたイベントが待っていた。グジャラート州を視察された在インド日本大使館の山平大使が、デリーに戻られる直前に空港近くでアーメダバード在住者と面談したいとのことだった。

前の日、公爵から緊迫した感じの電話を受けた。

「日本人会の発起人予定者には声がけしてるんですけどね」

ドバイから戻ってきたばかりということもあり、その週僕はこれと言った用事を入れていなかった。「僕は全然問題ないですよ」と即答したが、発起人全員を集めるのは難しいと思ったので、可能な人だけ集まればいいんじゃないですかと答えた。

夕方手配した車に乗り、旧市街を抜けて空港近くの「タージ・ゲートウェイ・ホテル」に向かう。僕は利用したことがないのだが、空港に最も近いホテルなのでフライトの前後に利用するという需要もあるらしい。

ホテルにはすでに安福さんと公爵のジェトロ組と、細江さん、相川さんが集まっていた。会議室の大きなテーブルにはクッキーが皿の上に綺麗に盛られてある。会議室で近況を話し込んでいると、大使とお付の書記官が姿を現した。大使は銀髪にすらっとした姿で物腰が柔らかそうだった。

「今日はわざわざみなさまにお越し頂いてすいませんね」との言葉を合図にみな席に着いた。

大使はアーメダバードから3百キロ西に行ったムンドラ港の視察をなされたらしい。ムンドラはモディ首相と近い関係にあるアダニ財閥が作った港で、グジャラート州のインフラ整備の代名詞みたいなものだ。水深が深い良港で近年貨物取扱高がインド一位となった。マルチ・スズキはムンドラ港から中東・アフリカに自動車を輸出している。

安福さんからアーメダバードの工業団地の近況について説明が行われた。特にマンダル工業団地はジェトロが肝いりで進めている事業なので自然と話が熱くなる。アーメダバード近郊のサナンド工業団地と比べて土地価格が6割程度と魅力的であること。近隣ではホンダが２０１５年に、マルチ・スズキが２０１７年にそれぞれ大規模な工場を稼働させようとしている。これに合わせいくつかの日系部品サプライヤーがマンダル工業団地で工場

の建設を始めていることなどが話された。
「モディ首相のおかげでグジャラート州は企業投資に前向きですよね。工場建設の際の環境審査などいくらでも難癖をつけることができるのですが、グジャラート州は割とリーズナブルな対応をされますよ」
「それに電気も豊富ですし。州が必要需要量の１２０％を確保している上に住民がちゃんと電気代を払うので電気事業も健全に動いているのです」
安福さんは立て板に水のように説明をしていく。そう言えばアーメダバードで停電を経験したことはほとんど記憶にない。

「皆さんアーメダバードの暮らしはどうですか？」
安福さんの説明が一段落したところで大使から質問があった。
「まあ治安は悪くないですし、住んでみればそれほど悪くないところです」細江さんが口火を切った。
「他の人はともかく私はそう思っています。お酒と食事については多少問題がありますが、これも上手くやればなんとかなります」と言って嗤った。
「ここはガンジーさんの生誕地ということで禁酒なんですよね」と大使も嗤った。
「リカー・パーミットを取らないといけないという制約があります。外でお酒は飲めないので、自然と誰かの家に集まって飲むことになります」と細江さんが話した。
「そのぶん人間関係の密度は高まりますよ。お互い助け合うという意味でも日本人会を設立しようと考えているところです。小林さん、安全対策連絡協議会は来週でしたよね？」
そう言って細江さんがこちらを向いた。
「そうです。ムンバイ総領事館から中村領事が安全対策関係でお見えになるので、その時に発起人会を発足しようということになっているのです」と僕は言った。
「今日集まっているメンバーが発起人となる予定です」公爵も付け加えた。
「そうですか。それはいいことですね」大使は一同を見渡して微笑んだ。

すると安福さんが、
「せっかくですから、日本人会の設立総会には大使にお越し頂いたらどうですか？」と皆に向かって言った。
「大使、次はアーメダバードにいつ来られますか？」安福さんは続けた。

大使が横を見やり、お付の書記官が答えた。
「１１月半ばにバドーダラで日系企業の開所式に出席する予定です」
「あっそれはいい。じゃあ１１月に設立総会をやりましょう。開所式の前後どちらかに総会の開催時間を設定して」安福さんは嬉しそうにそう締めくくった。大使も笑顔のままでまったく異論は無いようだった。

これまで行ってきた打ち合わせでは、８月終わりの安全対策連絡協議会のあと、熱気が冷めないうちに設立総会を開こうという流れになっていたが、安福さんの一言であっさり設立総会の日取りが決まってしまった。
発起人会の発足から設立総会まで２カ月以上空くので間延びするような感じもしたが、やはり大使に出席して頂けるということはみんなにとっても喜ばしいことだろうと思った。アーメダバード日本人会の設立総会は記念に残るイベントになると確信した。

１時間ほどの会議を終えて、「アーメダバードに住まれている方々とこうしてお話できて良かったです」と大使は言って席を立った。空港に向かう大使を僕たちはホテルの玄関から見送った。会議室に戻った僕たちは談笑しながらさきほどの余韻の中にいた。
「しかし総会の日が急に決まってびっくりしましたよ」クッキーを頬張りながら相川さんが言った。
「まあ何でも言ってみるもんですね」安福さんはそう言って笑っていた。

山平大使との面談からちょうど１週間後、安全対策連絡協議会の開催日がやってきた。これまで４６名に案内を流して１８名から出席の返事を得ていた。平日の忙しい時に開催するにしては集まった方かなと思った。
開始１時間前に東洋商事に到着する。
「常盤さん、今日はありがとうね。水も用意してくれて助かります」そう言って椅子を並べるのを手伝った。
「１８人だったのでよかったです。この人数ならじゅうぶん座れますよ」トキボーはそう返した。
せっかくなので、出席者が互いに顔を見えるよう一つの大きな円の形に椅子を配置した。
しばらくするとぼつぼつ出席者がやって来る。

音無ベターライフの坪井社長が駐在員を2名連れてやって来た。続いて音無エレクトロニクスからは細江さんの他に4名。相模工業の相川さんも会社の部下を連れてきている。阪神建設の黒岩さん。別の建設会社からは2名。伝説となった飲み会でブッ倒れた滝丸君はアーメダバードで活動している写真家の九鬼君を連れてきた。

「ザッキーも来ましたよ」とモティが公爵に知らせる。

「ランちゃんも一緒か。ほんと嫁やな」と言って公爵は茶化す。

ザッキーは最近アーメダバードに赴任してきた会計士。ランちゃんは同じ事務所で働く学生インターン。いつも一緒に行動する姿に公爵やモティは羨んでいる。変化の乏しいアーメダバードではちょっとしたことが話のネタになる。誰か面白いキャラクターの奴は来ないかなと探している。ザッキーとランちゃんの動静など、娯楽の少ないアーメダバードでは格好のネタになってしまう。

今回の会議で初めて見る顔ぶれもある。車で2時間もかかるアナンドの町から来て頂いた方には丁重に挨拶した。

出席者が揃ったところで会議を始めるアナウンスを行った。

「本日はお忙しい中、お集まり頂きありがとうございます。今日はムンバイ総領事館の中村領事を囲みまして、アーメダバードの安全対策や治安情勢に関する意見交換ができればと考えております」

と言い、かねてから考えていたことだが、

「今回初めてお会いする方もおられると思いますので、一人ずつ自己紹介をしていきたいと思います」と言った。

まず僕から自己紹介をし、左隣に座った公爵が次に立ち、時計回りの順に自己紹介をしていく。相川さん、江本さん、黒岩さん、モティ……。最後のトシさんが終わったところで中村領事にバトンタッチした。

「今日はありがとうございます」

領事はそう言って、近隣州で起きている犯罪状況について話し始めた。

「最近ムンバイからアーメダバードに夜行列車で向かっていた日本人旅行者が財布などの持ち物を盗られる事件が発生しました。乗り合わせたインド人からもらったカップ麺を食べて意識が昏倒したようです……」

アーメダバードで暮らしていると、知り合いの家で夜遅くまで飲んだあと、家に帰るま

で危険な目に遭ったことがない。夜道はいたって安全で、オート・リキシャで少しボラれるくらいである。僕たちはこんな状況に慣れてしまって、危険に対する意識が薄れてきているのかもしれない。

交通事故の場合はかなり注意が必要だと感じた。領事の話を聞いていると、交通事故が起きた場合それも加害者になった場合は、取り囲んでいる群集を刺激しないことが大事だと判った。被害者が怪我を負った場合はもちろん応急処置をしなければいけないが、基本はドライバーに任せて車から出ないことである。道を走っていると車とバイクのぶつかり合いをしょっちゅう見かけるので、被害者あるいは加害者どちらになる可能性も十分にある。

住宅関係では、火災時に逃げられるよう避難経路の確保や防火グッズの用意が大事だ。コンセント付近に溜まったゴミに電気がスパークして火事になる場合もある。インドのコンセントはグラグラのものが多く信頼性が著しく劣るので、アパートのどこかの部屋でいつ火事が起きてもおかしくないと思った。

話はいつの間にやら、ハトやサルが家に侵入してくるだの、蚊よけはどうするだのと移っていった。蚊に刺されてデング熱にかかると1週間くらい寝込んでしまうという話も興味深かったが、かなりの時間が過ぎていたので終了という雰囲気になった。

そこで「中村領事ありがとうございました」と言って、連絡協議会の終了をアナウンスした。

それから少し間をおいて再び話し始めた。

「今日ここに18名のアーメダバード在住者が集まっております。今日の案内は46名の方々にお送りさせて頂きました」

それだけの数がいたのかという顔つきの人もいる。続けた。

「これまで水曜日に『たむら』に集まったり、在住者同士の私的な集まりが行われてきました。在住者同士が集まる中で一つのカタチ、組織を作る機運が高まってきたように思います。アーメダバードに日本人会を設立してはどうかと考えています」

皆の顔を見ていく。大半の人には日本人会の話をしているので特に驚くような表情の人は見当たらない。

「そこで日本人会設立に向けて発起人を募りたいと思います。みなさまの中で発起人に手を挙げて頂ける方はおられますでしょうか?」最も緊張するセリフを一気に言った。

少し間を置いたが、案の定出席者からは質問も挙手も無かった。確かにこの場で何かを発言するのは多少勇気がいる。

「それでは私の方で発起人の候補となる方々をご指名させて頂きます」

「音無エレクトロニクスの細江さん、相模工業の相川さん、ジェトロの南さん、音無ベターライフの坪井さん、弁護士の久本さん、それに私の6名が発起人となり、日本人会の設立に向けて動いていきたいと思いますがいかがでしょうか？」

そう言った後の時間はとても長かった。時間にして数秒も無いが、出席者から拍手が挙がった時はこれで形になるという安堵感で一杯になった。

日々の仕事に追われる人たちにとって、日本人会などあっても無くてもいい存在なのかもしれない。会などなくても集まりたければ私的に集まれるのだし。

また日本人会のことを今日初めて聞いた人もいるだろう。そして日本人会を作ることにすべての人が手放しで賛成しているわけでもないだろう。

「日本人会があることが住んでいる人にプラスになる」というのは僕の妄想にしか過ぎないのかもしれない。

「僕たちが動かなければ日本人会はできあがらない」というのは単なる思い上がりなのかもしれない。

しかし僕自身はこの集まりを形あるものにしたいと強く思っている。半年間生活して思うのはここが一つの拠りどころということなのだ。水曜日の「たむら」での集まり、そしてたまの飲み会。別に何かを得ようとして参加するのではなく、ただ自分をゆっくり解放できるところ。それを永続させていくには、人が替わっても動いていく仕組みがやはり必要なのだ。

それをするのは今でなく1年先あるいは2年先でもいいのかもしれない。僕たちでなく別の人がする方がもっと相応しいのかもしれない。

でも、僕たちがそれぞれの事情でアーメダバードにやって来て、そんな中に日本人会を作ってみようという思いを持った者がいて、それに賛同する者がいて、そして形になりつ

つあって。これはたまたまの、偶然の産物の、そして何かの縁のそういったものの結果なんだと思う。

期待する人や応援する人たちがいる以上、それに応えていくのがこれからやっていくべき事なんだと思う。

たむらに場所を替えた集まりは一層の賑わいを見せていた。たむらのテーブルが一つ残らず埋まり、おそらく開店以来最高の客の入りじゃないかと思うくらいだ。

メニューを3種類に絞ったせいで、料理が運ばれてくるのが普段に比べとても速い。酒も飲まずワイワイ盛り上がる様は不思議ではある。これだけいろいろ話すことがあるというのは、それだけため込んでいるものもあるということだ。仕事の愚痴や生活のトラブルその他ささいなこと。人に話してストレスを解消するもよし、人の話に耳を傾けるもよし。誰が場を支配するのでもなく、自分がしたいように振る舞う、何者にも縛られることのないこの空気。これがアーメダバードの良さでありずっと続いて欲しいと思う大切な何かなのだ。

## 第７章　９月　砂漠の月夜

モティから「第３回ぶらりグジャラート会」をやりませんか？と連絡があったのは、少し暑さが戻りかけた９月終わりのことだった。理由は判らないが９月は一時暑さが戻り、それから気温がどんどん下がっていく。ピークとなる１２月下旬は日中の気温は２０度、朝の最低気温は１０度となる。冬という表現がはたして適切かどうか判らないが、アーメダバードの冬は空もくっきり澄みわたり最も過ごしやすい時期となる。

行き先はジョドプルとジャイサルメールに決まった。ジョドプルは隣州ラジャスタンの中央部に位置し、アーメダバードからの距離は４５０キロ。別名「ブルーシティ」と言われ、丘の上から町を見下ろすと水色に塗られた建物の壁や屋根で町が青に染まる。

ジャイサルメールはジョドプルから西に３百キロ。パキスタンとの国境までは１百キロほどしかない。別名「ゴールデンシティ」と言われるが、これは建物が砂岩で造られていることに由来する。モティからは最初ジョドプルに行きたいとの話があったのだが、僕の希望でジャイサルメールも加えてもらった。ジャイサルメールでラクダに乗り、満天の星空のもと、砂漠で一夜を明かしてみたかった。

「もはや完全に『グジャラート』じゃなくなってるじゃない」との公爵の言葉に、そうだよなと納得しつつ、

「でも、冷えたビールが飲めますよ」とのモティの言葉にみな納得した。

目的地まで相当距離があるので朝６時に出発する。町はまだ薄暗くＳＧハイウェイを走る車はかなり少ない。

「ドライバー、ジュナーガルの時と同じじゃない？」

聖地ギルナール山に登ったジュナーガル旅行の時と同じように、業者に車とドライバーをチャーターしていた。車はトヨタ・イノーバ。３列シートのミニバンなので道中ゆっくりできる。確かにドライバーは前回と同じだ。濃い顔がよくテレビに出ている気象予報士に似ているので、さっそく彼を「ヨシズミ」と名付けた。

ＳＧハイウェイは国道１４号線と名前を変えメサーナの町を通過する。そして２時間半でパランプールの町に到着した。ラジャスタンとの州境まであと５０キロ。パランプールを過ぎるとしばらく大きな町は現れない。

寝ている２人を起こし、訊ねる。

「ちょっと休憩します？」

反応が薄いので、国道沿いのホテルの中から比較的小ぎれいなところを選んで車を着ける。看板にはホテルと掲げられていても実態はレストランに近い。ドライブ・インという表現の方がより適切か。宿泊することもできなくないが、食事休憩をするのがメインの場所である。外で休憩する時はできるだけ綺麗な、つまり新しいところを選んだ方がいい。トイレ休憩も兼ねているので、古い建物になるほど用を足す際の難易度が上がっていくからである。

僕たちは店内に入ってチャイとマサラ・ドーサを注文する。ドーサというのは南インドの料理で、擂った豆と小麦粉を混ぜたものを薄く伸ばして焼いたクレープ状のものに、マサラ（混合スパイス）で味付けしたジャガイモや豆を包んだ軽食スナックである。インドはどの町に行っても「パンジャブ」と「サウス・インディアン」の看板を見かける。パンジャブとは北インドのパンジャブ地方のことであり、どろっとし油を多用した北インド料理を意味する。ここらでサウス・インディアンと書かれていると、ドーサやイドリ（米と豆を摺り潰したものを発酵させた蒸しパン）といった軽食が中心になる。チャイはどこに行っても飲める。

「何でチャイが４杯もあるんですか？」モティが訊く。

「２杯は俺のぶん。最近は１杯じゃ足んないので、最初から２杯注文するのよ」

と言って、ソーサーにこぼれそうなくらい並々と注がれたカップの一つを取り、口に運んだ。熱いのが苦手なインド人はカップの中身をソーサーに移して冷ましながら飲んでいる。

旅行に行くと目的地自体も楽しいのだが、僕はこういったドライブ・インでの休憩もすごく好きだ。気のおけない仲間とくだらないことをダラダラ話していると、いろんな緊張が弛緩されていく気がする。一人で旅行すると楽しさよりもちゃんと目的地に着くのかという不安の方が勝ってしまう。このメンバーだと上手く行かなければ行かないでそれなりに楽しいという思いになる。旅行はどこに行くかも大事だが、誰と行くかもまた大事だと思う。

ラジャスタン州に入って、避暑地で有名なマウント・アブーを抜け、国道１４号線をジョドプルまでひた走る。途中１回休憩を挟んで２時過ぎにジョドプルに到着した。ヨシズミは何度も車を停めて商店主やオート・リキシャの運転手に道を訊きながら目的地に近づ

いていく。対向車がすれ違えないほど道幅が狭くなった旧市街を抜け、ようやく宿泊予定のホテルに車を乗り入れる。「クリシュナ・プラカシュ・ヘリテージ・ホテル」という長たらしい名前のホテルは、ヘリテージの名の通り１９０２年に建てられ、４階建の白亜の壁が中庭を取り囲んでいる。通路は全て中庭に面し赤茶色に統一された手すりやひさしが「貴婦人」といった印象を与える。ホテルの廊下から真正面を見ると丘の頂上に絶壁がそそり立っている。「メヘランガル城」である。３０メートルの城壁はまさに難攻不落。この城を攻め落とそうと試みても、城壁にたどり着くまでに相当の犠牲が払われるだろう。

荷物を部屋に入れホテルで軽く食事を済ませたあと、ホテル裏手から坂道を登っていく。すべての建物がそうという訳ではないが、壁から屋根まで水色にペイントされた建物をかなり見かける。一説によると水色は蚊よけの効果があるということだ。

ふうふう言いながら１５分ほど坂道を登って行くと、メヘランガル城の正面入口にある駐車場に出てきた。入場チケットを買い城内に入っていく。

城内もまたウネウネと坂道が続く。高い城壁が折れ曲がり容易には奥へ侵入できない構造になっている。見上げると両側の壁に囲まれて狭くなった空がとても青い。坂を登りきった頂上は平らになっていて、城主が起居していた館は博物館として公開されている。金メッキのフレームが施されたガラス張りの御輿にはマハラジャ（藩王）が乗るのだろうか。

モティが「あった！」とさっそく叫んで興奮している。

そこには胴長のダックス・フントを思わせる砲身が展示してあった。砲身から４本足が生えている。説明文を見ると１８世紀に制作されたブロンズ製キャノン砲で、「マカラ」という海に生息する神話上の生き物をモチーフにしたとある。顔の部分はアリゲーターというワニで胴体は野生のイノシシとのことだが、弾が飛び出すところは犬の口にしか見えない。

「これ何ですの？」とモティに訊くと、漫画「ワンピース」に登場するキャラクターのモデルだとのことだった。後で行く予定の旧市街の時計台も漫画に登場するらしい。

城内はきらびやかな装飾に満ちていた。藩王と王妃が日中長い時間を過ごしたであろう広間は、ステンドグラスからの光が射しこみ黄金色の柱をさらに際立たせている。ステンドグラスは西洋の教会を想像させるが、椅子ではなく床に座る様子を見るとやはりアジアだと思う。現代の方が庶民でさえ物質的にもっと豊かな暮らしをしているのだろうが、召使いに風を扇がせゆったりとした時間が流れていたこの空間はさぞ贅沢なものだったのだ

ろう。

城館から外に出て城壁の上から市街地を見下ろす。市街にある建物のうち、水色に塗られている建物の方がそれ以外の色よりも少ないのだけれど、町のあちこちに鮮やかな水色があることで「ブルーシティ」と納得する。何となくアジサイの花が想像される。

台車に載せられた大砲が城壁の外を向いている。さっき見たブロンズ製のものとは違い、こちらは砲身2メートル以上ある実戦用のものだ。ラジャスタンという地名の由来は「ラージプート族の土地」という意味で、かつて築かれ使用されてきた城や砦が今や観光資源となっている。これらの大砲も火を噴くことがあったのかもしれない。

下を見下ろしていると、時計台らしきものが広場の中に建っているのを発見する。カメラを望遠にして写してみると、時計台周辺は市場になっていて人でごった返している。

「やっぱり似てる」漫画に登場したモデルに間違いないとモティが自信を持って言う。

時計台の一番上は玉ねぎ型の丸いドームになっている。ドームがなければヨーロッパにあってもおかしくない佇まいだ。6層になった時計台は今も昔も町のシンボルとして人々の生活の中に入り込んでいる。

僕たちはメヘランガル城を出て、日が暮れる前に時計台を見に行った。時計台のある広場はサルダール市場という場所で庶民で賑わっていた。市場の入口にある店に入りラッシーを頼む。名物の「マカニア・ラッシー」はシュークリームの中身のような薄黄色をしていた。マカニアとはサフランのことである。どろりとした液体は甘酸っぱい。僕が飲み終わっても2人がほとんど手をつけていないのでどうしたのかと訊くと、揃って「ラッシーよりもビールが飲みたい」との返事が戻ってきた。仕方ない。時計台近くの屋上レストランに移動する。メヘランガル城を見上げながら、アーメダバードでは決してできない、外で好きなだけビールを飲むということに3人とも溺れて、その夜は更けていった。

翌日ジョドプルからジャイサルメールへ移動した。ジャイサルメールまで来ると景色はさらに辺境といった趣を見せる。岩と土ばかりの大地が限りなく広がっている。人気の無いところに何十もの風力発電装置が墓標のように突っ立っている。荒野に吹く風を受けて巨大な三枚羽根がびゅうびゅう回っている。道路に並行して走る送電線だけが人間の営みの痕跡を感じさせる。

「ほんと、何も無いっすね」モティがつぶやく。

そうなのだ。インドの中ではアーメダバードもどちらかというと乾燥して豊かな緑とは縁遠い土地である。それでも町から近いところは田畑が広がり、町から遠くなるにつれ牛や羊を放牧する草地が広がる。ところがラジャスタンの奥地まで入っていくと、草すら生えていない完全な荒野が出現する。岩と土しかない世界。緑がまったく見当たらない。インドの中でもアーメダバードは厳しい土地柄だと思うが、もっと厳しい世界がここにある。

「風力発電くらいしか産業がないのかもね。あと軍関係」

公爵が言うように、パキスタンとの国境が近いためジャイサルメールは軍の一大駐屯地となっている。

モティが言う。「ここだったら、いくらでも土地があるじゃないですか。ジェトロの次の日系工業団地はここに決まりですね」

土地の取得が困難なインドでは工業団地を造るのは大変なこと。農業も牧畜もできない土地なら安く簡単に買えるかもしれない。

「で、モティもここに駐在するん?よっ、ジャイサルメール支店長!」

公爵がお返しの言葉を浴びせる。

ジャイサルメールは人口8万人の小さな町である。かつてはラクダのキャラバン・サライ（貿易商隊）が中東に向かう交易中継地として賑わいをみせたが、パキスタンとの国境が閉じている現在は主要な産業といっても特にない。町の中心に立つジャイサルメール砦と、郊外に広がる砂漠のキャメル・サファリといった観光資源が町の経済を支えている。

町に入って行くとヨシズミはオート・リキシャの運転手たちに場所を訊ねながら「ホテル・トーキョー・パレス」にたどり着いた。

「トーキョーってかなり怪しいけどな」公爵が首を傾げる。

訊けばオーナーが昔東京に住んでいたことがあるということらしい。ホームページも日本語で書かれているし、ガイドブックにも載っていて日本人もよく泊まる宿のようだ。

「まあ日本人が泊まっている宿だから、無茶なボリ方はしませんて」と公爵を安心させる。

ジャイサルメールの宿はどこもキャメル・サファリを斡旋している。中には宿泊代は安かったものの、宿から斡旋されたキャメル・サファリでボラれたという話もあるらしいので気は抜けない。

キャメル・サファリは、軽くラクダに乗って砂漠に沈む太陽を見て帰るくらいのものか

ら、現地の村々を訪ねたり、キャンプ・ファイヤーをして伝統舞踊を見たりするものまでいろいろある。長時間ラクダに乗るのも苦痛だと聞いていたので、僕たちは午後出発して翌日午前中に宿に戻ってくるプランを選んだ。両日とも1時間ほどラクダに乗ることになっている。料金は一人2千ルピーと良心的な値段である。

宿の車に乗り込み町から４０キロ離れた郊外のサム砂漠へと向かう。小一時間車に揺られ、道路から少し脇に入って行くと、そこはちょっとしたラクダ溜まりになっていた。

車から降りた僕たちを足を折った状態で待機している１０数頭のラクダが一斉に振り向く。白いクルタを来た男どもがラクダに荷を結わい付けている。ラクダの背には毛布のような敷物が掛けられ、瘤の前に座布団らしきものが乗っけられている。

「どうやらあれに乗るらしいですね」と言うと、

「マジですか」と、諦めとも取れる様子で2人が口を揃える。

ここから先はラクダ使いの男どもに委ねられる。僕たちが払うサファリ代金のいくらかが彼らの収入になっているのだろう。宿の車は僕たちの荷物を置いて帰っていく。明日の迎えまでラクダ使いの男どもに任せるしかない。

ラクダ使いは公爵、モティ、僕の順にラクダに乗せていく。乗る前にどのラクダにしようか選んでいるようなので、体格とか相性を見て決めているのかもしれない。

ラクダに乗り込むのはすごく厄介である。ジャイサルメールのラクダはひと瘤なので瘤の前に乗る形になる。それだけだと前にずり落ちてしまうので、鞍のようなものが付いている。ところがしっかりした取っ手のようなものはなく、鞍から１０センチほどの一本の軸が飛び出ているだけである。ラクダに乗っている間はずっとどちらかの手でこの軸を握っていないとバランスを崩してラクダから落ちる。

まずはラクダの背を跨いで脚を向こう側に出さなければならないのだが、脚がなかなか上がらないので勢いをつける。ラクダに跨ったと同時に軸を握りしめる。足はすでに地面から３０センチほど浮いた高さになっている。

ラクダが立つ瞬間がまた怖い。ラクダはいったん前につんのめった形で足を出し、それから足をまっすぐ伸ばす位置に戻る。乗っている者としては、２本の手で軸を握りしめて前傾する体を何とか抑え、それから後ろに戻ろうとする力をまた軸で支えることになる。

「マジ怖いっすね」モティが言う。

それもそのはず、ラクダに乗ったモティを見ると、ぶらんと垂れた足の先から地面まで

1・5メートルはある。目の位置から地面までの高さは3メートル近くになっているはずである。乗馬のように足を乗せる場所がないため、鞍に付いた軸をしっかり握っていないと落ちて大けがをしそうだ。

ラクダ使いが一本のロープで公爵、モティ、僕の順にラクダを繋いでいく。ラクダ使いは先頭の公爵のラクダから垂れるロープを引っ張って歩きながら先導しはじめる。

歩き始めてしまうと特に問題はない。下り坂の時だけ前のめりになって落ちないよう緊張する。のっしのっしというリズムで歩くラクダの背から眺める景色は心地よい。最初は荒れ地だったが、途中から砂地に変わり、そして風景も砂丘へと変化していく。

唯一モティの乗ったラクダがやんちゃで、距離を詰めて公爵の乗る先頭のラクダに並ぼうとする。公爵が蹴りを入れようとすると、ラクダがくしゃみを公爵の足に浴びせる。

「モティのラクダがズボンにくしゃみしやがったよ」

「自業自得です」とモティが嗤う。

途中石壁で仕切られた天幕が近くに見えたので「今夜の宿はあれかな」と話していたが、あっさり通り過ぎてしまった。何度か丘を登り降りし1時間ほどで小高い砂丘に囲まれた窪地のようなところに到着した。灌木の脇に何か黒いビニール・カバーのようなもので覆われたものがある。「チャイ休憩でもするんじゃない？」先頭を行く公爵の言葉にそうかと納得し、僕たちはここでラクダを降りた。

ラクダ使いの男どもは、ラクダを一か所に待機させ括りつけた荷物を解いていく。またある者は茂みから鉄製の四本足の台を3つ出してきて並べはじめる。

「あれれ？今夜の宿はあれですか？」モティが皮肉る。

「あの台、アーメダバードの路上生活者が寝てるやつと同じでしょ」公爵が落ち込んだ素振りを見せる。

「まあ、寝ながら星が見えるんだし、いいんじゃないの。なかなかこんな経験できませんって」と慰める。僕としては天幕の中のベッドよりこっちの方が野趣に富んでいていい。

日没までのわずかな時間、僕たちは砂丘の奥まで歩いて行った。ここまでやってくるとさすがに人の踏み跡はまったくなく、なだらかな砂丘の斜面に風紋が綺麗な襞を残している。いくつかの砂丘のうねりの奥にいま落ちようとする太陽が見える。やがて太陽の下半分が砂丘に消え、そしてすべてがゆっくりと消えていった。

僕たちが日が沈むのを見ている間もラクダ使いの男どもは料理の準備をしていた。どこかから拾ってきた灌木に火をつけ、砂地に置かれた石の上に鍋をセットして料理していく。油で揚げたスナック、野菜のカレーに炊いた米という簡単な夕食だが仕方ない。

「ビールさえあれば問題なし。そんなに冷えてないけど」

公爵は食事前に1本飲んだばかりなのに、もう2本目のビールを頼んでいる。そういえばラクダの一頭にクーラー・ボックスが括り付けられていた。こんな砂漠でビールが飲めるということ自体とてつもなく贅沢なことなのかもしれない。

「ずいぶん遠くまで来たね。このままパキスタンに拉致されても判らんで」のんびりビールを飲んでいる2人を脅す。そして2人に訊ねる。

「聖地ギルナール山に行って、ドバイに行って、ジャイサルメールに来て、次はどこ?」

「うーん。国内だったらゴアとかですかね?」僕の問いにモティが答える。

「海外だったらヨーロッパもありだな。ドイツとか、オーストリアとか」と公爵が言う。

「俺、完全に嫁はんに怒られるわ」

ヨーロッパ旅行なんか言い出したら、私はどうなるの?と言われるのがイヤでも目に浮かぶ。

『ぶらりグジャラート会』の名前も変えないと。もはやグジャラートと無縁になってますし」

モティの言葉に一同頷きながら完全に暗くなる前に食事を済ませる。僕たちと一緒にやってきたラクダ使いたちは食器や鍋を砂で拭いて片づけていく。それが終わると彼らは砂地に布を敷いて眠りにつくのだった。

辺りが漆黒に包まれようとする中、僕たちは最後のビールを片手に簡易ベッドに腰掛ける。

「それはそうと、11月15日の土曜日は空けとってや」モティに言う。

「おっ、いよいよ日本人会発足ですか?」

「そろそろ日本人会の会員募集と設立総会の案内を流そうと思って」

この旅行から帰ったらいよいよ準備が始まる。

モティが言う。

「これからどうなっていくんでしょうね」

「まあ、1、2年はこのままなんじゃない?スズキが来たら一気に人も増えるだろうけ

どね」公爵がそう推測する。
「たぶん、1百人、2百人くらいはすぐいくんでしょうね」
僕も相槌を打つ。
「凄いすね」モティが言う。
「判らんけど、僕らその時にはもうおらんかもしれんしね。モティさん、あとはよろしく頼むよ」公爵が冗談を言う。
冗談だか本当なのか判らないが、持木さんは最低7年はアーメダバードに駐在することが会社の会議で話されているらしい。
「じゃあ、いにしえのアーメダバードを知る長老として君臨してよ」僕もモティにエールを送る。
モティのぷっくりした体が大きく揺れる。
「お堅いのはイヤですけどね」
そして続ける。
「やっぱり、アーメダバードは自由なところがいいんですよ」
言葉が夜の砂漠に沁みていく。日本人会も何百人とかの大所帯になったら、今とは全然違う空気になるのは間違いない。５０人くらいだからお互い顔見知りの距離でやっていけるんだろう。そんな時のアーメダバードに居ることができるのはある意味幸せかもしれないなと思う。いろいろ生活上の不便はあるけれど。
そんなことを考えながら空を見ると、月がぽっかりと頭上に浮かんでいた。砂漠の中で満天の星空を期待していたが、月明かりのせいで星はそれほど見えなかった。
いつの間にかみんな寝入り、夜がもう明けようかとする頃ふと目を覚ますと、月が沈み空に無数の星がくっきり描かれていた。寝起きのぼおっとした頭で「ほら、砂漠で満天の星だぞ」と言い聞かせるが眠気には勝てず、ブランケットで体を包みながら再び眠りに落ちていった。

ジョドプルとジャイサルメールの旅行から戻ると、商工会議所勤務時代に上司だった白瀬さんからメールが届いていた。日本人会の発足にあたり、会則や設立総会のシナリオなど参考になるものをお願いしていたのだ。
「マー君の後援会発足の時の資料送っといたからな。インド大変やろうけどしっかり頑張りや」

僕が以前勤務していた商工会議所は、現在ヤンキースで活躍している田中将大投手の地元出身地にある。田中投手が楽天イーグルスに入団が決まった年、地元で後援会を作る話が持ち上がり、商工会議所が中心となって音頭を取ることになった。白瀬さんが担当し、僕は白瀬さんの下で働いていた。

マー君の後援会か、懐かしいな。商工会議所を辞める直前だったな。

商工会議所に勤務している間に公認会計士試験に合格し、監査法人に転職した。商工会議所を辞めてもう7年近いが、白瀬さんとは年に何度か会う仲でインドに来る直前にも会った。インドに進出している日系企業のためになることがしたいと言う僕を白瀬さんは温かく送り出してくれた。

その白瀬さんが、こうしてまた協力してくれる。

後援会の会則や設立総会のシナリオを参考にしながら、アーメダバード日本人会を成功させたいと思った。インド各地にある日本人会の会則も見比べながら、アーメダバードらしい会の形は何なのか自問した。そして、皆で討議するための会則のドラフト作りに取りかかった。

## 第８章　１０月　会則案検討

もう通い慣れたジェトロの会議室に入り、先に到着していた細江さんと弁護士の久本さんに挨拶する。じきに公爵も会議室に姿を見せる。日本人会の会則案について協議するためだ。会則とはいわば憲法みたいなもの。日本人会を運営していく上で骨格となるルールである。会則を作るにあたり僕たちは次の３つの方針を反映させることを考えていた。

一つ目は「会員のベネフィット」である。

アーメダバード日本人会の会員は入会して良かったと感じてほしい。その最大のものが「自由な空気」である。入会も退会も自由。入会しても行事への参加はまったくの自由である。変な上下関係なんかもまったく要らない。「いつでも好きな時に入ってきて、いつでも好きな時に出て行ける」そういうフワフワしたものが続いていってほしい。

２つ目は「一定の規律」である。

この集まりがまったく任意のものなら、会則も要らないしその都度好きなようにやっていけばいい。でも日本人会は単なるサークルのような集まりとは違う。会としてちゃんとした形を取り将来も継続していくようにするためには、ルールを定め、ルールに従った運営が必要になる。まだ会員数が少ない今はルールをできるだけシンプルにし、将来人数が増えてきたらそれに相応しいように変更していったらいい。

３つ目は「他の日本人会とのバランス」である。

アーメダバード日本人会は自主独立運営の組織である。だからといって他の日本人会とバランスを欠いた組織運営をすることは好ましくない。インド国内には７つの日本人会があり、日本人会同士の情報交換や交流がなされている。他の日本人会といいお付き合いをしながら、アーメダバード日本人会らしさを打ち出していったらいい。

じゃあ一から見ていきましょうと言って、予め作成した会則案を３人に手渡す。

会則案の第１条を見てさっそく公爵が言う。

「英文名にＴＨＥはいるの？」

第１条「名称」のところで、日本人会の英文表記を「THE JAPANESE ASSOCIATION OF

AHMEDABAD」と表記している。インドの日本人会の中でも「ＴＨＥ」を付けているところと、そうでないところがある。

定冠詞のＴＨＥの意味について調べたことを報告する。

『『ＴＨＥ』って永続するものに付くイメージなんですよ。例えば、創刊や廃刊が頻繁に起きる雑誌には付かないけど、新聞には名前の前に付いているとかね」

「おっしゃあ。じゃあ『ＴＨＥ』は付けたままでいきましょうよ」と公爵が言った。

和文表記は「アーメダバード日本人会」である。

アーメダバードを、「アフマダバード」や「アフメドバード」と呼ぶ人もいるが、一番ポピュラーなアーメダバードに落ち着いた。なお普段僕たちが人と話す時には「アーメダ」と縮めて呼んでいる。

「じゃあ次、『会の目的』です。何かご意見あります？」熱心に目を通しているみんなを見やる。

そうですねと久本弁護士が口を開く。

「目的のところは『安全』についても触れませんか？前に中村領事に来て頂いて安全対策連絡協議会もやったことだし」

「いいですね。入れましょう」

細江さんが大きくうなずき後を追った。

「インド地域社会への貢献もあった方がいいと思うんです。会としてやれることは小さいですけど、生活や仕事でインドの地域社会にお世話になっているわけだし。将来的にはインド人との交流もやっていくべきだと思うんですよね」

まだ何も活動が始まっていないが、何か立派なことをしているような気になる。

話し合った結果、会の目的として、会員相互の親睦交流と福利厚生に加えて、安全確保と日印親善関係への寄与が加わった。

「並びはやはり最も大事な会員相互の親睦交流が一番先でいいんじゃないですか」

との細江さんの発言で４つの言葉の並びも決まった。

そして第３条の「会員資格」に議論が移った。

「はい、アウト！僕入会できません」と公爵が叫んだ。

「何で、なんで？」と久本弁護士が訊ねる。

「外国人登録がアーメダバードでなくデリーなんですよ。ちょっと理由があって」
そうか。みな納得した気持ちになる。アーメダバードに住んでいる人の中には、インドに入国してすぐアーメダバードで生活を始めた人ばかりとは限らない。デリーやムンバイで何カ月か滞在してからアーメダバードに来る人もいる。インド入国後2週間以内に、居住地の最寄りの事務所で外国人登録を行わないといけないため、外国人登録が他の地域になったままの人もそれなりにいるだろう。
久本弁護士は会則とにらめっこしている。
「じゃあそこは外しますか。でもどこかで縛りを設けないとだめですよね」

そうなのだ。日本人会を作るということは、水曜日の「たむら」の集まりでも話題になっているため、アーメダバード在住者はある程度知っている。しかし、どこからかそれを耳にしたデリーやムンバイの人からも「何とか入会できないか」と最近問い合わせが来ていたのだ。
僕は思っていることを話した。
「久本さんの言うように、誰でも入れるというのではだめだと思います。他の日本人会では、名簿目当てにまったく関係ないところから入会してくる人もいるみたいですし。まずはアーメダバード居住者のための会ですからね」
『アーメダバードに住んでいる』というのをどう表現していったらいいですかね？」
細江さんが腕を組みながら考える。
「3か月くらいで縛ります？3か月以上住んでいる人は入会資格を認めると」
そう久本弁護士が提案した。
「じゃあアーメダバードに来てすぐの人は3か月待たないと入会できないっていうこと？それも可哀想だよね」と公爵が意見を述べる。
「じゃあ、『3か月以上居住』については予定者も入れましょう。そこは自己申告ということで。狭い世界だから、本当に住んでいるかどうかはすぐ判りますしね」と久本弁護士が締めた。

こうして入会資格がはっきりした。もちろん会の趣旨は「来る者拒まず」なのだが、やはり住んでいる者が支えあうという当初の理念からすると、実際に住んでいる人に入ってもらうのが一番だ。なお会則上は「アーメダバーおよびその近郊に……居住し」と表現し

ているが、グジャラート州内であればまったく問題ない。

「じゃあ会員資格はそれでいいとして、役員は前にも話したように会長と副会長でいいんだよね？」公爵が確認する。

「アーメダバードは人が少ないですからね。1名ずつでいいんじゃないですか。会則には記載しませんが、副会長が来期の会長になるという慣例にしていけばいいかと思います」そう僕は答えた。

「他もそんな感じでしたっけ？」

前にムンバイ日本人会の安田さんから聞いたことを公爵に説明する。

「ムンバイ日本人会は会長1名と副会長2名を置いています。副会長のうちの1名は来期の会長予定者です。次の年会長に就き、その次の年もう一度副会長に就いて、それから役を降りるという流れらしいですよ。だから一回役に就くと3年は降りられないわけです」

「じゃあ、やっぱり負担も大きいし、うちは人が少ないので会長・副会長の2名体制でいきましょう」細江さんがそう言う。みな異論はない。

「もっと人数が増えてきたら理事を何名か置いたりして、理事会とかも開催していくんでしょうね」久本弁護士も賛同する。

「そうですね。会計も本来は監事を置いて監査をしてもらうのですが、今は人数が少ないので、誰か別の人がチェックするということでいいんじゃないですか」僕はそう述べた。

「じゃあ、これらは将来設置する可能性があるということに留めときましょう」

細江さんがそう締めくくった。

「ところで、気になっている会費はどうしましょうか？受益者負担ということで、できれば会費は最低限にして、行事の都度集める方向でいきたいですよね」

プネ日本人会も会員数が少ないので、行事をする時に実費を集めていると梅野会長から聞いていた。

さらに安田さんに教えて頂いた話も付け加えた。

「毎年デリーで開催される合同連絡会への出席は会費で補わないとだめですよ。アーメダバードからデリーまでの往復飛行機代と向こうでのタクシー代をみとかないと」

「じゃあ、会員からはきりのいいところで一人1千ルピーを集めますか」公爵が提案する。

「それくらいだったら、誰も文句は出ないんじゃない？」
細江さんも久本弁護士も特に異論はないみたいだ。そこで会費についてもう一つ提案した。
「入会したいと思った時に気持ちよく入会してもらえるよう、下半期からの入会者は会費を半額にしましょうよ。そうしないと『４月になるまで入会を待ちます』という人も出てくるかもしれないので」
以前勤めていた商工会議所で運用していた扱いである。例えば１月くらいにアーメダバードに来た人がいるとする。いま入会すると１年分の会費がかかるので、４月まで入会を待とうと考える人もいるかもしれない。会費が半額になるのなら心理的な負担も少なくなる。
なるほどと公爵が頷き、そして思いついたように訊ねる。
「ちなみに家族からは会費を取るの？」
それを受けて久本弁護士が意見する。
「アーメダバードには家族帯同者はほとんどいないし、取らなくていいんじゃないでしょうか。将来家族連れが増えてきたら、その時考えたらいいかと」
細江さんがうなずく。
「そうですね。年会費は取らないようにして、必要になる場合は、行事の時に参加費として徴収すればいいんじゃないでしょうか」

よし。打ち合わせ事項もだいぶ終わりに近づいてきた。
「じゃあ最後になりましたけど、会員名簿はどうしましょう？ここも気になるところだと思うんですけど」とみなに意見を求める。
「電話番号とかメール・アドレスなんかも載せちゃうの？」公爵が質問を投げる。
久本弁護士が言う。
「うーん。会ったこともない人から電話やメールが来ることも考えられますよね。僕は気にならないけど不快に思う人もいるでしょうね」
僕も同感だ。今は電話やメールでいくらでも連絡が取れる。でも実際に会ってコミュニケーションを取ることを大切に思う。古い考えかもしれないけど。
「入会して、会の行事に参加して、知らなかった人とそこで知り合いになっていく。このプロセスを大切にしたい気がします」

公爵が畳み掛ける。
「確かにね、ちゃんと過程を踏めよと。入会して名簿を手に入れて、連絡先を一網打尽に確保できるほど甘くはないぞと」
この一年弱、公爵もいろんな人と会って名刺交換していったんだろうなと想像する。
「じゃあ名簿に載せるのは氏名と所属団体くらいでいいですかね？そしたらどんな人がいるかということは判りますし」
久本弁護士の言葉にみな納得した。

日本人会の入会申込書には住所の記載欄がある。賃貸マンションに住んでいる場合はその住所になる。ホテルに住んでいる人はホテルの所在地で構わない。グジャラート州内に住んでいるということを自己申告してもらう。
入会申込書には電話番号とメール・アドレスも記入する。災害や事故など万一のことが起きたら記入された電話番号に連絡を取る。日本人会からの周知・案内はＥメールで行うことを予定している。
入会申込書の特徴として、入会時に「在留届」の有無についても申告してもらうことにした。日本人が外国に３カ月以上居住する場合、管轄する領事館に在留届を出すことが義務付けられている。旅券法第１６条の規定を知らない海外生活者は案外多い。僕もアーメダバードに住み始めてから人に聞いたくらいだ。８月に開催した安全対策連絡協議会でも話題にあがったが、在留届を出していると領事館から事件や災害の情報が送られてくる。出さないメリットはまったくない。在留届は日本人会の入会と直接関係ないが、いい機会なので入会申込時に気づいてもらえばと思う。

「これは個人情報のかたまりですね」
と細江さんが入会申込書のドラフトを手に取って言う。
「そうですよ。事務局の責任は重大ですよ。紛失したりできませんよ」公爵が嗤いながら脅しをかける。
ワード・ファイルかＰＤＦに記入した入会申込書をメールで事務局に送ってもらうことにしている。遠方だとなかなか会えないことも多いからだ。そういうわけで、入会申込書のデータやそれをまとめた会員名簿は事務局が厳重に保管することになった。

「じゃあみなさん、これ以上検討することはないですか？」
細江さんが最後に訊くが、みなやり切ったという表情を見せている。
「じゃあ、この辺で終わりにしてたむらに行きますか？僕たちがいないんで、みんな訝っていると思いますよ」
賛成と叫んで、腹を空かせた僕たちは1台の車に同乗し、たむらに向かった。

こうしてまとめた日本人会会則の原案を、発起人全員に説明して回った。翌週、発起人として公爵と僕の連名で、日本人会の入会案内をおよそ知りうる限りの日本人にメールで流した。１０月１３日のことである。もちろんアーメダバード市内だけでなく、7月に訪問したバドーダラの土井さんや、その他のグジャラート州在住者も含まれている。
これからの流れは次のようになる。
案内に書かれた趣旨、添付された会則案、年会費予定額などを見て日本人会に入会を希望する人は、添付された入会申込書に記入して２５日までにメールで返信する。
次に、入会申込があった人に対して設立総会の案内を行う。設立総会は１１月１５日を予定しているので、会則に基づき2週間前には案内しなければならない。
設立総会の案内を流す時点では、大使の出席も確定しておかなければならないし、設立総会の議事内容をまとめた次第も送付しなければならない。
設立総会では会則案、役員の選出、そして初年度の事業計画について審議することを予定していた。

案内を流してしまうと、今度は懇親会費用をちゃんと賄えるのかという心配が湧いてくる。細江さんが根張り強く交渉したおかげで、会場となるイースティン・ホテルから、一人当たり８百ルピーという破格の値段を引き出すことができた。懇親会では通常の料理以外に簡単な日本食まで用意してくれるという。その代わりホテルからは最低３０名は集めてくれと言われている。もし３０人に達しなければ、言いだしっぺの僕たちが腹を括るしかない。
一体どれだけの人が集まるか予測がつかない。どんな結果になっても、もう進むしかない。

＊＊＊＊＊

案内を流した翌日はムンバイへ出張だった。

この日はムンバイのホテルで重要なクライアントとの昼食会に参加する予定だったが、日本人会の入会申込のことが気になって仕方がない。

「早川さん、ようやく昨夜日本人会の案内を流しましたわ。ムンバイ日本人会の安田さんに引き合わせてくれてからちょうど半年やわ。安田さんにもお礼かたがた日本人会発足の話をしといたで。いよいよスタートしますって」

「すごいじゃないですか?遂にですね！」早川さんも喜んでいる。

「でも本業の方は目立った成果を挙げてないからね。こっちは何も自慢できんけど。正直僕なんか今日のランチに呼ばれていいんかなと思うけどね」

今からクライアントと食事をするのはＩＴＣホテルというヘリテージ・ホテルである。旧館は植民地時代のコロニアル・スタイルで、石造りの長い廊下と椰子の木の列が非日常の世界を感じさせる。テキパキとしてしかし優雅に席へ案内するスタッフや、数千ルピーもの値段が付いたランチメニューを見ると、ここで食べるインド料理は普段食べるそれとはまったく異なる代物だろうと感じる。

「ここのダル（豆の煮込み）をぜひ味わってみてください」

早川さんの上司にあたる税務パートナーのサミールさんが言う。日本人はノンベジ料理も食べているが、インド人パートナー連中はベジ料理しか食べない。

２４時間煮込み続けて作っているというダルは、とても舌触りが滑らかでクリーミー。サミールさんに言わせれば、同じダルでもそこらのものとは全然違うとのこと。日本の料理番組でも「何時間もかけて丁寧にダシを取りました」とか言うが、それと似た感覚なのかもしれない。

ムンバイ出張中に美味しい食べ物に出会う時、「アーメダバードにはこんなの無いよな」、「ムンバイいいよな」、「でもどっちに住みたいかといえば、やっぱりアーメダだよな」という思考回路がいつも働く。

夜ホテルでメール・チェックしていると、さっそく入会申込が飛び込んできていた。相川さんだ。副会長としてお願いしていることもあって早い。黒岩さんとザッキーからも来ていた。６月に黒岩さんに案内して頂いたマンダル工業団地の様子が蘇ってきた。ザッキーに対しては、なかなか仕事が早いやんかと毒づいた。ザッキーといつも一緒にいたラン

ちゃんは、インターン期間を終えて日本に帰ってしまっていた。
初日で3件の申し込みは少ないような気がしたが、入会申込書に記入する時間もあるし、入会申込のピークはもっと先だろう。まだ焦るのは早いか。でも一週間もするとメールが来たことを忘れてしまう可能性があるので、知り合い連中には督促しないといけないなと思ったりしていた。
その時ふと頭によぎった。
「会員番号とかあった方がいいんかな？付けるなら入会申込順か」
会員番号とするかどうかはさておき、名簿を整理する上で何らかの番号があった方が便利に違いない。最終的にどういう風に番号をつけるかわからないが、入会申込順だとすれば、相川さんが1番、黒岩さんが2番、ザッキーが3番ということになる。
「じゃあ次の4番を頂いとこうかな」
と独り言をつぶやきながら入会申込書に入力し、自分宛にメール送信した。
「これで良しと」
入会申込順に会員番号を付与するとは案内にも書いてないし、誰にも相談したことのないほんの今思いついたアイデアである。だからもしこのルールを適用したとしても、僕以外の人は誰も知らないという点で公平さがある。そして4番を嫌がる人もいるだろうから僕が引き受けましたということで理由も立つだろう。このように自分を納得させて、4番に潜り込ませた。

翌日からは仕事よりも日本人会の入会申込状況の方が気になって仕方がなかった。案内は10月13日月曜日の夜に流し、翌火曜日には僕を含めて4名が入会したことになる。そのあと水曜日にはモティやトキボーを含む7名の申込があり、木曜日には6名の申込があった。3日間で17名が入会した計算である。
しかしこの後が続かなかった。金曜日の入会申込はまったくなく、土曜日はトシさんからの1件だけだった。もちろん日曜日の休みに入会申込を送ってくる奇特な人はいなかった。
「まさか2日目の7名がピークなんてことないやろな」
とかなりの不安を抱えたまま週明けを迎えた。

月曜日に公爵とランチを共にしながら入会申込の状況を話した。

「大丈夫ですって。まだエレクトロニクスとベターライフの音無組が来てないんでしょ。そこで１０名はカウントできますし」
公爵はいたって楽天的だ。
「あと相模工業も相川さんしか来てないから、まだ2名追加ありと……」
このような皮算用をしていてふと気づいた。
「南さんもまだですよ。あと、ピナクル関係は任せますよ」
ジェトロのあるピナクル・ビジネス・パークにはいくつもの日系企業が入居しているのだし、ここは公爵に集めてもらおう。
公爵は苦笑いしながら言った。
「みんな動きが鈍いからね。まあ心配しなさんなって」
確かに心配し過ぎだったかもしれない。事務所に帰ると、細江さんから音無エレクトロニクスの5人分がまとめて送られてきていた。その日さらに5人の申し込みがあったので、案内からちょうど1週間で入会申込者数は２８名に達した。
翌週の入会申込者は4名だったが、翌々週は音無ベターライフ全員と、音無エレクトロニクスの追加申込があり、新たに１０名の入会申込を数えた。意外とかなり高い確率で入会申込があるもんだなと思った。

入会申込者に設立総会・懇親会の案内を送る直前、細江さん、公爵と3人で会場の下見を兼ねて最後の打ち合わせを行った。会場の使い方や懇親会の料理についてホテルのマネジャーと打ち合わせをした後、アジアン・レストラン「シルクロード」で食事しながら話をした。入会案内送付後、想定していなかったことがいろいろ起こっていた。僕たちのように会社に勤務している人間ばかりでなく、学生や主婦からも入会の問い合わせが来ていた。いくつかのことをはっきりさせなくてはならなかった。
「学生会員なんですけどね、『学生ビザ（Ｓビザ）』だったら学生会員として認めましょうという話だったじゃないですか」と僕は切り出した。
「何か問題でもあった？」シューマイをつつきながら公爵が言う。
「それが、みんな学生ビザじゃなくて『研究者ビザ（Ｒビザ）』なんですわ」
僕も大皿からシューマイを取りながら続けた。
「この前『たむら』で会った造形家の方もそうだし、写真家の九鬼君もそうなんですわ」
ここで細江さんが意見する。

「インドで仕事して給料もらっている人と同じ額の会費を頂くのは心苦しいという趣旨だから、研究者ビザで来てる人も学生会員に含めていい気がしますね」
それを受けて提案する。
「じゃあ、該当する人がいるかどうか判りませんが、『ヨガ・ダンス・音楽ビザ（Yビザ）』というのもあるので、その3つのどれかに該当したら学生会員として入会できるということにします？」
「ろーかい！」
了解と言いたいのだろうが、公爵の口の中がシューマイで言葉になっていなかった。
「あと、学生会員の年会費は一般会員の半額の5百ルピーなんですが、高いという意見もあるんですよ。下げますか？」
そう話をすると細江さんも、
「いいんじゃないですか。学生会員から会費を取るのは半ば名目的みたいなもんだし」
となったので、学生会員として入会できるビザの範囲が決まり、会費も年間2百ルピーに落ち着いた。

「もう一つ決めとかないといけないことがあるんですよ」
ボーイがココナツで煮込んだ魚のカレーをサーブするのを横目に2人に話した。開店直前の7月にトキボーと来た時に比べて、スタッフの動きも手馴れてきている。
「何です？」細江さんが言う。
「インド人とご結婚されている方が何人かいるんですが、帯同家族の範囲をはっきりしといた方がいいかと思って」
「総会には来られるんですか？」細江さんが訊ねる。
「はい。娘さんと一緒に出席したいという方がおられます。娘さんは大学生くらいだそうです。案内で帯同家族は無料とうたっているので、同じようなパターンが増えてきたらどうしようかと思ってます」
音無ベターライフの坪井社長から以前聞いた通り、インド人と結婚されている日本人女性がいる話を2人にした。そういう方3名から入会申込を頂いていた。
すると細江さんは、
「今回は案内もしてしまっているし、帯同家族の懇親会費は無料でいいんじゃないですか。帯同家族が増えれば来年また考えるとして」と言い、そして続けた。

「ただ、帯同家族の範囲は決めとかないとね」
うーん、ちょっと考え込む。すると公爵が言った。
「配偶者と子供というのが一番すっきりしますね」
なるほどと僕は頷き、そして2人に念押しする。
「じゃあ、帯同家族の国籍は問わないということで問題ないですね？」
「入会者本人が日本人だったら大丈夫じゃないですか」
そう言う細江さんを見て、やはりこの会の一番の売りはリベラルさなんだなと改めて思った。
最後に2人に確認した。
「帯同家族は総会での議決権も被選挙権もないということでいいですね？」
「バランスすると思います。それで行きましょう」
話し合いの結果、学生会員と帯同家族について会則案を少し手直しすることになった。
また、入会申込があるたび会長に承認を取るのも大変なので、特に問題がなければ事務局で入会手続を行い、役員会に報告する方向で会則の修正を行った。
「じゃあ、これで設立総会・懇親会の案内を出しますね」
料理を欲張り過ぎたせいか、話し終わる頃にはすっかりお腹が一杯になっていた。

デリーには毎月社内会議で出張している。そこで今回のデリー出張を利用して、デリー日本人会とインド日本商工会を訪問することにした。首都デリーは日系企業数も日本人数も段違いに多い。日本人会も商工会も常設の事務局を持っている。空港に到着し車に乗り込むと、事務局が置かれているデリー市街に向かう。
デリー日本人会の事務局では事務担当の女性と話をした。アーメダバード日本人会の設立についてすでにメールで伝えてある。
事務所に入るなり目に入ってきたのはいくつもある本棚だ。聞けば、在住者から定期的に本の寄付を募り、集めた図書の貸し出しを行っているらしい。「本当は一冊ずつ管理していきたいんですが、今は自由に貸し出しをしています」と話してくださった。年々寄贈される本が増えてきて逆に困りつつもありますと苦笑いする姿が印象に残った。アーメダバード日本人会で将来図書室を作る際、参考にさせてもらいますと伝えた。
そのまま駆け足でインド日本商工会を訪問する。
インド日本商工会では事務局長と面談した。今回が2度目の訪問である。いよいよ日本

人会を設立する運びとなりましたと報告する。インド日本商工会は２００６年に法人化されるなど遥か先を走っている。

法人化を行うと日本人会としての銀行口座を持てるようになる。アーメダバード日本人会は最低限の会費しか徴収しない方針だが、それでもいくらかの現金は必ず手元に残るので保管リスクが生じる。会費の徴収も現金手渡しである。もし銀行口座があれば会費を振り込んでもらうことも可能になる。しかしいったん法人化してしまうと、監査や税務申告が義務となるので、アーメダバードではまだまだ先のことになるだろう。インドにある日本人会や商工会は各地で特色ある活動を行っている。日本人会設立後も、周囲といろいろ情報交換しながら改善していかなければならないことが、きっとまだまだ出てくるに違いない。

## 第９章　１１月　設立総会

この週僕は、月曜日からチェンナイ、ベンガルール、ムンバイと移動し、金曜日の午後ようやくアーメダバードに戻って来た。戻ってくるなり公爵から「新規にオープンしたホテルから招待状をもらったので行きましょう」と誘いがあった。その夜、裕福そうな地元の名士に囲まれながら、これ以上要らないというくらいご馳走を頂いた。「いい前夜祭になりましたわ」と公爵にお礼を言った。

一夜明けた１１月１５日土曜日、遂にこの日がやってきた。

いつものように7時過ぎに目が覚め、パンを焼きコーヒーを淹れる。今日は一切の予定を入れていない。ゆっくり朝食を摂ったあと、スーツに着替える。服装には無頓着なのだが今日はトラサルディのネクタイを締めた。祝い事の時は赤いこのネクタイをするのが自分の中の決まり事になっている。

出張時に何度も読み返して折れ曲がった設立総会のシナリオを持って会場のイースティン・ホテルに向かう。まだ誰も来ていない。静まり返ったロビーの電光掲示板には、「アーメダバード日本人会設立総会」とちゃんと日本語で表示が出ている。

９時には主だったメンバーが徐々に集まってきた。

滝丸君が持ってきたバナーを広げる。幅８０センチ高さ2メートルのバナーに「２０１５年１１月１５日　アーメダバード日本人会　設立総会」と大きく印刷され、みんなから「いいんじゃない」と歓声が上がる。会場の良く見える位置にバナーを配置すると、それまで３０席の椅子が並べられた単なる空間が違った雰囲気に変化する。

今回僕たちは中規模の部屋を借りて設立総会の会場としていた。設立総会を開催している間に、部屋の外で料理や飲み物を配置してもらうようにホテルにお願いしていた。部屋に通じる扉の脇に受付を置き、受付を済ませてから会場に入ってもらう。その時に会費と懇親会費を合わせて徴収するようにした。

トシさん、江本さん、黒岩さん、続々と出席者が集まってくる。

やがて山平大使が姿を現したので、会場の前方に設えた来賓席に案内した。

１０時定刻となる。

「みなさま本日はご多忙の中、アーメダバード日本人会設立総会・懇親会にお越し頂き誠にありがとうございます。ただ今からアーメダバード日本人会設立総会を開催致します。発起人として司会を務めさせて頂きます小林と申します。どうぞよろしくお願い申し上

げます」

そう言ってから、出席者に配布している総会次第に基づいて今日の予定について説明を行った。

「次に本会の設立発起人の方々をご紹介させて頂きます」と言って発起人一人一人の名前を五十音順に読み上げ出席者に紹介する。相川さん、坪井さん、久本さん、細江さん、南さん、最後に僕の名前を読み上げる。名前を読み上げられた発起人はそれぞれ起立する。

設立総会のはじめに発起人の紹介を行うのは、かつての上司白瀬さんのアイデアだった。マー君の地元後援会を発足した時、「設立総会で発起人を紹介してあげたらいいんやないか。別にお金もかからんのやし」と白瀬さんが進めていった記憶が思い出される。出席者の中には発起人の存在を知らなかった人もいるだろうし、「こういう人たちが中心になって動いてきました」という場はあるべきだと思う。さらに発起人の人たちは必ず総会に出席してくれるというメリットもある。

発起人を代表しての挨拶という形で、自身の体験を踏まえた思いの丈を語った。

「9カ月前私がアーメダバードにやって来たとき、日本人の知り合いは誰もいませんでした。肉を買えるところも、リカー・パーミットの取り方も知りませんでした。

日本人の集まりがあると知って行った『たむら』で、初めて日本人に会った時、すごく安心したのを覚えています」

「そこに座っているヒゲの方もそうですが……」と公爵の方を向いて発言したところで会場に笑いが走る。

「……それから、たむらでの集まりや個人的な飲み会に参加する中で、心地よさみたいなものを感じるようになりました。家族を日本に置いてきている者としては、ここのメンバーが一種の仲間あるいは家族のような気になるのです。

アーメダバードの生活環境は厳しいです。

だからこそ、周囲の日本人と情報交換や交流をしていくことが、アーメダバード生活を少しでも快適にしていく上で大切だと思います。

いまアーメダバードには個人的な任意の集まりの場があります。人が替わっても続いていくように日本人会として公式な組織を持ちたい。現在住んでいる人のそして将来アーメ

ダバードに住む人のためになる組織を持ちたいと、そう思います」
そう話し終えた後、会場一人一人の顔を見渡していく。江本さん、トシさん、海原さん、黒岩さん、モティ、トキボー……。みんなの真剣な表情を見ると、間違ってなかったという思いが湧く。

しばらくして、公爵の方を見据えて口を開く。
「それでは、本会の議事を司る議長を選出したいと思います。みなさま、議長選出について何かご意見はございますでしょうか？」
さあ公爵の出番でっせ。
すると少し間があって会場にセリフが響く。
「議長には、音無エレクトロニクスの細江さんがよろしいんじゃないでしょうか」
会場が一瞬シーンとなった直後「異議なし」の声が響き、それがぎこちなく続いていく。異議なしの発声は少し早すぎたんじゃないかと少しハラハラする。
「それでは、みなさまにご承認を頂きましたので、細江様、議長席にお願いします」
役割がいったん終了したことに安心しながら演台を後にした。

会場の後方から立ち上がって、来賓席の横の議長席に細江さんが着く。細江さんから、まずは来賓の山平大使からご挨拶賜りたいと思いますと話があった。
大使が立ち上がり演台に向かう。
インドで８番目となる日本人会ができたことに祝辞を述べられる。そして各地の日本人会や商工会と連携しながら、アーメダバード日本人会が発展していくことを望んでいると話された。また安全対策で気になることがあれば、ぜひ大使館・領事館に相談してほしいと強調された。アーメダバードのことを気にかけて頂いているのだなと思った。

大使の挨拶のあと、本題の議事に入っていく。まずは日本人会の会則について審議し、承認される必要がある。まだ会則の中身を知らない出席者も多い。細江さんから会の目的や会員資格について一条ずつ丁寧に説明が行われる。来年からは会則を変更する場合に、変更部分だけ説明すれば足りる。
役員は会長と副会長の２つしか置かないし、最低限必要なシンプルな会則案になっている。会費もとりあえず年間１千ルピー（学生は２百ルピー）とした。将来会員が増えてい

ろいろ不都合が出てきたら、制度を変えていったらいい。会則の変更もハードルが高くないようになっている。細江さんが審議に諮ったところ、特に何の意見もなく順調に採決された。この時点で正式に日本人会が設立された。

細江さんは次の議題に移っていく。

「では続きまして、第2号議案役員選出の件、審議させて頂きたいと思います。本年度は会長および副会長の選出になります。みなさま、役員の選出について何かご意見はございますでしょうか？」

さっそく江本さんから発言がなされる。

「会長には議長である音無エレクトロニクスの細江さん、副会長には相模工業の相川さんがよろしいんじゃないでしょうか？」

少し静寂を置いて会場に異議なしの声が溢れる。僕も賛同の声を上げた。

「ありがとうございます。それでは、相川様と私で本会を代表して参りますので、みなさまどうぞよろしくお願い致します」

２人を会の顔として頂くことに、会場の雰囲気も違和感がまったく見られなかった。６月末に細江さんに日本人会の会長を打診した時のことを思い出す。こうしていま細江さんが会長に選任されてみて、やはり自然の流れだったのだろうと思う。事務局には弁護士の久本さんと僕が就くことになった。役に就いて頂いた細江さんと相川さんに恥をかかせないよう、日本人会を支えていかなければならないと肝に銘じた。

その後、事業計画案と予算案についての審議がなされ、日本人会の設立総会は無事終了した。事業年度は４月から３月までの一年間なので、今年は来年３月までの５か月弱の期間しかない。それでも忘年会や工場見学会といった行事を計画していることが発表された。また１１月２９日にデリーで開催される「全インド日本人会・日本商工会合同連絡会」に、アーメダバード日本人会会長として細江さんが出席することもアナウンスされた。

総会終了後の弛緩した空気の中、九鬼君が声を上げる。

「みなさん、記念写真を撮りたいと思いますので前方にお集まりください」

記念写真これはいいアイデアだ。総勢３０名の出席者が前方に集まり３列に並ぶ。僕も相川さんの隣に腰かけた。

「はい、フラッシュが3回光りますので、みなさん前を向いていてください」プロのカメラマンは指示もてきぱきしている。

こうして撮影された写真は後で全会員に送付された。写真を見ていると、日本人会の名のもとにこんなにも多くの人が集まったのだなと感慨深い。

引き続き開かれた懇親会は、ビールでなくジュースの乾杯で幕を開ける。ホテルと何度も打ち合わせをしていたため、鳥の唐揚げ、焼きそば、巻きずしなどの日本食も準備してくれたようだ。

先ほどの乾杯の挨拶はありがとうございましたと、江本さんを見つけて声を掛ける。日本人会最年長ということで挨拶をしてもらった。

「今日はね、こういう場に参加することができて本当に良かったと思ってますよ。日本人会の設立総会に当事者として立ち会う経験なんて、まずないでしょう」

江本さんの満足そうな顔を見て、確かにそうかもしれないなと思った。懇親会の場を見渡せば、何人かが固まり立食しながら談笑にふけっている。ある者は大使といろいろ真剣に話し合っている。ふざけ合っている若手連中もいる。皆それぞれ何か楽しんでいる様子に嬉しく思う。

江本さんと話していると、一人の女性が声を掛けてきた。

「ああ、コジマさん。お久しぶりです」と江本さんが言う。

コジマさんは、イギリス人の父と日本人の母を持ち、現在はインド人の男性に嫁いでアーメダバードで家庭を築かれている。嫁いだ先はサルバイ・ファミリーといって、グジャラート有数の名家である。サルバイ・ファミリーが創設したミュージアムも市内でいくつか公開されている。

「江本さん、コジマさんと以前から付き合いがあったんですか？」と嗤いながら問い詰める。

「いやね、郊外のスポーツショップでゴルフ用品を物色していたら、コジマさんが『日本人ですか？』って話しかけてこられたんですよ」

「アーメダバードで日本人を見ることなんてないですからね。もう２０年近く住んでいますけど、こんなに大勢の日本人を見たのは今日初めてですよ」とコジマさんも嗤う。

２０年前か。ほんの最近まで日本人は数えるほどしかいなかったんだろうなと想像する。これから間違いなく日本人は増えていくはずですよと話をする。

最後に公爵に声を掛け、設立総会のバナーの前に並んで立って記念写真を撮った。
「アーメダバード日本人会設立総会。ここまでお疲れさんでした」と公爵に言う。
「ほんとにここまで来るとはね。スワティでランチして、ロー・ガーデンで子供たちに追いかけられたのが遠い昔のように思えるね」
『『みなみ亭』がやっぱ大きいんとちゃいますか？」
公爵が自宅を開放して飲み会を開いてきたことに本当に感謝している。
「みなみ亭」と称された飲み会はこれまで3度開かれ、いつも明け方にお開きになるというハードさぶりだった。さびしがり屋の公爵が酔いつぶれるまでは決して帰ることができない。初回に滝丸君が意識を失って倒れたのでその後の開催が危ぶまれたが、順調にハードさが増していき、みんなの結束がだんだん強くなっていった。
「公爵は日本人会の宴会部長としてこれから君臨していくんでしょ？」
「やだよ！僕は日本人会に対抗してこれからも独自に飲み会をやるからね」と冗談交じりに公爵は叫んだ。

## 第１０章　１２月　ひとやすみ

アーメダバード日本人会の設立総会は無事終了した。翌日曜日は近所のホテルでゆっくり朝食を摂り、昼から散髪しに出かけた。独り何も考えない時間を過ごした。

月曜日からしばらくの間、インド各地から日本人会に関する問い合わせが寄せられた。設立総会の終了後、マスコミからインタビューを受けたためだろう。一番多かったのは、在住者ではないが入会できないかというものだった。会則を作るときにも予想されていたことだが、細江さんと相川さんに相談した。他の日本人会では地域外の人でも入会できる準会員制度を作っているところもある。話し合った結果、まだ会もできたばかりだし、他地域からの入会は今後検討していきましょうということになった。

マスコミの記事を見たグジャラート州内の在住者からこんな問い合わせもあった。同じ州内といっても、南に2百キロも離れたスーラトという町からである。

「今度、家族を同伴する予定の駐在員がいるのですが、子供を通わせる学校の情報はありますか？」

アーメダバードには子供を学校に通わせている駐在員家族がまだいない。そもそもほとんどが単身者で、配偶者を帯同している人ですらごく稀なのだ。やはり数少ない欧米系の駐在員が、市内のインターナショナル・スクールに子供を通わせている例は聞いたことがあるが。

スーラトはムガル帝国時代に栄えた港町。新たに日系メーカーが進出し、２０１５年の春先には１０名近くの日本人が駐在する予定らしい。スーラトの学校情報を伝えられなかったのは残念だが、アーメダバードよりさらに厳しい場所で日本人が活躍していくことをうれしく思う。

入会申込があった人のうち、設立総会に来ていない人から会費を徴収するという課題があった。

同じ会社に勤めている場合は社内でまとめて頂くようにした。なかなか会う機会がない人からは知り合い経由で会費を頂いた。それでも何人かは直接訪ねて行って集金するほかなかった。

大谷さんもその一人だった。アーメダバードには造形芸術を学びに来られている。幸い

大谷さんが活動している「カノリア・センター」まで事務所から5分ほどの距離なので、センターの入口ゲートで待ち合わせて集金することになった。

「来られた最初の頃に『たむら』でお会いして以来ですよね」

領収書を渡しながらそう言った。

「そうなんです。なかなか忙しくて、あれから全然たむらには行けてなくて」と大谷さんは言った。朝から夕方まで、制作室で作品づくりに取り掛かっている。ムンバイで開催される展覧会に作品を出展するらしい。せっかく来られたのでとセンター内を案内してもらった。

敷地に入ってすぐの事務棟の赤レンガ壁に「KANORIA CENTRE FOR ARTS」という金属の文字盤が打ってある。１９８４年にカイラス・カノリア氏が設立したとある。

センターの建物はコンクリート打ちっ放しの壁と赤いレンガで統一されている。周囲の緑とほどよく調和している。

制作棟に壁はなく、一つ一つの制作室がむき出しになっており、中で作業している人たちの姿が外からよく見える。それを大谷さんに訊ねると、

「一応木の扉があって帰る時は閉めるんですが、それ以外はずっと開けたままですね。そっちの方が風通しもいいので」

「しかし夏は大変でしょうね。エアコンが無いと」

「そうらしいです。今の時期でも作業していたら暑く感じる時があるのに」と言って、広い通路の片隅に置いた制作中の作品を紹介してくれた。

生成りのコットンで覆われ丸みを帯びた立体の節々からいくつものコブが出ている。ちょうどボルダリングの石が壁から飛び出ているように。

「ココナツの殻なんです」

そう言われてなるほどと思った。ココナツの殻を半分に割り、それをコットン地に貼り付けている。近くの果物屋にお願いして不要になったココナツ殻を集めたそうだ。今作っている物体以外にあと何体か作るようで、完成すると母船となる宇宙船といくつかの子船になる。宇宙船って言っても、素材のおかげで優しい感じがしますねと感想を述べた。

それから僕たちは少し奥に行ったところにあるカフェに入った。

「ここ、ひょっとして、『ゼン・カフェ』?」

カノリア・センターもゼン・カフェも広大な大学の敷地の一角にあるのだが、裏で繋が

っているとは思わなかった。
「ガイドブックに載ってたし、家から近いので一回来ようとしたんですけど、どうも探せなかったんですよ」
ゼン・カフェも大学のキャンパス内にあるため多くの緑に包まれている。奥には「グファ」という名の巨大な人工洞窟があり、合わせて見に来ようと思っていたのだ。地元の有名建築家が設計したグファに足を踏み入れると、湾曲した壁一面に色とりどりの絵が描かれている。湾曲した柱や丸みを帯びた天井がガウディの建築を思わせる。場所を見つけることを半ばあきらめかけていただけに、今日思いがけなく来ることができてよかったと大谷さんに述べた。

＊＊＊＊＊

２０１４年もいよいよ終わりに近づいてきた。海外で勤務する多くの駐在員が日本に帰国するのと同じように、僕も年末年始を自宅で過ごすことにしていた。航空券を手配し、日本に帰る日がやってくるのを楽しみに待っていた。

一時帰国まで一週間を切ったこの日、僕は細江さんとムンバイの「タージ・マハル・パレス」に来ていた。細江さんに会うのも2週間前の日本人会の忘年会以来だ。
タージ・マハル・パレスはムンバイの南端に位置し、インド門と共に植民地時代のムンバイを象徴する歴史的なホテルである。その昔タタ財閥の創始者であるジャムシード・タタが若かりし頃、「犬とインド人はお断り」と言われてホテルに入店できなかった悔しさから、インド人が利用できるホテルをという目標を抱いて建てたのがこのホテルである。
インド門の脇から世界遺産の仏教洞窟があるエレファンタ島へフェリーが運航している。エレファンタ島からの帰りにフェリーから陸地を眺めると、インド門と並んでタージ・マハル・パレスが海を向いて建っているのがよく判る。
細江さんと僕は2階のクリスタル・ルームに向かって歩いていく。天皇陛下の誕生日を祝し、ムンバイ総領事館主催のお祝いレセプションに招待されていた。会場はすでに州政府関係者や、日系企業やインド企業の代表者、文化関係者など2百名近い人たちでひしめき合っていた。
「最初の連絡係だったということで、僕まで招待状が送られてきたのはラッキーでした」

そう言って細江さんに笑った。この催しはムンバイ総領事館が主催していることから、領事館の管轄地域にある日本人会の代表者すべてに招待状が送られている。ムンバイ日本人会やプネ日本人会と並んで、我がアーメダバード日本人会にも招待状が送られてきたというわけだ。設立以前からムンバイ総領事館とやり取りしていた関係で発起人の僕にも招待状が来ていた。招待とはいえ交通費は自分持ちなので、来場者のほとんどはムンバイ在住者と思われる。出席するかどうか細江さんに相談したところ、またとない機会なので自腹でも行きましょうよということになった。

「招待状にスマート・カジュアルって書いてあったから調べたんですよ。そしたら濃い目のスーツと書いてあったので、黒のスーツを着てきましたけど。インドに持ってきた夏物のスーツは実は黒しかないんですけどね」と言って嗤うと、私もですよと細江さんも頷いた。

大半の人はスーツ姿だが、カクテル・ドレスを着た女性や着物姿の女性も見かける。州政府高官は民族衣装だし、総領事は燕尾服である。田舎町アーメダバードから急にきらびやかな社交の場に投げ出されたような感じを覚える。

「とりあえずビールでも頂きましょう。今日は招待を受けた立場なので気も張らなくていいですし」

主催者からの挨拶が一通り終わったところで、細江さんと飲み物の列に並んだ。カウンターを見るとワインに並んで焼酎や梅酒まで置いてある。

「アーメダバードの連中に見せてやりたいですね」と細江さんが杯を掲げた。

「料理もすごいですよ。お寿司もありますしね」と僕も言う。

「そう言えば、総会の後しばらくして一度お昼にイースティン・ホテルに行きましたよ。前に聞いていたサーモンの握りを頼みました」

「どうでした？」

「それが、それが。サーモンの刺身でなくて、スモーク・サーモンが乗ってたんですよ。オードブルに出てくるまんまのやつですよ」

スモーク・サーモン。日本では考えられない発想ですねと僕が返すと、

「寿司なんて毎日出ないし、材料も安定して仕入れできないんでしょうね」と言って細江さんは肩をすくめた。

ビールの次に梅酒を飲み、巻きずしを食べながらも、話題は結局アーメダバードから離

れられない。それを細江さんに言うと「アーメダバードの人は何だかんだ言ってもアーメダバード好きなんですよ」と返ってきた。

偉い人たちの挨拶が一通り終わり、会場は賑やかしい空気に包まれている。ムンバイ在住者と思しき日本人が集まって談笑し、名刺交換などをしたりしている。そんな人たちの中に安田さんの姿を見つけたので声を掛けた。

「ちょうどよかった。今日はアーメダバード日本人会の細江会長と参加しています」

「日本人会設立の記事を見ましたよ」と安田さんは微笑んだ。安田さんの銀髪がゆらめいた。そして細江さんに向かい、

「安田です。確か、この前デリーで開かれた日本人会・日本商工会合同連絡会で発表されておられましたね。その時はご挨拶する機会がなくて」と言って名刺を差し出した。

「アーメダバード日本人会はまだまだ小さい組織です。この前開いた忘年会も各自お酒や食べ物を持ち寄ってという感じです。今後もムンバイ日本人会さんからいろいろ教えて頂きながらやっていけたらと思っています」と細江さんは言った。

固い握手の後「細江さん、小林さん、こちらこそよろしくお願いします」と言って、安田さんは去っていった。

「そういえば細江さん、デリーの合同連絡会はどんな感じだったんですか？」と訊いてみた。

「ああ、ちょうど2週間前になりますか。各日本人会、商工会の方が大使公邸に集まってなかなか壮観でした。出席者も５０人以上いて、最後に大使公邸の庭で集合写真も撮りましたし」

「各日本人会の発表を聞いてると、デリーやベンガルールは別格として、うちの会員数も初年度にしてはまあいい線行ってますよ」

総会後に1名入会申込があったので、現在のアーメダバード日本人会の会員数は４８名である。聞けばハイデラバード日本人会が４９名なので来年には追い越しているかもしれませんねと話したら、細江さんが、

「ひょっとしたら、コルカタ日本人会の８６名も超すかもしれませんよ」と嗤った。

ホンダやスズキが入ってきたら、実現する数字かもしれませんねと僕も頷いた。

「そんな姿を見られるまでアーメダバードに居てるかどうか判らないけどね」との言葉

に僕もつられて嗤った。
催しも終わりに近づき参加者の姿が少なくなってきた。細江さんからもう一杯どうですか？と誘われたので、焼酎を手にして再び乾杯した。
「いい忘年会になりました」
「小林さんはいつ日本に帰られるんですか？」
「アーメダバードに戻って、この週末を過ごしたらすぐ出発です」と言って嗤った。
「いいですね。私はまだ一週間先ですよ」
「じゃあ次お会いするのは年明けですね」と言って、細江さんと別れた。

昨夜アーメダバードを出て、デリー、香港と乗り続けたエア・インディア機もいよいよ関西空港に着陸する。
関西空港から乗ったリムジン・バスから外の景色を眺める。どんより曇った冬空の下、海に近い倉庫群が見える。人の気配はなくすべてがクリーンに見える。
「これが日本なんだなあ」
精密な社会、クリーンな社会、変化があまりない社会。生活する上で不足はないが、自身のやるべきことが今はない場所。
妻や親や友人に囲まれて２週間そういったところで過ごす。
親父が最近更新した車の免許について話す。
「７５歳を過ぎたら更新前に教習所に行かなあかんねん。テストを受けさせられるけど、下手したら落ちるくらい厳しいで」
親父が高齢者講習を受けたという話を聞いて、１年前日本を出る時はそれほど感じなかった親の老いというものを少しは感じるようになった。

年末が押しせまる週末、瀬戸内海の港町、岡山県の日生まで妻と旅行した。久しぶりに車を走らせ、潮の匂いを嗅ぐ。日生港から牛窓方面に抜ける大きな橋の手前に「夕立受山」という小高い山がある。標高２０９メートルしかないが、開かれた山上から眼下に瀬戸内海を見渡すことができるお気に入りの場所だ。
日生湾の外に浮かぶ小さな島々。遠くに奥に横たわる大きな影は小豆島。波立たない海面は鏡のように真っ平らで、ジオラマのように浮かぶカキの養殖筏の周りを太陽がキラキラと照らす。人の気配をまったく感じないがそれでいてほっとする静寂。

妻の傍に立ち遠くを見ていると、一年後の冬もこうして同じような景色を見ているのだろうかと思う。その時僕は妻にどんな報告ができるだろうか。僕はインドに帰ってやるべきことに思いを馳せていた。

## 第１１章　１月　ヴァイブラント・グジャラート

２週間ぶりにアーメダバードに戻ってみると寒さが一段と増していた。インドに居て布団を被って寝たことなどなかったのに、昨夜はブランケットを被って寝た。インドで初めて「寒い」と感じた。それでも寒く感じるのは夜だけで日中は２０度まで気温が上がる。何をするにしてもどこに行くにしても一番いい季節だ。

久しぶりに事務所に顔を出すと、さっそくラジーブから日本はどうだったと訊ねられる。雪も降ったし寒かったよと告げると、事務所のスタッフはみな驚く。家の周りにうっすら積もった雪の写真を見せると、「オー」と驚かれる。どれだけ寒くなってもアーメダバードに雪が降ることはない。

２週間分のメールが溜まっていたのでパソコンを開けるのが怖かったが、覚悟を決めて一つ一つメールを処理していく。午前中一杯かけても未開封のメールが残っていた。

昼過ぎ公爵から電話が入る。そう言えば何かメールが来ていたなと思い出す。

「アーメダバードに戻ったばかりで悪いんですけど、頼みごとがいろいろあって」

何ですかと訊く。

「ヴァイブラント・グジャラート絡みで、また食事懇談会をお願いしたいんですよ」

「ヴァイブラント・グジャラート」とは、約2年に1回開かれているグジャラート州主催の経済サミットである。経済・投資に関して各国の政府関係者や企業との間で様々な協定が結ばれる。取引促進に向けた展示会も開催される。今年の開催で第7回目となる。前回２０１３年の開催時はカナダと日本の2か国がパートナー国として参加した。モディ首相の誕生後とあって今回はパートナー国が一気に8か国に増えた。イギリス、フランス、オーストラリアなどから大勢の政府関係者や企業関係者がアーメダバード入りしている。日本も大使館や領事館から多くの人が出席するようだし、イベント出席のために日本からも視察団が来ることになっていた。

「１０日に予定されている日本商工会議所の視察ミッション団との会合とは別ですか？」と公爵に訊ねると、経済産業副大臣とムンバイ総領事それぞれが、前日の9日に地元経済

界との意見交換を希望しているとのことだった。

「もう明後日ですし、会長、副会長には何とか出席して頂くとして、あとは主な会社に声がけだけはしましょうか。急な話で都合がつかない人もいるでしょうし、まだ日本に帰っている人も結構多いかもしれませんけど」と言って、受話器を置いた。

結果的には、副大臣が各国との閣僚会議に出席することになったため、こちらの会合はキャンセルになった。ムンバイ総領事とは、細江会長、相川副会長と共に夕食を頂きながら意見交換を行った。天皇誕生日のレセプションに招待頂いたお礼を細江さんと述べる。総領事もアーメダバードの日本人在住者を気にかけておられ、近いうちに領事を出張させて「一日領事館サービス」をやりますよと太鼓判を押された。

翌１０日の日本商工会議所視察ミッション団との会合はもう少し大がかりなものになった。ミッション団からの参加者は１０名と聞いて市内にある中華レストランの個室を予約した。ヴァイブラント・グジャラートの影響で、ホテルというホテルは軒並み満室でレストランの予約も難しいと公爵から聞いていた。

視察ミッション団の代表と細江会長からそれぞれ挨拶を行ったあと「モクテル」で乾杯する。視察団のメンバーから「アルコールは入っているんですか？」と訊かれるが、禁酒州なので当然入っていませんよと笑いながら答える。

MOCKTAIL の MOCK には真似るという意味がある。カクテルに似せたノン・アルコール・ドリンクである。種類が豊富でアーメダバードの若者が色鮮やかなモクテルを飲む姿をよく見かける。オレンジ・ベースに生のミントが添えられたモクテルは爽やかだが、やはりビールの方が中華料理に合う。

参加者の一人から「やはり、アーメダバードではお酒を飲むのは厳しいですか？」と訊ねられる。日本に居ると酒を飲めない世界というのは想像がつかない。「買えなくはないんですが」と言ってアーメダバードの事情を説明する。日本からの参加者は酒を買うのに許可証を取る必要があることに驚いていたし、デリーからの参加者も「噂には聞いていたけれど」とやはり驚いていた。家飲みする分には特に問題ないんですが、外で飲めないのは何とかならないかなと思いますけどねと日頃思っていることを述べた。

「皆さんはどういう日程で動かれているんですか？」と訊くと、先にコルカタで開かれた経済サミットに参加し、アーメダバードでヴァイブラント・グジャラートに出席してか

ら帰国するらしい。コルカタとアーメダバードとの違いについて訊いてみる。
「アーメダバードは町が綺麗で道路などのインフラも整っている気がしますね」と参加者の一人から意見があった。
「確かに製造業の拠点を置くにはいいと思いますけどね。課題は日本人の生活インフラの整備ですよ」との細江さんの話にみな嗤った。

翌日、ヴァイブラント・グジャラートの「ジャパン・セミナー」に参加した。会場となる「マハトマ・マンディール」はアーメダバードから小一時間離れたガンディナガルにある。もともとグジャラート州の州都はアーメダバードに置かれていたのだが、２０キロほど郊外にインド独立の父ガンジーの名を冠したガンディナガルという計画都市を造り、政治の拠点はそちらに移っている。碁盤の目に沿った道路は複数の車線を持ち、大きな区画の一角に大会議場のあるコンクリート造の建物が聳える。
公爵のおかげで特別なパスを入手していたので、僕たちは会場近くまで車を乗り入れることができた。通常のパスだとかなり遠くから送迎用のバスに乗り換えなければならない。多くの来場者で溢れる人波をかき分けジャパン・セミナーの会議室に入る。ゆうに５百人は入れるだろうか。会場にはすでに２百人くらいの日本人とインド人が席についていた。マハトマ・マンディールにはこういった会議室がいくつもあり、それぞれ各国のセミナーが開かれている。
経済産業副大臣や州政府高官から挨拶がなされ、グジャラートに投資を行う日系企業と州政府との協定調印式も行われた。外国企業の投資に理解を示し、州が熱心に呼び込みをしてくれるのはありがたいと思う。この地域にますます多くの日系企業が進出し、日本の存在感が増していけば嬉しい。
日本の何倍という国土があっても、ほとんどの土地は農地として使用され、農業従事者の割合は多い。そういう状況にもかかわらず、都市でも農村でもまだまだ生活水準向上のための物資が不足している。企業が進出し、工場で働く労働者が増え、現金収入を手にすることで、生活水準が上昇していくサイクルが望まれる。そんな役割に日系企業も加わっていけたらと思う。
ジャパン・セミナーの会場では、何人かのアーメダバード在住者と顔を合わせた。いたる所で新年の挨拶が交わされている。日本に一時帰国していた多くの駐在員はインドに戻ってきたばかりだ。江本さんからさっそくゴルフのお誘いがある。一緒にプレーしていた

メンバーのほとんどは年末年始に一時帰国していて、寂しい思いをしていたようだ。遠くにモティの姿を見つける。よう！と言って隣に座った。日本でさんざん友人と遊びまわって、実家には2日ほどしか泊まらなかったとモティがニヤつく。もちろん日本に帰った時もそうだが、アーメダバードでも同じように「帰ってきた」という感じがするのは何だか不思議な気がする。

日本から帰ってきたばかりだというのにやるべきことは結構多い。雇用ビザと外国人登録が1月半ばで切れてしまうため、すぐ更新しなくてはならなかった。2か月も前から会社に伝えていたのに、デリーから書類が到着し、外国人登録事務所に持ち込むことができたのはようやく期限の3日前だった。

結局、書類の出し直しが発生したりして、更新されたビザを入手できたのは1月も終わろうとする頃だったが、罰金が発生しなかったのでまあ良しとした。

翌週の水曜日いつものように「たむら」で晩御飯を食べていると、細江さんからちょっといいですか？と話があった。聞けば、印日友好協会が主催する「ジャパン・フェスティバル」に日本人会として挨拶して欲しいとのことだった。

「細江さんはどうなんですか？」と訊いたのだが、その週は出張でアーメダバードを不在にしているとのことだった。相川さんもまだ日本から帰ってきていない。

イベントは２００９年から開かれていて今回が４回目となる。２週間という期間、書道の体験や空手教室、生け花の展示があるほか、日本映画の上映など幅広い催しが行われる。

「まあ確かに地元との交流になりますね」と言うと、「日本人会のＰＲをお願いしますよ。代表のラケッシュさんに連絡しときますね」と細江さんから返ってきた。

翌日の午前中にラケッシュ氏からさっそく電話があった。話を聞いていると日本人会からの挨拶のほかに、最終日に行われるセミナーで講演して欲しいという依頼だった。「日本の企業文化とベスト・プラクティス」という題で３０分ほど話して欲しいと言われた。

少し迷ったがいいですよと返事した。準備するのは大変だがこんな機会もめったにないかと思った。

事務所からは、年が明けて落ち着いたらベンガルールやチェンナイといった南部の都市

のクライアントもカバーして欲しいと言われていた。うちの事務所はデリーとムンバイそれにアーメダバードに日本人を置いているのだが、南インドには日本人が配置されていなかった。日系企業の進出が今後最も加速するのはアーメダバードと事務所は想定し僕を配置したのだが、この一年間思ったほど企業は進出して来なかった。そこでムンバイは完全に早川さんに任せ、その分南への出張が増えることになった。

行ったことのない町に出張するのは面白い。デカン高原の上に位置するベンガルールは、空港に降り立った時から爽やかな空気を感じ、最も住みやすい町として日本人駐在員に人気があることを感じさせた。チェンナイでは車で通過したビーチ沿いの道端で魚が売られていることに驚いた。いろんなクライアントと話をし、アーメダバードとはまた違う空気を感じた。相手もアーメダバードの事情を面白がって聞いてくれた。仕事の合間や朝晩のホテルで過ごす時間、ジャパン・フェスティバルで何を話そうかといろいろ考えていた。

1月２３日金曜日、仕事を終えるとすぐにジャパン・フェスティバルの会場となっているアーメダバード経営者協会（ＡＭＡ）に向かった。ＡＭＡは海原さんが日本語を教えているところ。僕も5月に一度訪問し、松下幸之助の話をさせてもらったことがある。つい数日前もＡＭＡに来て、日本人会として来賓挨拶をしてきたばかりだ。５分ほどの簡単なスピーチで、覚えこんだ英語のセリフを吐き出しただけだが、設立して2カ月しか経っていないこと、約５０名の会員数でスタートしたことを説明し、「日本人もこれから増えていくので皆さんとの交流や連携を図っていきましょう」とアピールしてきた。来賓の方々にはグジャラート州政府代表やムンバイ総領事館の領事もおられ、緊張する舞台だった。しかし今日のスピーチは３０分もあり、緊張の度合いは前回の比ではない。セリフを全て覚えることなどできないので、要点だけまとめ、言い回しは自然に任せるしかなかった。

会場に入るとモティの姿を探し「おー、来てくれたんやね」と声を掛けた。

「マルティバさんもいますよ」とモティが言う。マルティバさんは相模工業の総務を担当している女性で、裕福なインド人によく見られる樽のような姿が愛嬌ある。日本語を熱心に勉強していてジャパン・フェスティバルのセミナーにも毎日顔を出している。知っている人がいるというのは心強い。

壇上に上がり席に着く。紹介を受けて起立し花束を受ける。今日のセミナーは講演者が２人いて、スーツをびしっと決めたターバン姿のインド人が先に話すことになった。ター

バンを巻いているのはインド北部に多いシク教徒である。日系の製造メーカーの役員として活躍されておられるようだ。日本でも仕事をしていた経験があり、時折混ぜる日本語も非常にこなれている。日本はハイ・コンテクスト社会でインドとは社会構造が違うというのを、パワー・ポイントを使いながら上手に説明しているのが印象に残った。

３０分以上が過ぎ僕の番になった。演台の横にカバンを置きマイクに向かった。会場内は百名以上のインド人がいるだろうか。逆にこれだけの人数になると怖いものが無くなる。モティとマルティバさんの座っている位置を目で確認し、自己紹介の後こう話し始めた。

「ちょうど今月のはじめ、多くの日本人駐在員と同じように私も日本に帰国し、家族と新年を迎えました。日本人にとって正月は特別なものです。インド人にとっての『ディワリ』のようなものかもしれません。

正月は新聞も特別になります。普段の3倍ほどの分厚さになった紙面には各紙いろんな特集を組んでいます。

今日は、そんな特集の一つについて話したいと思います。

京セラの稲盛和夫さん。

日本を代表する企業の経営者、現役のカリスマ経営者です。創業から現在までを振り返って紙面でこんなことを言っています。

『戦後は貧しさからの脱却と豊かになりたいという思いでやってきた。そしていいモノを作るために昼夜なく努力してきた』

ここまで話すと、横に置いたカバンからもう一つ新聞を取り出した。

「こちらはインドのＩＴについて書かれた記事です。ＩＴ大国と言われるインドでもインターネット利用者はまだ人口の2割にしか過ぎません。公立学校では生徒が学ぶのに十分な台数のコンピュータが入っていないということが書かれています。私の家のＷＩＦＩも通信速度は遅く動画はしょっちゅう止まります」

言葉を切る。しばらく会場を見渡す。そして言う。

「私はアーメダバードで一年しか暮らしていませんがそれでも感じることがあります。

それは、インド人自身の手で、自分たちの生活を向上させていく余地がまだまだあるということです。

巷の電気店で売られているトースターやアイロンでさえ、ほとんどが中国製でインド製は質量ともにまだまだです」

電化製品だけではありませんと言って、僕はカバンからパック入りジュースを取り出した。これから何が起きるんだろうと聴衆が少しざわついた。

「これは僕が毎日飲んでいるオレンジ・ジュースです。1リットル入りのパックで、インド国内で作られ、どこのスーパーにも置かれています。でも、見てください。」と言って四角いパックの端を指さした。

「ここがへこんでいるでしょう。こういうのはしょっちゅうです。さらにふたが固く開けるのに力がいる。ふたを開けてから中身を出すのに、シールを引っ張り剥がさないとだめなのですが、これもよく失敗して中身が飛び出る」

と言ってふたを開けシールを引っ張り出した。思った以上にスルッとふたが開き、シールを引っ張り剥がす時も中身が飛び出なかった。少し悔しいなと思いながら、

「今日はスムーズに行きました。でもこの商品自体に改善する点はまだまだあると思います。そして製造過程か、流通段階か、製品陳列時か判りませんが、へこんだ商品を無くすための改善余地があります」と言った。

僕が何を言いたいか、みな少しは判ってくれるだろうか。

「私はいま会計事務所に勤めています。クライアントの会計監査や税務申告を行うのが私たちの仕事です。これにはクライアントから必要な資料をタイムリーに出してもらわないといけません。しかし何度も依頼しても資料が出てこなかったり、依頼したのと違った資料が出てくることがあります。すると予定期日までに業務が終了しなくなります。

これはクライアントに非があるのでしょうか?どうでしょう?」

会場の顔を見渡す。一つ深呼吸をする。

「必要な資料をクライアントに十分理解してもらうことが私たちの役割だと思っています。クライアントが理解するまできっちり説明することが会計士の仕事です。

私たちの属する産業においても改善していくことはまだまだあります。

皆さんご自身のフィールドではどうでしょうか?自分の作っている製品あるいは仕事のやり方はどうでしょうか?どうすれば相手がもっと喜ぶのでしょう?

私も含めここにいる皆さん一人一人が、それぞれ置かれている場所で努力していけば、インドにより豊かな生活がもたらされるはずです。冒頭で紹介した稲盛さんの言葉は、決

してインドから遠く離れた無縁の世界の話ではないと私は信じています。

今日はありがとうございました」

拍手のなか席に着く。本当に言いたかったエッセンスは話せたんじゃないかと感じた。スラスラと言葉が出ず、こんな言い方で伝わるのかなと思う表現もあったが、気持ちは伝わったと思う。

セミナーが終わると、モティから「何でカバンを持って演台に行くのかとヒヤヒヤしましたよ」と嗤われた。

「言葉が拙いからな。新聞やらジュースやらで誤魔化さなあかんねん」と言って僕も嗤っていると、お久しぶりですと海原さんが向こうからやってきた。

「海原さんも聴いてたの？」と訊くと、

「今日が日本語教室の最後の授業で、さっき終わったところなんですよ」と返事が返ってきた。

もうそんな時期だったかと思った。

海原さんは青年海外協力隊として国際協力機構（ＪＩＣＡ）から日本語教師としてこここＡＭＡに派遣されてきている。これまで平日の夜間と土日に、大学生や社会人向けに様々な日本語の授業を受け持ってきた。国際協力機構はこれまでインドの大都市に日本語教師を派遣しているが、アーメダバードに派遣された日本語教師は海原さんが第一号である。インドでの活動期間は1年弱と聞いていたが、もう日本に帰る時期だとは思わなかった。

「海原さんが帰ったら、またアーメダバードの女子率下がるじゃないですか」

モティの言葉に大嗤いする。

「日本でどうするか決まってるん？」と訊くと

「とりあえず実家の広島に帰って、それからどうしようか考えます」と海原さんは言った。

「じゃあ、何かカキの佃煮でも送って下さいよ」とモティが言うので、広島イコール牡蠣って発想が安直なんだよと返して、またみんなで大嗤いした。

アーメダバードに来てもう一年が経とうとしている。これまでも、アーメダバードに新たに来る人を迎え、アーメダバードから帰っていく人を送り出してきた。海原さんは休み期間以外平日もずっと授業を受け持っていたので、「たむら」に来る機会はあまりなかった

が、最初にたむらに行ったときに一緒になったことを思い出す。ＡＭＡの授業で話をさせてもらったこともいい思い出になりましたと感謝の気持ちを伝えた。

これから生徒たちとのお別れ会に向かう海原さんに「まず日本に帰ったら、美味しいもの食べて、温泉でも入ってゆっくりしてくださいな」と別れの言葉を投げる。こないだモティの家に集まってお好み焼パーティーをした時、冬場なのにシャワーのお湯が出なくて大変なんですよと言ってたっけ。そんなインドの不便さとももうお別れだ。海原さんは明日の飛行機でデリーに向かう。僕たちが会う機会はもうないだろう。

「そうやって人が出入りして、少しずつアーメダバードの日本人が増えていくんですよね」

モティのつぶやきが、去っていく海原さんを見送る僕たちを何とも言えない寂しさで包んでいた。

## 第１２章　２月　ホワイト・デザート

地図でグジャラート州を眺めてみると面白いことに気づく。一つは川が運んで海に堆積した土砂である。グジャラート州に大きく切れ込んだカンバト湾の沿岸地帯は、地図の上で Mud（泥）と表記されていて、これは空からもよく見える。ムンバイ出張時に機上から眺めると海が茶色に染まっているのがよくわかる。乾季には水位が下がり堆積した土砂が顔を出す。

もう一つ気になる土地は Rann と呼ばれる塩性湿地帯であり、グジャラート北西部のカッチと呼ばれる地方に行くと見られる。Little Rann と呼ばれる小湿地帯でも、南北５０キロ、東西１百キロの広さがある。パキスタンとの国境まで続く大湿地帯になるとさらに数倍の大きさになる。雨季には水に浸かってしまう湿地帯が、乾季の始まりと共に水が引いていき、乾季の終わりとなる冬場は辺り一面に巨大な岩塩層が出現する。アーメダバード近郊でも、海に近いところだと乾季は水が干上がって塩が白く吹き出ているような土地を見かける。「ホワイト・デザート（白砂漠）」と呼ばれる真っ白な土地がどこまでも続くさまをどうしても見てみたかった。

カッチは少数民族が鏡片を縫い込んだカッチ織という伝統織物でも有名である。カッチ旅行者の多くは、カッチ織を求めて少数民族の村々も訪れたりするようだ。

公爵とモティにカッチ織に興味ある?と訊いてみると、案の定「ない」と返ってきたので、旅の主目的をホワイト・デザートに絞って週末のカッチ行きを計画した。

朝６時まだ夜が明けないうちにアーメダバードを出発する。州道７号線をひたすら西へと向かう。州道と言っても片側２車線ある立派な道路で、改めてグジャラート州の道路の良さに感動する。朝が早いので車も少なく快調に飛ばしていく。

車のハンドルを握るのはもちろんヨシズミだ。

２時間ほど走ったところで「HONEST」と看板が掲げられたドライブ・インの駐車場に車を入れ休憩する。

「さっきも見たけど、郊外にもオネストが出店してるんやね」

黄地の看板に赤文字で HONEST と書かれた店舗はアーメダバード市内にいくつもある。デリーやムンバイでは見かけないので、アーメダバードを中心とした飲食チェーンだと思う。事務所の近くにもあるのでたまに昼食を取ることも多い。インドの軽スナックあるい

はファスト・フードといったところか。
「じゃあまたドーサでも頼みますか？」とモティが呟く。ドーサと同時にチャイも４杯注文する。
ドーサはどこで食べても当たりはずれがない。それぞれ思い思いに引きちぎっては口に入れていく。２杯目のチャイを飲みながらモティに力説する。
「ドーサもいいけど、『ハッカ・ヌードル』も結構いけるで。オネストのはちょいピリ辛やけど」
「ハッカ・ヌードルって、名前はよく聞くんですけど、まだ食べたことないんですよね」
ハッカ・ヌードルはインド中華のメニューの一つである。ハッカという言葉はミントのハッカではなく、中国福建省の客家から来ていることを説明する。塩味や醤油味など店により違いはあるが、焼きそばに近いので麺類が食べたくなった時は重宝する。
「あとマンチュリアンとかあるじゃないですか。あれは何ですか？」
マンチュリアンは満州を意味する。イメージは肉団子の醤油餡かけである。肉団子の代わりに擂った大豆を丸く固めたものに醤油餡をかけたものが出てくる。
「だからメニューにマンチュリアン・フライド・ライスと書かれていたら、餡かけチャーハンになるわけ」
シェチュワン（四川）と書かれてあればスイート・チリ風味になる。四川料理のエビチリからイメージしたのだろう。日本にも本場中国にはない中華丼というメニューがある。インド人のイメージで作り上げたインド中華は、インドのどんな町に行っても大概食べられる。

休憩を終え僕たちは再び車に乗り込んだ。やがて州道７号線は国道８号Ａ線と合流し、Little Rann が最もくびれた部分を通過して行く。道路脇には巨大な塩田が広がっている。長さ数十メートルに区切られたいくつものマス目に濃度の高い海水が入っている。いくつかのマスでは巨大な塩のかたまりが山となり端に寄せられている。塩の山がいたるところに見えている。
この塩の山をかき集めてさらに大きな塩の山が出来上がっている。高さは２０メートルもあり、手前に停まっているトラックの荷台よりも遥かに高い。コンベアが伸びて塩をトラックの荷台に流し込んでいる。日本では見ることのない光景である。
「あれは工業用の塩かもしれないね」と公爵が言う。野ざらしになった塩を見ていると

そうかもしれないなと思う。
この近辺は町もなく生活の匂いがまったくしない。どこまでも続く塩田、そして塩田の上に立つ送電塔、さらに奥には3枚羽の巨大な風力発電塔。人間が暮らすには厳しい土地で、そういった用途しか使い道のない土地。

Little Rann を越えるとやがて大きな分岐点へと出る。右に行けばパランプールの町を経由してラジャスタン州へ。左に行けばインド屈指のムンドラ港やカッチ地方最大の都市ブージへ。ブージの先には目指すホワイト・デザートが待っている。
ブージは空港もある人口15万人の町である。アーメダバードからの便は飛んでいないが、デリーやムンバイからの定期便が運航している。
2001年、カッチ地方を巨大な地震が襲い、市内のほとんどの建物は被害を受けた。市内の建物の大半は震災後に建て替えられたものだ。地震がめったに起きないインドでは、建物の構造は極めて簡単で、壁はただレンガを張り付けてあるだけである。地震が起きると、たちまち屋根壁は崩れてしまう。
市内は高層アパートのような高い建物もなく、いたって平凡な地方都市といった風情である。ブージ市内を走っていて、マクドナルドやサブウェイなどのファスト・フード店は一切見かけなかった。ここで暮らすのは相当厳しいでと公爵が言うが、買収したインド企業に駐在している日本人エンジニア数名が生活していると聞いていた。
僕たちは今夜泊まるブージ市内のホテルにチェック・インし荷物を預けた。
「ホワイト・デザートに行く前にどこかでお昼食べときます？」モティが訊く。
ガイドブックを開いて調べる。
「3軒載ってまっせ。まずヌーラニ・マハル。チキンとマトンの北インド料理が自慢。次、ホテル・スジャータ。インド中華もあるけどベジだって。で、最後がガイドブック一押しのイエロー・チリ。あっ、これはピュア・ベジだ」
ピュア・ベジとは卵や牛乳を使わない正真正銘のベジ料理を指す。ジャイナ教徒が経営しているレストランだろうか。個人的には好んで入ろうと思わない。
「じゃあ必然的に最初のヌーラニ・マハルに決まりですね。どの辺ですか？」モティが訊ねる。
「さっき通ってきたムスリム・エリアの辺りやね。ホテルからちょっと戻ったくらいやわ」

店の前まで行くと、鶏肉を捌いて油で揚げている様子が見て取れた。

「今回の旅行は毎食ベジを覚悟してたけど、ノンベジもあるもんですな」

グジャラートはインドの中でも食に保守的なところなのでベジが多いのだが、アーメダバードはまだ都会なのでノンベジも食べることができる。ところが地方都市に足を踏み入れると、基本ノンベジはないものと覚悟しておかないといけない。

注文したのは、エッグ・カレーとマトン・カレーにナンとピラフ。プラスチックのボウルに入った北インド風のカレーはいずれも油が浮いている。

「まあこんなもんやで」と言ってちぎったナンにカレーをつけて食べる。日本のカレーのように野菜が溶け込んでマイルドになるということはない。油にスパイスを溶かし素材を炒めて煮込んだ料理なので、味が尖っているのが普通である。それでもベジのカレーよりはノンベジのカレーの方が、タンパク質から来る旨みを感じられる気がしてならない。

「じゃあそろそろ行きますか」公爵が言う。

少し遅めのお昼だったので、食べ終わるともう2時を回っていた。車に乗り込んでこれからまた走らないといけない。

ブージの市街を離れ車は北へと向かっていく。すぐに灌木や土だけの荒野が広がる。9月に旅行したジャイサルメールに似て、まったく何もない土地である。1時間も走らないうちにチェック・ポイントに到着する。丸壁に三角錐の屋根を乗っけたこの地方独特の住居が点在している。クラフト・ショップではカッチ織などの伝統工芸品も売られているようだ。

ここから道は分岐し、西へ向かうとドロド方面、ホワイト・デザートのメッカである。ドロド方面に向かうには、チェック・ポイントで役人に入境証を発行してもらわなければならない。インドにはパスポートや正規のビザを持っているだけでは入れない場所がいくつかある。多くは中国やパキスタンとの国境紛争地帯である。このエリアは国境紛争にはなっていないが、パキスタンとの国境に近いためチェック・ポイントが設けられているのだろうか。役人の作業は緩慢として緊張感がない。僕たちが払う入境料しか彼らの関心はないのだろう。

ドロドに向かう前に先に行っておきたい場所があった。このまま道をまっすぐ北に４０キロ行った「カラ・ドゥンガル（黒山）」というところである。標高４５８メートル、カッチ地方で一番標高がある場所である。ここからホワイト・デザートを見下ろしたかった。

ヨシズミの運転する車はすごいスピードで走っているため、３０分でカラ・ドゥンガルの麓に到着した。うねうねとした道を登っていくと山の頂近くの駐車場に到着した。

駐車場近くで手ぐすね引いて観光客を待っているラクダ使いたちの誘いをはねのけ、僕たちは頂上へと歩いていく。ほんの２百メートルほども歩けばそこは頂上。地上を見下ろせば異様な光景がそこに広がっていた。

僕たちが登ってきたのと反対側には山裾が広がり、その先にはただ地面が広がっているだけだった。地平線の先まで山らしきものは一切見えない。頭上の空は青く澄んでいるにも関わらず、地平線あたりの空は茫洋として霞んでいる。

そして何という大地。

地面のすべてが塩で真っ白に見えるのではなく、土に含まれる塩分濃度の差なのか、土の色が勝っているところと塩の色が勝っているところがあり、逆に生々しさを感じさせる。塩が完全に浮き出て真っ白にしか見えない土地が巨大な帯のようになっている。人間の住む土地ではない。それどころか生物の気配すら感じない。

山の上に立っているこの視界から数キロ先の地面に自分が立ってみる姿を想像する。辺りは真っ白で、生物の気配がなく、音すらしない場所。死後の世界という表現しか思いつかない。これが何十キロも先のパキスタン国境まで続いているかと思うと、恐ろしさを感じる。しかしまた、早く地面の上に立って、地面がどんな具合なのか確かめてみたかった。

僕たちは再び車に乗り込み、山を下りていく。今度はチェック・ポイントを西に逸れ、ドロド方面へと向かう。ドロドに着いたのは夕方６時前だったが、まだ日は明るかった。

ホワイト・デザートへと続く道を進んで行くと、荒野の中に壁で仕切られた土地が現れ、丸壁に三角錐の屋根の建物がキノコのようにニョキニョキ林立している。チェック・ポイントでも見た伝統的な住居だ。ヨシズミに「あれは？」と訊くと、観光客用の宿泊施設だと言う。よく見れば壁にはエアコンの室外機が取り付けられている。公爵に、

「こっちに泊まった方が良かった？」と訊くと。

「完全にお断り」と即座に返ってきた。前回のジャイサルメール旅行で僕たちは屋根も何もない砂漠の中で一夜を明かしたが、ワイルドさはもう腹いっぱいという感じか。

ホワイト・デザートに入るところでパスポートと入境証を見せる。駐車場には大勢の車で一杯だった。

駐車場から先、一本の道路がさらに北に伸びているが、車を乗り入れるには特別な許可

が必要なので、大半の観光客は駐車場から歩いていく。５分も歩かないうちに地面の土色が段々と消えていき、塩の白さが露わになってくる。

カラ・ドゥンガルから見た時は「雪の平原」みたいなものを想像していたのだが、ホワイト・デザートにいざ降り立って見ると、とんでもなく広い運動場に石灰を撒いたという表現が近いことが判った。ところどころ地面の上に土が見えていたり、石が落ちていたりする。

地面に触れて、塩の結晶を掴んでみる。ホワイト・デザートは食塩のようなサラサラの塩を敷き詰めた感じではない。小さいもので2、３センチくらいの岩塩の塊が散らばっている。１０センチ以上の大きな塊になっているものもある。結晶を触ると湿っぽい。地面が水分を含んでいる証拠だ。

「ちょっと掘ってみよ」と言ってモティが運動靴の先で地面を蹴りはじめた。３センチも掘ると土が顔を出してくる。

「南米のウユニ塩湖みたいなのを想像してましたけど全然違いますね」とモティが言う。

「だってここはインドだぜ。動物の糞もそこらじゅうに転がってるぜ」と公爵が自嘲するように返す。

そう、ここはやはりインド。幻想的な風景の中にも観光客を乗せるラクダやロバがいて、商売人が熱心に客引きをしている。家族連れのインド人があちらこちらで騒がしく話している。僕たちはできるだけ喧騒から離れようと遠くまで歩いた。

地上からだと３６０度真っ平らな土地にただ白い地面が広がる様しか見えない。距離感というものがまったく掴めなくなる。僕たちを除けば、ただ落ちていく太陽だけがこの世で動きのある唯一の存在のように感じる。

太陽が沈み頭上に月が現れる。満月まであと数日はある。それでも薄暗くなりかけた塩の大地を月が照らすさまはやはりこの世のものとは思えない。ラクダやロバは地面に打たれた杭に繋がれる。動物たちはどんな思いで、生物の気配のない静寂な夜を毎日過ごすのだろう。

「帰りますか」モティが呟く。

ブージの市街に帰りバイクと人が溢れかえる街中に出よう。牛が横で寝そべり裸電球の灯る屋台の群れを横目で見ながら小ましなレストランを探そう。いくつかのカレー料理を頼んでシェアしよう。ハッカ・ヌードルもあるかもしれないな。公爵、モティと今日一日の愚痴をいっぱい言い合おう。酒はないので炭酸でも飲むか。僕たちの一日の締めが待っ

ている。

## 第１３章　３月　別れ

アーメダバードは晴天が続きせっかくの快適な気候を楽しめるというのに、２月は１月にも増して南インドへの出張が増加した。ベンガルールやチェンナイには毎週のように行き、ハイデラバードも初めて訪れた。ハイデラバードでは旧市街を訪れる機会がなかったが、新市街にはＩＴ企業やコンサルティング企業のオフィスビルが建ち、片側４車線もある高速道路は非常に快適だった。高速道路を走る車窓から見える風景は岩ばかりで、どこか違う惑星にいるような感じを覚えた。気がつけば２月のうち１４日間をアーメダバード以外の町で過ごしていた。土日はアーメダバードに戻ってきていたので、平日に絞ると他の町で過ごしていた日の方が多い。

こんなにも出張が増えてしまったのは、セミナーを開催していたことが一つの理由としてある。

インドでは２月に中央政府が予算案を出す。予算案には４月から適用される各種税率や税制変更案も盛り込まれており、日本の税制改正に性質が近い。正式には国会審議を経て確定するのだが、与党が圧倒的な議席を占める国会では予算案はほぼそのまま承認されるため、予算案の中身をいち早く知りたいというニーズが強い。

このため、予算案が発表されると会計事務所、弁護士事務所、銀行などは一斉に予算セミナーを開催する。どこが最初に開催するかという競争になっている感もある。英語で作成された予算セミナーの資料を同僚と手分けしながら土日を潰して翻訳し、セミナーに向けて理解するのが毎年の恒例行事となっている。印刷した資料を携え各地の事務所でセミナーを開催する。

しかしセミナーの開催だけでは出張が多いことの説明がつかない。

僕たちの仕事は人に相談されてなんぼのところがある。そしてどうしても顔を合わせて相談を受けなければならないことも多い。一度顔を合わせると次からは電話やメールでも大丈夫だったりするが、それでも大事なことはやはり顔を合わせるのが一番だ。

ベンガルールでもチェンナイでもそういったミーティングを相当やった。アーメダバードと違うのは、日系企業進出の歴史の長さと数の多さだ。アーメダバードでは、会計監査や税務申告の制度説明など基本的な相談事項が多い。企業が進出して間がないからだ。南

部では相談ごとの種類も変わってくる。計画中のビジネス・モデルに移行した場合、間接税がどう影響してくるかとか、前期よりも効率的に監査を進めるためにはどうしたらいいかなど、より深くこなれたものになっているという印象を受ける。

出張中はクライアントとの会食も増える。ベンガルールではワールド・トレード・センターという最先端エリアのホテルでサービスも申し分ない夕食を頂いた。敷地内にホテル、ショッピング・モール、オフィス、アパートが入っていて、ここですべてを済ませることができる。日本人駐在員家族も多く住んでいるらしい。敷地から一歩外へ出れば屋台や商店の喧騒が渦巻く世界が待つ。余りの違いにこれでいいのだろうかと感じてしまう。

会食を楽しむのは申し分ない。出張中はホテル代も会社持ちで自己負担もまったくない。しかしホテル暮らしにも飽きる。飽きるどころかあまりに多い出張からくる疲れで、一時は寝込んだくらいだ。出張が何日か経つとアーメダバードの素朴な生活に戻るのが心待ちになっていった。

やがて、アーメダバードにやってきて丸一年が過ぎた。

しばらく経ったある日、僕はデリー事務所の定例会議に参加していた。定例会議はＥＹインドの日本人が毎月集まり、活動成果を報告したり、日系企業の動向について情報交換したりしている。ＥＹインドには僕を含めて日本人が５人いる。僕はアーメダバード、早川さんはムンバイ、それ以外の３名はデリーだ。

会議の前に僕はインド人の上司に呼ばれて別室に入った。

「この前言った異動の件だけど、早めに南部に移れるか？」

ある程度は予想されていたこととはいえ、はっきり言われたのはかなりショックだった。

「アーメダバードから出張するんじゃなくて、南部に移れってことですか？」

「出張も費用が掛かるしな。もちろん何かある場合はいつでもアーメダバードに飛んでくれたらいい」

返答を渋っていると上司はこう言った。

「今のうちの現状を見て、どうするのが一番いいと小林さんは思う？」

そう言われるとこう答えるしかない。

「まあ、南部に誰も日本人がいないのはうちにとって良くない状況ですね。誰かが行くしかないと思います」

「そうか。場所はベンガルールとチェンナイどちらがいい？」
「個人的にどちらがいいとかは無いです」
「じゃあ、小林さんはチェンナイで考えといてくれ。ベンガルールは別の人を当てようと思う」
「お任せします」

上司との話を終えて、いよいよ来るべきものが遂に来たなという思いがあった。アーメダバードのマーケットは非常に小さい。そこに日本人を常駐させるのは合理的ではないというのも頭では理解できる。
「でも、そんなの判っていてアーメダバードに日本人を配置したんじゃないのか？」
という思いも去来する。アーメダバードでＥＹが初めて日本人公認会計士を置きましたという触れ込みはそんなに軽いものだったのか。
うちの事務所がぎりぎりの人数で回しているのは知っている。他の事務所もそうだろう。だから営業的に考えてアーメダバード以外に人を置くべきということも判る。僕自身もＥＹインドに雇用されている身であって、自分勝手なことを言えるわけではないことも判っている。つまり結論はすでに出ているのだ。
それでも、アーメダバードに実際に暮らしている者としては、「単身だし荷物をまとめたらすぐにでも移動できるだろう」という事務所の安易な考えに対し、どうしようもない割り切れなさが残った。
こんな風に考える原因も判っている。アーメダバードの人間関係にどっぷり浸かってしまったからだ。公爵、モティ、細江さん。仕事とは関係のない、しがらみのない付き合いがどれほど自分の中で大きなものとなっていたか改めて思い知った。
でもそれは事務所がたまたま僕をアーメダバードに配置したからそうなったこと。仕事あってのことなのだ。だから仕方がないのだが。

これまでで一番暗い定例会議を終えた翌日、僕はアーメダバードに戻った。その日はホーリーだった。一年前、公爵と公園で子供たちに追いかけられたなあと思いだした。緊急の話があると嫁さんに連絡し、スカイプでデリーでの会議のことや自分の思いを語った。
「でもまあ先はどうなるか判らんよ」
妻はそう言った。

感情のままアーメダバードに固執するのがいいのか、流れに任せてチェンナイに移動するのがいいのか本当のところ誰にも判らない。
「そやな」と自然に言葉が出てきた。
「日本人会に迷惑かけんようにだけするわ」と妻に言った。

妻と話した後、すぐに公爵とモティのところに向かい、デリーでの会議のいきさつを話した。
「それでいつ頃ですか？」ビール片手に公爵が言う。
「できるだけ早くとは言われてるんですけど。引越の準備もあるし、４月頭くらいになるんじゃないですかね」
うわっと、モティが声を荒げる。
「アーメダバードがだんだんしょぼくなっていきますよ。江本さんたちも３月末で日本に帰るらしいし」
そうなのだ。「たむら」や飲み会でずっと一緒だった江本さんが任期を終えて日本に帰ってしまうということを僕も聞いていた。音無エレクトロニクスでは他にも日本に帰る駐在員が２名いると聞いている。
「モティも最近はデリーやベンガルールに出張してるじゃん」ふてくされた顔つきになって公爵が言う。
「ここから逃げ出せないのは俺だけだよ」
さらに投げやりな感じでこう言った。
「まあジェトロが日系企業をもっと呼び込んでくれればいいだけのことなんだけどね」

ただでさえ寂しがり屋の公爵だ。この３月いろんな人が出入りしていく中で彼の今の気持ちはよくわかる。異動の話を公爵に言った時どう反応するかが心配だった。関西人なのに面白いことの一つも言えず、考えあぐねた結果月並みな言葉しか出なかった。
「休みにチェンナイに遊びに来てくださいよ」
すると、
「あっ、もうチェンナイ人？アーメダバードを去る人に飲ませるお酒はありません」
公爵はそう言ってウィスキーを一気に飲み干した。

＊＊＊＊＊

３月も終わりに近づくと暑さの予兆のようなものを感じるようになる。朝晩は心地よいものの、日中日差しの下にいると汗が噴き出してくる。まだ耐えられるレベルだが、あと一カ月もすれば耐えられないものになる。

汗を拭いながらＳＧハイウェイの交差点付近に停車している大型バスを探していた。今日は音無ベターライフにお邪魔して工場見学会を開催することになっていた。日本人会として今年度最後の行事となる。

バスが停まっているところまで来ると、すでに来ていた細江さんにおはようございますと挨拶した。

「チェンナイ異動の前で忙しいでしょうけど、今日一日頼みますね」

「それで最終的に参加者は何人になりました？」

細江さんや相川さんにはチェンナイ異動についてすでに話してある。

「昨日までの申込は１３名です。飛び込み参加は無いと思いますけど」

「じゃあ、バスも余裕ですね」

今日僕たちが乗り込むバスは、会社の従業員送迎用のバスを細江さんが手配してくれたもの。従業員を今朝工場まで送り届けてから終業時間までの間は使われないので、工場見学のためにガソリン代の実費負担の条件で貸して頂いた。４０人以上乗車できるバスなので、ゆったりと座れる。

案内に１０時集合と記していたのだが、今日は割と早く参加者が集まってくる。江本さん、トシさん、公爵、モティ、トキボー。参加予定者全員がバスに乗り込むとＳＧハイウェイを北へ向かう。カロルの町を抜け小一時間で音無ベターライフのあるカディにたどり着いた。

正門でバスから降りると、坪井社長自らの出迎えが待っていた。そのまま応接室に通される。まず日本人会を代表して細江さんから挨拶が行われ、参加者は坪井社長から会社の概要説明を受けた。

音無ベターライフはここカディでエアコンを製造している。ここからインド全土の販売拠点に向けて月に７万台のエアコンを出荷している。インド国内ではまだ１４％のシェアといったところなので、まだまだ売上を伸ばしていく途上だ。

１１万平米の敷地には、第一工場と第二工場の２つが建っている。僕たちがいる応接室は第一工場の方にある。第二工場は建設直後に出火し全焼した経緯がある。幸い閑散期だったからよかったものの、半年の急ピッチで工場を再建し、何とか繁忙期までの稼働に間に合わせた。僕たちは第一工場からいったん外に出て通路を歩き、再建されたという第二工場の中に足を踏み入れていった。

建屋の中は大空間が広がっており、こちらは第一工場と違ってすべてが製造に特化した建物となっている。

部品を組んでいるライン、エアコン本体に部品を組み付けていくライン、品質チェックをしているライン、完成品を梱包していくラインなどがあり、規則正しく動いている。緑色の工場の床に白や黄色の線が引かれ、機械や工具の位置が定められているのも日本の企業らしい風景だ。頭上には大きな電光掲示板があり、今日の生産目標数と現在の生産実績数が一目で判るようになっている。

「４６６プロジェクトと言って、一日の実働時間４６６分を集中して規則正しく動くように頑張っています。それでもまだまだスズキさんほどじゃないですけどね」

向こうは軍隊並で、うちなんかまだ全然及ばないですよと、坪井社長は笑いながら謙遜した。

音無ベターライフの社歴は２０年。特にこの１０年くらいは日本式のやり方をどんどん取り入れ生産現場もかなり日本に近づいてきている。スズキがインドで最初に稼働させたグルガオン工場はすでに３０年の歴史がある。非効率なインドのやり方を変えるには、あるいは規則正しい日本のやり方をインドに根付かせるためにはそれだけの時間がかかるということか。

常時雇用のワーカーが７百人、繁忙期には一時雇用のワーカーがさらに６百人加わる。これらのワーカーに日本のやり方を浸透させるには大変な努力が必要である。単に指示するだけではその通りには動いてくれない。上の者から率先して手本を見せる、目標通りの生産が達成できれば報奨を与えるなどいろんなことを実践している。報奨の品にも知恵を絞る。ワーカーの奥さんや母親が喜ぶもので自分ではなかなか買えないものがいいらしい。例えば一家でいくつも必要になるランチ・ボックスなどはステンレス製の見た目高級なも

のが喜ばれる。ワーカーの数が多いので、贈る品物も市価の半値くらいで調達してくるような工夫をしている。

また先日、創業２０周年の記念コインを発行したのだが、これはスタッフだけでなくワーカーにも贈ったとのことだ。コインに大きさの違いがあるものの経営者から中間管理職、ワーカーにいたるまで同じというのが大事なのだという。そして、同じ目線で見てくれているということをワーカーが感じることが重要なのだと言う。

「第二工場の再建に合わせて、キャンティーン（食堂）もワーカーに近い場所に移動しました」と坪井社長は言う。

キャンティーンで一時に食事ができる人数は３５０名のため、４回に分けてワーカーは食事を摂ることになる。これだけの人数が移動するとなると移動時間も要する。ワーカーにとっては少しでも休憩時間が多く取れる方がいい。昼食休憩が終わりすぐに仕事に取りかかれるのは会社としても好都合である。

第二工場の内部を一通り見終えた後、第一工場の方で用意されていた昼食を頂いた。野菜サラダ、ダル・フライ（豆カレー）、パラック・パニール（ほうれん草とチーズのカレー）、アールー・ゴビ（カリフラワーとジャガイモのカレー）、ジーラ・ライス（クミン・シード入りご飯）、チャパティ（小麦粉を練って焼いたパン）、パパド（豆をすり潰して焼いたスナック）などがブッフェ・スタイルで台の上に並んでいる。

参加者は思い思いに好きなものを取って席に着く。僕も陶器の皿にいくつか料理を盛り付け、トシさんとトキボーの間に腰かけた。

「ねえ、音無さんって毎日こんなの食べてるの？」とトシさんが言う。トシさんはインドの地場の化学メーカーに勤めているので、自社のキャンティーンと比較しているのだろう。

工場見学会のために特別に用意してくれているのでしょうと僕は答えた。

どこの工場にもキャンティーンがあり、家から持ってきた弁当を食べる者もいれば、会社が提供するランチを食べる者もいる。水道光熱費や人件費を会社が持つので、ランチ代は材料実費くらいしか取らないところが多い。従業員の負担は一食５０ルピーにもならないのではないだろうか。

ステンレスやプラスチックでできた四角いプレートの中の仕切りに、野菜の炒めものや、各種カレー、ライスなどを給仕する者が入れていく。メニューなどなくランチ一種類のみ

のところが多い。おかずの内容が毎日少しずつ変化していくくらいである。うちのムンバイ事務所やチェンナイの事務所も職員の人数が多いため、会社が提供するランチを２０ルピーで食べられる。

「そう言えば、小林さんがアーメダバードを離れられるって聞いたんですけど」とトキボーが言った。

「えぇ?そうなの」とトシさんが驚く。

「帰りのバスの中で皆さんに報告しようと思ってたんですけど、そうなんですよ。チェンナイです」

「ほんと?寂しくなるじゃない」トシさんはそう言って、ちょっと水を取って来るわと席を立った。

もうゆっくり話せる時間もあまりないだろうと思い、僕はトキボーに言った。

「トキボーは自分をしっかり持ってそうやから心配せえへんけど、せっかくアーメダバードにおるんやから、ここで思ったことやりや」

僕が残せる言葉はこれしかなかった。

工場見学会の翌日、仕事が終わってから細江さんの家に向かった。細江さんの会社では３月で日本に帰る駐在員が３名いるので送別会が企画されていた。細江さんにチェンナイ異動を告げると、僕の送別会も一緒にやりましょうということになった。

細江さんの家に行くと、音無エレクトロニクスの社員以外に公爵、モティ、滝丸君、九鬼君たちが呼ばれていて、１３名の大所帯となった。長テーブルの上には、おでん、天ぷら、野菜炒めなどが所狭しと並んでいる。ビールで乾杯し料理に箸をつけていく。

「細江さんのお手製おでんを食べるのも最後ですね」と僕は言った。

日本人会の打ち合わせなどで公爵たちと何度も細江さんの家に呼ばれたが、おでんをよく頂いた。細江さんのおでんには冬瓜のような野菜が入っている。これがよく出汁に浸みている。アーメダバードにある食材で何とかやろうという工夫である。

「漬物と納豆もありますよ」と言って細江さんが冷蔵庫から容器を引っ張り出す。白菜は割高だが一部のスーパーに行けば手に入る。塩をすり込んだ白菜をバケツに一枚一枚重ねて寝かせたものである。納豆の方はもう少し手が込んでいる。インドでも容易に手に入

る大豆を６時間水に浸し、圧力鍋で蒸して、前回作った納豆をベースにした納豆菌溶液を混ぜて３０時間発酵させたものである。粘り気もあり日本で食べる納豆とまったく違いがない。

インドにある食材だけで日本とまったく同じ味が再現されている。思えばアーメダバードで一番美味しかったものは、細江さんの家で食べたものだったんじゃないかという気がしてくる。

「そう言えばスリランカに行った時に、チェンナイで飛行機の待ち時間がだいぶんあったので、観光ツアーに参加しましたよ。クリシュナのバターボールを見てきました」と細江さんは言った。

チェンナイ空港から４０キロほど南にあるマハバリプラムという港町にそれはある。丸い巨大な石が斜面にピタリとくっついていて、今にも転がり落ちそうなのに落ちないという不思議な光景が広がる。

「海が近いのは少し楽しみですけどね」と僕も言った。

「おっ、もう心はアーメダバードにないぞ、この関西人」と公爵が囃す。

「違った。チェンナイ人だった」

「南さん、僻み過ぎ」とモティが嗤ってたしなめる。

僕が住んだこの１年少しでも、アーメダバードへの人の出入りがそれなりにあった。長い人で３年くらい、研修など短期で来ている人は１年より短い期間で日本に帰る。つまらないと思いながら過ごす人もいるだろうし、もっと居たいという人もいるだろう。残念だけどアーメダバードで精神を病んで日本に帰った人も何人か見てきた。アーメダバードで何をしてきたか、何を見てきたか、誰と会ってきたかで、アーメダバードに対する印象は違ってくるんだろうなと思う。

正直言って僕の場合は、日本人会しか語るべきものがない。本当は、本業の監査や税務でもっと日系企業に関わりたかったのだが、新規の進出企業はほとんどなく、新規顧客を開拓することはできなかった。アーメダバードが発展していくのは間違いないけれど、少し早かったのかもしれない。

それでも、日本人の組織がなかったところに日本人会ができ、それに関わることができたのは大きな喜びだった。総会で江本さんが言っていたように、そんな機会に立ち会うことは人生の中でもそうはないだろう。

チェンナイに行けば、酒も飲めて肉も食べることができていいでしょうと言われるので、

そうですねと話を合わせているが、本当のところチェンナイでまた新たに人間関係を築いていかなければならないことに面倒さを感じている。７百人の日本人社会の中で新参者として入ってゆくことがどれほど億劫か。それに比べたら、アーメダバードでベジ料理を食べ続けることの方がどれほど気楽か。でもここに安住するわけにもいかないし、求められるところに行って、そこで慣れていくしかないんだろう。チェンナイに行って僕は何を見つけるのだろうか。

アーメダバードを去る前日、モティから「最後のランチはどこがいいですか？」と訊かれていたので、３月最終日のお昼はフィロソフィー・カフェに集まることにした。ホテルで食事するのもいいが、何だか寂しくなってしまう。アーメダバードの最後の日もいつもと同じ空気で昼食を食べたかった。

少し日差しがきつい１２時過ぎ、ＳＧハイウェイに続く大通りをグルモア・モールの奥で折れ、袋小路のレーンへと入る。突き当りのガラス扉を押し開けると連中が待っていた。スキンヘッドの女性オーナーが、ハロウといつもの調子で水入れとコップを生成りのテーブルの上に置く。台に置かれたコーヒー・マシン、白壁に造りつけられた木の棚に並ぶ食器類、側壁に飾られた昔の人の写真。

いつもと変わらない空間。

チョークで手書きされた黒板はこう言っている。

「A Library is a Hospital for the Mind」（図書館は心の病院）

「さて、今日は何にしますかね？」モティが言う。

ここではボロネーゼしか食べてないなと苦笑いする。あとはゴルフの帰りに一人で寄って食べたカプレーゼくらいしか記憶にない。

公爵もいつも通りボロネーゼを頼むようなので、結局モティも僕たちにつられて同じものを注文した。

かなり茹で気味の麺に擂りゴマがたっぷり振りかけられた大豆ボロネーゼが運ばれてくる。

「昨日引越業者が荷物を運び出して行ったので、残りはスーツケース一つだけですわ」と嗤った。２人には明日朝の飛行機でアーメダバードからチェンナイに飛ぶことを告げて

いた。昨夜は同僚のラジーブの家で夕食をご馳走になりながら別れを交わした。残っていることと言えば、冷蔵庫に入っている最後のビールを飲むことぐらいだ。

「まあ、同じインド国内ですからね。それほど距離感がないかもしれませんよ。同じアーメダバードでも遭わない奴はまったく遭いませんからね」とモティが言う。

「こないだもビックリしましたよ。お客さんの携帯電話に普通に掛けたら、『いま蒲田にいます』って言うんだもん」

「まあな。僕なんかも携帯に８１とか映ったら何事かなと思うもんね」と僕も言う。日本からの国際電話の場合、国番号の８１が頭に表示される。

忙しい人だとアーメダバードからデリーや日本に頻繁に出張している場合も多い。でも、ベースがアーメダバードであれば、戻った時に集まって飲んだりすることができる。チェンナイにベースを置いてもアーメダバードに出張する機会はあるかもしれないが、いつのことになるか判らない。

「このボロネーゼ食べたくなったらいつでも戻ってきてくださいよ。チェンナイはもっと旨いボロネーゼあると思うけど」そう言って、公爵はフォークいっぱいに絡めたパスタを口に運ぶ。

「そんなにしたらヒゲにつきまっせ」と僕は嗤った。

## 終章　5月　定時総会

僕はいまチェンナイからアーメダバードに向かう飛行機に乗っている。日本人会の定時総会に出席するためだ。チェンナイに越してきてからアーメダバードには一回も行っていない。1ヶ月半ぶりのアーメダバードはどんなだろうか。

窓から見えるのはデカン高原の重なり合う赤茶けた色の大地と薄緑色の大地。時折湖らしき水のかたまりが現れるがそれ以上に枯れ川が多い。山々の緑は日本のような濃さがなく山の地肌が透けて見える。

チェンナイで暮らし始めて1ヶ月が過ぎた。新しいアパートや事務所にも慣れてきたところだ。

チェンナイは緑が多い。

高温多湿な気候のため樹木の成長が早く街路樹がこんもり繁っている。樹木が空を覆い天然のトンネルとなって影を作り出している。庭に植えられた椰子の木でさえも高々と成長し、いたるところでバナナが青い実をつけている。アーメダバードでは見なかった風景だ。

そして海が近い。

地図を見ても判るように、チェンナイから南一帯はコロマンデル海岸が港町マハバリプラムまで５０キロも続き、その間に無数のビーチが広がっている。市街から少し外に出ると海沿いにリゾートホテルが建ち並ぶ。家の近くのビーチでは夜になると夜風に当たる地元民で賑わいをみせる。

新鮮な魚を食べさせるレストランもある。店の中の一角には、細かく砕かれた氷の上にいろんな種類の魚やエビが敷き詰められている。ほどよい大きさのバターフィッシュを選ぶ。半分はグリルして塩でシンプルに味付けをし、残りは醤油味の餡かけ煮込みにするといった感じで楽しむことができる。

日本食レストランや韓国料理店も市内に何軒もある。お互い競争し合っているので手ごろな価格で味もまずまずだ。日本人経営のラーメン屋では日本とまったく変わらない鶏ガラスープが楽しめる。韓国系のパン屋ではあんパンや総菜パンが売られている。

仕事もかなり忙しくなった。まず以前から付き合いのあるクライアントからの問い合わせがある。さらにチェンナイへの進出に関係して日本からの問い合わせもある。広い市域

に日系企業が散らばっているので一社訪問するにも片道1時間はかかる。
企業を訪問して仕事の話だけでなくチェンナイ生活の話もする。昼食を一緒にしたり、夜飲んだりして話す。定期的に開かれる商工会の集まりにも出席する。こうして徐々に自分の居場所というものを作りつつあった。
ただ、自分の中では思ったほどドキドキ感は湧いてこない。新しい町といってもやはり同じインドということもあるかもしれないし、再びいろんなものを築いていくのに少々疲れているというのもある。そういったわけで企業訪問など必要な場合以外は家と事務所を往復する毎日で、チェンナイ市内の観光名所を積極的に訪れたりレストランを開拓したりといった意欲もあまり湧かなかった。

2時間のフライトを終えて飛行機はアーメダバード空港に着陸する。つい先日のことのようで、懐かしいというよりは2、3日の出張から帰ってきたという気分に近い。
さてと行くか。飛行機のタラップから一歩外に足を踏み出すと、ドライヤーのような熱風に包まれる。5月半ばと言えばアーメダバードは夏の最盛期。湿気がなくただただ乾燥した高温の風に当たると一年前はこんなだったかなと思う。チェンナイのねっとりした暑さともまた違う。

空港の建物を出てエアコン付のタクシーに乗り込み市内に向かう。車の中から公爵に電話をかける。
着いた?と懐かしい声がする。気になっていたことを公爵に訊ねる。
「グループ・パーミット上手くいきました?」
「昨日何とか降ろしてもらったけど大変大変。結果3ユニットだけど何とかなるでしょ」
無事に済んだようだ。じゃあホテルで会いましょうと公爵に言って電話を切った。

今日は5月16日土曜日。今日はこれからアーメダバード日本人会の第1回定時総会が開催される。去年の11月に設立した日本人会は3月で最初の年度が終了した。他の日本人会でも、一つの年度が終了すると決算報告や役員改選のために定時総会が開かれる。遅くても5月末までに開かれることが多い。
今回は新しい試みとして懇親会でお酒を提供することにしていた。グループ・パーミットを取得すれば許可された日時と場所でお酒を飲むことが可能なのだ。しかしこれを取る

のはなかなか厄介で、まずはイベントに付随して会食を催すという形式を踏まえなければならない。定時総会の開催は午後３時なので、当初夕方４時から会食ということで申請したのだが、酒を出す時間には早すぎるという指摘が当局から入った。このため書類上は、夜８時から会議を開き夜９時から会食を行うという体裁を整え当局に申請した。

グループ・パーミットのユニット割当数は参加人数によって決められる。参加者のパスポートのコピーとインドへの直近入国日を当局に提出しなければならないため、公爵と僕はこれらをお願いして回った。約３０名分かき集めて何とか３ユニットがおりた。一人大瓶１本しか当たらない計算だが、飲まない人もいるだろうから何とかなるだろう。

総会開始１時間前に会場のマリオット・ホテルに着く。アルコールに対する緩和政策がとられているのか最近酒を販売する場所が少し増えた。以前は近くに３か所しかなかったのだが新たに２か所増えた。マリオット・ホテルは新しく増えた一つで、ここでお酒を買えばすぐに冷蔵庫で冷やしてもらえるという理由で総会の会場が決まった。

２階のリカーショップに向かう。「いよぅ」と公爵が手を挙げた。

黒天井に黒い床の部屋には壁一面にワインとリキュールが並べられ、バック・ライトの明かりでボトルが光っている。禁酒州にしては場違いなほど高級な雰囲気を醸し出している。酒の種類も多い。チェンナイなんか国産のスーラ・ワインですら置いてないんですよと文句を言うと、「いいじゃん無制限に買えるんだから」と公爵から返ってきた。

さて、３ユニットの使い道だが、２ユニットでビール大瓶２０本と残り１ユニットで赤ワインを３本買った。これ以上は誰かの持ち込みに期待するしかない。

「あと個人的にもいい？」と公爵にお願いされる。

いま僕の手元にはチェンナイから乗ってきた飛行機の搭乗券がある。これがあればその場で観光客用のリカー・パーミットを作ってもらえる。観光客用は６週間有効で２週間ごとに２ユニットずつ使用できる。リカーショップの隣にある受付でパスポートと搭乗券を出して観光客用のリカー・パーミットをお願いすると、宿泊ホテルから発行してもらった滞在証明か宿泊している知人宅の電気代の請求書を出せという。以前空港でリカー・パーミットを取った時はそんなこと言われなかったのに。さっそく問題が発生したよと公爵に告げると、たまたま公爵のカバンの中に電気代の請求書が入っていたので難を乗り切ることができた。２ユニットが瞬く間に公爵のビールに替わる。

用事を済ませた僕たちは3階の会場に入っていく。相川さん、トシさん、トキボー、懐かしい顔ぶれに会い「チェンナイ生活はどう?」と訊かれる。ノンベジ・フードや酒はすぐに手に入るけど、まだ知り合いも少なくてそんなに楽しめてませんよと答える。

そんな中「小林さんですか?」と訊ねられたのでそちらを向くと、小柄な女性が立っていた。海原さんの後任の日本語教師として4月にアーメダバードに着任したという。ＡＭＡでの日本語の授業の話を聞いていると、日系企業に勤めるおじさんや若者たちの前で話をしたことがつい最近のように思える。

ノンベジ・フードを売っているところがよく判らないと困っていたので、「大丈夫。マグソンとかアイシーピックとかのチェーンがありますよ」と太鼓判を押しておいた。

室内を見回すとインド人顔の女性もいた。

「こないだ入会受付の連絡をさせて頂きました」と言って声をかける。

虎井田さん。祖父の時代に日本に渡り、トライデン商会という屋号で貿易商を営んでいたという。「商売は父の時代に畳んでますけどね」と言う虎井田さんは、見た目はインド人だが日本で生まれ育った正真正銘の日本人。日本人と同じ感性にインド人の容姿。会員のバラエティもだんだん富んできたなと思う。

4月から今日までに２０人の入会申込があった。グジャラート州南部のスーラトという町に最近進出してきた日系企業から一気に9名の申込があったのが一番大きいが、虎井田さんや大学生など企業の駐在員以外のメンバーも増えた。江本さんや海原さんのようにすでに日本に帰国した人もいるが、今日時点の会員数は６３名と、一気に増えた感がある。

出席者が集まったところで定時総会の開催となった。まず事務局から出席者と委任状出席者の人数を読み上げ、定足数に達していることを報告する。そして議長である細江会長にバトンタッチする。

細江会長から２０１４年度の事業報告と収支決算報告について説明が行われる。

「……昨年は忘年会を開催し、続いて今年に入り総領事との意見交換会や視察ミッション団との懇親会が開催されました……」

朝起きると肌寒さを覚えた1月の気候が遠いことのように思える。年度最後の3月に実施した工場見学会に話が及ぶとつい昨日のことのように感じる。日本人会の最初の年度は半年間もなかったが、忘年会や工場見学会が開催できてよかったと思う。これらは形や場所を変えてこれからも続いていくだろう。

２０１５年度の事業計画と収支予算もすんなり承認され、総会は淡々と進行していく。出席者の顔ぶれも少しずつ変わる。日本に帰ってしまった江本さんや海原さんに今日の様子を見てもらいたかったなあ。

議事は役員選任に移っていく。役員の任期は1年。定時総会で毎年選出される形を取っている。

細江会長から役員選出について出席者に意見を求める。

しばらくの静寂。そして、静寂が破られる。

「では、次期役員ですが、会長には現副会長の相模工業の相川さん、副会長には音無ベターライフの坪井さんにお願いしたいと思いますがいかがでしょうか」

静寂のあと再び静寂が破られる。会場から叫ばれる異議なしの声。無事役員の改選も行われた。

役員の選任は前もって相談されたものだった。日本人会の役員は会長と副会長の２名しかいない。役員改選で2名とも入れ替わってしまえば、会の運営に支障をきたすことも考えられる。そこで副会長に就いた者が翌年会長に就くという形で順送りにしていくことを慣行にしていけばいいのではないかという案が出た。この案は他の日本人会で採用している方法を少し改変したものである。もちろん自発的にやりたいという人が出てくれば、２名とも入れ替わっても全然問題ない。慣行はあくまで慣行でしかない。その時々の会員が一番いいと思うやり方で会を運営していったらいいのだ。

次期会長の相川さんの挨拶の後、細江さんから事務局の交代も発表された。

「本日をもって小林さんが事務局を退かれ、２０１５年度は久本さん朝倉さんの２名で事務局を運営していきます」

ようやくこの時が来た。

今日僕は日本人会の事務局を降りる。日本人会の運営に関わることがなくなるのはとても寂しいが仕方ない。ここに住んでいる人で回していくのが一番いいのだ。久本さんは日本に帰っていることも多いけれど、朝倉さんはデリーからアーメダバードに転任になったばかりだからアーメダバード暮らしが続くだろう。何も心配ない。

日本人にとってあまり生活インフラの整っていないアーメダバード。水曜日にたむらで夕食を食べながら、ノンベジ・フードの入手場所や出張者を連れて行けそうなレストランを教えてもらった。そういう付き合いはやがて共通の意識へと昇華する。アーメダバード

で生活を同じくする者としての共通意識。厳しい環境だからこそ、大変なことや面倒なことを愚痴にし笑い合える雰囲気。家族を日本に置いてきている僕にとってはこれが一つの家族みたいなもの。だから今日この場に立って思うのは「帰ってきた」という思いなのだ。

しかしそれは僕の思いであって、人それぞれ思うことは違う。日本人会はこの先どれだけ続いていくか判らない。でも、その時居る人間がその時持っている思いでやっていけばいい。日本人会があって良かったなと思う人がこの先少しでもいてくれたら、ここに日本人会ができたことの意義があるのではないだろうか。僕にとってアーメダバードで暮らした一年間は幸せだった。そして日本人会に関わることができたのもまた幸せだった。

議事は全て終了し連絡事項に入る。久本さんから日本人会のホームページについて説明が行われた後、細江さんから、最後に持木さんから連絡がありますとアナウンスがあった。

少しニヤついた面持ちでモティが演台につく。

「えー突然ではありますが、アーメダバード日本人会に会章を作ってはどうかと考えています。これまで調べたところ、他の日本人会で会の紋章やマークを作っていることはないようです。これからイベント等を開催する時、会章や会旗があれば皆をまとめる力になるのではないかと考えております」

会場になるほどといった空気が流れるが、映し出された会章の斬新なデザインに皆ポカンとしている。

「会章のデザインの意味ですが、まず日本国旗から取った真ん中の日の丸の周りに上がり藤を配置しています。藤は通常下がるのが本来の姿ですが、アーメダバードの発展を願い上がり藤としました」

一本の茎からいくつもの葉が外に向かって伸びている。

「そして中央のデザインですが、未開拓のグジャラートを切り拓く日本刀と突き進む槍です。上の赤い星は北海道開拓使が掲げていた北辰旗に見られる北辰星から取りました」

上に突き上げられた槍の両脇から、ニョキと突き出た2本の腕にそれぞれ日本刀が掲げられている。

「Ahmedabad の ed（エド）の文字は伝統工芸の藍染、江戸紫を意識しています。テキスタイルで有名なグジャラートと通じるものがあります」

モティがそう説明すると、ほうという空気が会場に流れた。

そして細江さんが締めくくった。

「この会章、会旗については原案の段階です。みなさまのご意見を頂戴しながらいいものを作っていけたらと思っています」

あんた上手いこと説明したよという目でモティを見ると、「でしょう」という目でモティも見返してきた。

この会章はしばらく前からモティが温めていたアイデアだった。最初はフットサルの同好会を作るのに合わせて旗も作りたいとのことだったが、人数が集まらず同好会はできなかった。しかし会章の話だけは残った。モティが日本にいる友人のデザイナーにお願いして原案を無償で作ってもらった。

実はこのデザイン、東アフリカの某小国の国章に瓜二つなのである。夏にドバイに旅行に行った際、某小国から来た異性との出会いがあったとかなかったとか。あの時２人の荷物を持ってホテルに帰っていなければ僕も真実を確かめられたのに。

定時総会は無事終了し、懇親会の場でビールを傾けながら公爵と言葉を交わす。

「で、チェンナイはどうよ？」

どう？と言われてもなかなか返答に困る。ほとんど家と事務所の往復だし、クライアントと外で飲んだり、商工会の集まりに参加したりしているとはいえ、新参者という意識が抜けずまだ心から楽しめていないのだ。

「まあ、ちょっとした日本食レストランにも行きましたよ。ただ、まだそんなに町に慣れていないんですわ」と笑う。

「何その楽しんでなさそうな言い方？」公爵からの突込みが入る。

しばらくして、見透かしたかのように

「チェンナイ正解だよ」とポツリと言った。

「３年先だったらアーメダバードもかなり活気づいているかもしれないけど、まだ１、２年の間はこの調子じゃないかなあ」

その言葉を聞いて、不本意にもアーメダバードを離れなければならなかった気持ちがずいぶん和らいだ気がした。

しかし直後こう言われる。

「でもね、アーメダバードも負けないよ」

「今度アーメダバードに帰ってきたら『お宅どなたでしたっけ？』ということになるかもしれないよ」

そう聞いてもやはり僕はこう思う。日本人会を託せるのはこの人しかいないと。結局今年も会の役職に就くことを固辞していたが、目に見えないところで日本人コミュニティーを引っ張ってきたのは間違いなくこの人なのだ。

さっき2ユニット譲りましたよねと言うと、だから何？という顔をされる。構わず続けて、

「あと頼みまっせ」

と言うと、公爵は

「えーやだよ」と笑いながら髭を震わせていた。

２０１４年2月にインドに来て、アーメダバードで１３か月半、チェンナイで1カ月半、合わせて１５か月のインド生活を送ってきた。これまで、デリー、ムンバイ、プネ、ベンガルール、ハイデラバードといった大都市にも出張しいろんな人にも出会った。ほとんどが仕事で出会った駐在員。それぞれ住んでいる場所で少しでも楽しく快適にやっていこうと工夫していた。美味しい店を開拓する、皆で集まってスポーツをする、ヨガやアーユルベーダを通じて地域と関わる。インド各地にはそういう日本人がいてコミュニティーを作っている。アーメダバード日本人会はインドで最も新しく最も小さい所帯だが、数年後にはインドのどこかの都市にまた新しい日本人会が誕生しているかもしれない。

今日僕はここに来て何かが背中を押してくれているような気がしている。

これまでチェンナイで半歩ほどしか足を踏み出してこなかった自分。でもチェンナイに戻ったら、もう少し踏み出してみようかな、そう思った。

## あとがき

これはインド・アーメダバードと僕の１５カ月の関わりを書いた物語である。日本人会の設立を話の中心に置き、アーメダバードの様子を周囲に散りばめた。

２０１４年２月、インドの会計事務所に転職した僕の配属先は、奇縁からアーメダバードに決まった。酒を飲まなくても大丈夫と面接で答えたのが配属の理由と後で聞いた。

グジャラート州知事時代に外資を積極的に誘致したモディ氏は２０１４年５月の総選挙で圧勝しインド共和国の首相となった。お膝元のアーメダバードは、デリー・ムンバイ間産業大動脈構想の中間に位置し恩恵を受ける可能性が高い。タタ・モーターズやフォード自動車はすでに工場を稼動させ、マルチ・スズキやホンダも工場の建設に取り掛かっている。インドを代表する自動車産業の集積地になる可能性も秘めている。

ただ、インドは何でも計画より３割増遅れ気味に考えてちょうどいいくらい。僕はアーメダバードに駐在する初の公認会計士であったが、会社設立、税務、監査などの仕事はほとんど入ってこなかった。まだ何年か早すぎたのだろう。

日本人会は仕事と並行して進めようと思っていたアイデアだった。公認会計士となる前は、商工会議所の職員を長年やっていたことから、日本人の組織がないアーメダバードに日本人会か商工会を作りたいと思っていた。アーメダバードで暮らした１３カ月は、図らずもこちらの活動の方がメインになってしまった。

日本人会を作ろうと思った動機には、会と関わることで本業の仕事につながればいいなという邪な考えもあった。アーメダバードに進出する日系企業の情報をいち早く掴める立場にあるからだ。しかし、投資が凪のような状態になった大きな流れの中では、そんな策謀など簡単に吹き飛んでしまった。そして最後に残ったのは、自分が気持ちよく過ごすことができたアーメダバードの日本人コミュニティーが永続していくようカタチにしたいということだった。

日本人会を設立するには、３つの重要な要素があると思う。

まず1つ目は、日本人会をやろうじゃないかという醸成感である。

集団にある程度まとまった醸成感があることが大前提である。僕がアーメダバードに来た時にはすでに日本食レストランでの集まりが恒例となっていた。また、細江さんや南さんが歓送迎会や飲み会を開いていた。これらの土壌がなければ、日本人会を作ろうという空気は育たなかったろう。在住日本人の集まりの場を作るという意味で僕も税務・会計のセミナーを開いたりしたがこれはあまり貢献しなかった。ただ誰よりも多く日本人在住者に会い、日本人会を説いて回ったという自信はある。

2つ目は、きっちりした枠組みである。

商工会と違い、日本人会は在住日本人の集まりである。法人会員のない個人会員のみの組織であれば、本来は誰彼希望する者が自由にリードしていけばよい。しかし、海外の各都市に作られる日本人会は、どうしても進出日系企業の駐在員がメンバーの多数を占めるようになる。好むと好まざるに関わらず、会社を背負っているという事実を無視することができないのだ。商工会議所で様々な団体を運営した経験から言うと、会を永く継続させていくための一種の秩序や重みといったものがどうしても必要である。きっちり会則を作り、周囲が納得する人を代表に頂き、総会というセレモニーを経ていくことも大切である。

3つ目は、他所との付き合いである。

日系企業がこれだけ世界各地に進出している状況を考えると、世界の主要都市にはすでに日本人会が存在しているのが自然である。地域に新たに日本人会を作るとなると、すでに存在している日本人会との関係も重要になる。アーメダバード日本人会を作る時にもそのことが気になり、近隣の日本人会にまず話を通しにいった。日本人会がいったん設立されてしまえば、他の日本人会との付き合いは否応なく始まる。もはや死語かもしれないが「仁義を切る」ということが、その後の良好な関係を維持する上で重要である。

世界に進出し暮らす日本人の数が増え続ける傾向はまだまだ続くだろう。既存の日本人会の会員数が増えすぎてカバーしきれなくなり、より近い地域でまとまって新たな日本人会を作ろうという動きも今後出てくるだろう。そのような時、日本人会設立の参考になればと思い、アーメダバード日本人会の設立を物語にしてみようと思った。これは、僕がアーメ

ダバードでお世話になった人に向けて書いたものでもあるし、将来、日本人会を設立しようと思っている人に向けて書いたものでもある。日本人会はその地域に住む日本人が主役である。自分たちが最も快適で楽しいと思える形を作っていったらいい。そんなコミュニティーが世界のあちこちで生まれ発展していくことを僕は願っている。

２０１５年９月吉日
インド共和国チェンナイ市にて
小林祐介

インド各地の日本人会・日本商工会

| | デリー | ムンバイ | バンガロール | チェンナイ | コルカタ | プネ | ハイデラバード | アーメダバード |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. 日本人会 | | | | | | | | |
| 設立 | 1998年3月 | 不明 | 1993年4月 | 2009年4月 | 不明 | 不明 | 2002年4月 | 2014年11月 |
| 会員数 | | | | | | | | |
| 個人（人） | 約2,200 | 565 | 約800 | 752 | 86 | 192 | 49 | 47 |
| 法人（社） | 192 | 111 | 123 | 65 | 14 | 50 | 16 | 21 |
| 年会費 | | | | | | | | |
| 個人（ルピー） | 3,000 | 600 | 200 | 2,400 | 2,400 | 都度徴収 | 都度徴収 | 1,000 |
| 法人（ルピー） | 54,000(2人以下)～144,000(26人以上) | 30,000(邦人1人)～120,000(邦人10人以上) | 8,400/人 | 9,600/人 | 60,000/社 | 不明 | 不明 | 無 |
| 女性の集まり | さくら会 | 桜会 | | ニームの会 | | | | |
| | | | | | | | | |
| 2. 日本人学校 | | | | | | | | |
| 開校 | 1964年 | 1971年 | 2000年 | 1975年 | 無 | 無 | 無 | 無 |
| 種別 | 日本人学校 | 日本人学校 | 補習授業校 | 補習授業校 | 無 | 無 | 無 | 無 |
| 児童（人） | 227 | 24 | 77 | 51 | 無 | 無 | 無 | 無 |
| 生徒（人） | 58 | 6 | 20 | 14 | 無 | 無 | 無 | 無 |
| | | | | | | | | |
| 3. 日本商工会 | | | | | | | | |
| 設立 | 1996年以前 | 不明 | 2011年4月 | 2004年4月 | 不明 | 無 | 無 | 無 |
| 会員企業（社） | 391 | 111 | 132 | 180 | 18 | 無 | 無 | 無 |
| 会費（ルピー） | 40,000 | 無 | 15,000 | 18,000 | 24,000 | 無 | 無 | 無 |

注）
上記データは各会のウェブサイトや合同連絡会配布資料等から収集。数値等はデータ収集時点の最新のもの
日本人会の個人会員数は家族会員等を含めているところとそうでないところがある
デリーにおける日本商工会の名称は「インド日本商工会」
ムンバイでは日本商工会を置かず日本人会の中に商工部会を設置している
アーメダバード日本人会には法人会員は設けられていない。上記数値は個人会員が所属する会社・団体の数